

意図せず世界を手中に収めよう

マーズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある孤児院の院長が周りのヒロインたちに勘違いされて、いつの間にか世界征服を企てる勢力のトップになってしまう話。のんびり投稿していきます。

目次

0章 院長

院長のクズ日記

1

クロのお話

9

シロのお話

17

スコールのお話

25

エムのお話

35

院長のクズ日記2

43

オータムのお話

51

シャルロットのお話

61

真耶のお話

70

院長のクズ日記3

78

クラリツサのお話

86

チエルシーのお話

95

東のお話

105

1章 理事長

院長のクズ日記4

115

クロとシャルロット

125

クロと院長

133

シロと楯無と一夏

141

シロと院長

149

シャルロットと本音と一夏

156

シャルロットと院長

163

真耶と千冬と一夏

170

真耶と院長

177

0章 院長 院長のクズ日記

Q月Q日

今日も俺は生きていた。

よかった……本当によかった……。

まさか日本に住めないことがこんなにもつらいことだったとは……。

人は失って初めてそのものの大切さに気付くとか言うけど、本当それですわ。

ボタン一つで明かりが手に入り、蛇口をひねるだけで綺麗な水が流れ出す。

ああ……文明の利器って素晴らしい。

本当、俺を転生してくれたのはいいんだけど、何でこんな土人国家になんて生まれさせてんだよ。

薄汚い野郎どもがピストル持って撃ち合うのが当たり前前の国っておかしいだろう。

国家権力仕事しろ。

そもそもこの国ってどこだよ。

世界地図見たけど、俺が元いた世界にはなかったぞ、こんな国。肌の色も統一されていないし、一体どういことなんだ。

あー、ちくしょう。色々考えていると腹立ってくる。

俺を転生させたやつめ、いずれ痛い目に合わせてやる。

……勿論俺じゃなくて孤児院の奴らだがな。

しかしこの国で孤児院やっていて正解だったな。

戦争ばっかりなんでもしやと思つて作つてみたが、やはり戦争孤児の数が凄まじい。

そんな彼ら彼女らを、餓別にともらつた大量のお金を使ってかき集めてできたのが孤児院だ。

こうすることで俺はいざというときの盾を手に入れた。

やったね、俺くん！老衰で死ぬ未来予想図に一步近づけたよ！

しかし、俺つて中々年取らないよね。

怖い奴らに銃とか持つて追い掛け回されたこともあつて、自分の年齢が何歳かという詳しいことは分からないけど、中々いい年していると思う。

そんな長い間孤児院をやっていると、餓鬼だつた奴らもどんどんと大人になる。

子供より役に立つ盾が手に入ったと喜ぶが、そいつらは薄情にも次々にこの場所から出ていきやがった。

……ちつ、恩知らずめ。

とくに何だか有能そうだつた金髪くしゃくしゃ女と男勝りのレズ女、ちつこくて中々の中二病の女、あぎとビッチ女に明るいを通り越してうるさい女、マジ有能で俺の劣等感をくすぐりまくる二人の女に、おっぱいお化け女。

あいつら全員出ていきやがつて……。

将来の俺を何とか守つてもらおうと一生懸命に世話してやったのに……。

くつ、涙が止まらない……。

ま、まあ一応無愛想な女と子供煩惱女が残つてくれたし、大丈夫だろう。

二人とも俺の何十倍も有能だし、面倒なこともいろいろやつてくれる。

これからも俺………とまあ子供たちをよろしくお願いします！

Q月W日

最近武装勢力の奴らがうざい。

事あるごとに餓鬼どもを『貸せ』やら『くれ』やら……黙れよ。

前々からちよくちよくこういった脅迫は来ていたが、最近やけに多い。

また大きな衝突でもするのか？

マジ余所でやれよ。迷惑なんだよ、死ね。

大体俺が餓鬼どもを貸し出すわけねえだろ。

あいつらめちやくちや強いし、俺を守る有能すぎる盾だぞ。

いや、ほんと……強すぎて何だか腹立ってくるくらい。

この前餓鬼が『かけっこしよう！』なんてことを言うてるから、大人のを以てして圧倒しようと思っただけで走っただけなのに、逆に圧倒された俺だったし。

でもあんなのってないよ……一桁の年齢のガキが、五十メートルを六秒台って……。

……思い出すのはやめよう。ムカつく。

そうそう、ムカつくのは武装勢力のくそどもだ。

いちいちこっちくんよ。

あとクロもシロも中に入れんじやねえよ、止める。

その人たちいらぬ人たちだから。俺にまったく必要ない人たちだから。

Q月E日

風呂っていうのは、俺にとって唯一の逃げ場なのだ。

俺を養い守ってもらうために、餓鬼どもに俺の本性を見せるわけにはいかない。

というか見せようと思っても見せられない。

小さなころから培ってきた究極日本人兵器・愛想笑いは鉄壁である。

最近いつでもニコニコしているみたいだし……自分ながらキモい。

いや、これはどうでもいいか。風呂の話だ、風呂の話。

俺の風呂は特別に個人用となっている。

もともと日本人な俺は大浴場にも入りたいのだが、そこは餓鬼がだいたいいつも誰かしら入っているので行けない。

だから今日も俺は小浴場で一人楽しく風呂に入っていたわけだ。

そこに乱入者が入ってくるまでは、本当に楽しかったなあ……。

俺がぼけーっとしていると、いきなり音を立てて扉が開くんだ。

ちよつとビビった。

訝しげに扉を見ると、仁王立ちで堂々としているクロがいた。

……いやー、突っ込みどころが満載ですな。

何でここにいるの？何で全裸なの？隠す気ないの？……俺専用だよね？おっばい万歳。

色々疑問が頭に浮かぶが、俺は相変わらず愛想笑いニコニコ。

しかし相変わらずクロの身体すげえわ。

ちまっこい奴なのに、胸の大きさは随一じゃねえか？

うん、頭を洗うのは面倒だが、それに見合った対価だな。

それに髪もきれいなものだ。触っていたら思ってしまう。

頭を洗ってやるとき、あいつは超無防備に俺に背中をさらす。

くそお……後ろから思い切りあのおっばい触りたいのに……。

どうしても腕が動かないんだ！どうなってんだ！

完全に欠陥があるじゃねえか！しつかり俺の身体作れよ、ぼけえ！

Q月R日

この前はびっくりしたな。

朝起きたら全裸のクロが、同じベッドで寝ているんだもんな。

むにと形を変えた巨乳が目にも毒でした。

本当、触れたらなあ……。

今日はシロが餓鬼たちに行っている授業を受けてみた。

小さなガキなので、大人の知識を以てあいつらを打ちのめして優越感に浸ろうと考えたわけだ。

まあ結果、俺何にもわからなかったんですけどね。

そもそも自分のやるべきことや面倒なことを周りに押し付けまくっている俺ができるわけがなかった。

でもおかしいよ……あんな小さな子供たち相手に何で四則計算とか教えないの？

それだったら俺でもできたのに……。

シロの奴も呆れたように見てくるしさあ……。やめろよっ！そんな目で見るなよっ！

むかついたので、彼女の綺麗に整えられた白髪をぐしゃぐしゃにしてやった。どうだ。

ただまあこいつにはいろいろと感謝していたりする。

面倒くさいガキどもの世話を一手に引き受けているからな。

でもうるさい餓鬼どもを黙らせる『ご褒美』ってなんだったんだ？

もしかしてエロいこと？

クロには一歩劣るものの、かなりグラマラスなシロのエッチなこと？

……俺もご褒美くださいっ!!

Q月T日

シロの授業を受けたあの日から、ちよくちよくシロに勉強を教える
もらうことになった。

……いや、本当勘弁してください。

別にいいんです、俺馬鹿でも。

今更勉強なんてしたくないんです。

勿論そんなことを言って機嫌を損ねられて出て行かれたら困るの
で、スーパ―愛想笑いを発動させて勉強する。

ただ、あいつもガキどもに教えていることもあつて、教え方が非常
にうまい。

最近少し楽しくなってきたような……気がしないでもない。

たまに甘えてくるクロと鉢合わせしている。

まあこいつら仲が良いからな。俺の部屋に来るのも、待ち合わせ感
覚なのだろうか？

それはそれでやめてほしいけど。

今日は久しぶりにスクールと会った。

あいつは俺を見捨てて孤児院から出て行った薄情ものだが、今の仕
事はうまくいつているらしい。

もう戻ってきて俺を養ってくれてもいいのよ……？

スクールがこの国でも一番お高いマンションに滞在していると聞
いて、意気込んでそこに乗り込んだ。

いやー、上から見下ろす世界っていうのもいいものだ。

某大佐の発言も良くわかる。

その後スクールと会食したのだが、あいつの露出度高すぎ。

おっぱいなんて大切な場所しか隠れてなかったじゃん。

あんなドレス、まああいつには似合っていたけどドギマギしてしま
う。

ルパンダイブしてみたいが、やったら多分頭を吹っ飛ばされるからやめておいた。

途中で彼女に電話が着ていたらしく、その相手は多分エムだな。声も聞こえたし、聞き間違えるはずがない。

その後はスコールに誘われるがまま、夜のお散歩としゃれ込んだ。

正直動きたくなかったが、スコールほどの美女と歩いていると他の男からの嫉妬の死線が気持ちいい。

優越感がパない。

あいつも見せつけるようにして腕を組んでくるし……。

でもおっぱい当てんなよ、興奮するだろ。

Q月Y日

スコールのやつ、これからちよくちよく顔を出すと言っていた。

よかった……有能な盾がまた一つ増えるんだね……。

でも前みたいに飲み屋をはしごすることに付き合わされるのは拒否する。

まだ居酒屋みたいな大衆の場所ならよかったのに、あいつの誘う店って全部おしゃれなんだもん。

緊張して酒の味なんてわからねえよ。

あと値段高い。ぼったくりだと思って目玉飛び出そうになったわ。

今日は珍しくエムが戻ってきた。

スコールとオータムと一緒に出て行った奴だが、こいつは物凄く強かった。

クロといい勝負していたんじゃないだろうか？

まあ戦っているところなんて危ないから、俺ほとんど見たことないけど。

そんなエムは俺と日向ぼっこがしたかったらしい。

ああ、ああ、いいとも。のんびり平和なら大歓迎だ。

やけに身体を近づけてきていたのも許容する。

まあこいつの身体ってクロやシロ、スコールに比べれば慎ましいものなので、そうそう興奮しないがな。

でも均整はとれているし、慎ましながらも女の曲線を描いているのは事実なので、あまり接触したくない。

身体まさぐれるのであればウエルカム。

そんなこんなでのんびり平和に過ごしていたのだが、それが唐突に終わりを告げたのはお昼であった。

なんとエムはお昼ご飯を作ってきていたのだ。

……もうエムじゃねえよ、お前。完全にエスだよ。魔王だよ。

そりゃあ俺だって美少女に飯作ってもらったら嬉しいさ。

多少まずくても喜んで食べる。

でも化学兵器と料理は別物だろう？

こんなもの食えるかとちゃぶ台返ししたい気持ちは心中に満ち満ちていたのだが、キラキラと目を輝かせて期待の視線を送ってくるエムに逆らうことはできない。

機嫌損ねられて一発でも殴られたらアウトだからね。

そして俺はサンドウィッチを手にとって少しの間逡巡し、覚悟を決めて口に含んだ。

……正直、その後のことはあまり覚えていない。

ただ口内に広がるとんでもない刺激とじやりじやりした触感だけは覚えている。

次に俺の意識が鮮明になったときには、もう夕方になっていた。

うーん……回復が早くなっている……。

嬉しいような、何だか悲しいような……。

とにかくエム一人で飯を作るのは禁止しよう。

クロのお話

音が何もしない廊下を歩くと、彼女の足音がやけに響く。

彼女は少女であつた。

身長は小柄で、眠たそうに瞼を半分閉じている。

そんな彼女の容貌は、寝ぼけた様子でもぞつとするほど美しいものだつた。

表情が無で固まっているからだろうか、冷たい凍土のようだ。

彼女の最も大きな特徴は、その真つ黒な姿である。

長い長い黒髪。彼女はそこを院長に撫でてもらうのが大好きである。

肌も褐色で、健康的な印象を与える。

身に纏っている服も真つ黒。

全て黒く染められていた。

しかしただ一点。黒く染められていない部位があつた。

それは瞼が半分閉じられている、瞳であつた。

そこはまるで血の池地獄のような真つ赤な色をしていた。

見る者を畏怖させるような、おぞましき色。

彼女は小さなころ、悪魔として周りの者から迫害されてきた。

殴られもしたし、蹴られもした。

数少ない食事を奪われたこともあつた。

しかし彼女は、今この真紅の瞳が嫌いではなかつた。

それは院長が褒めてくれたからだ。

おぞましき瞳を褒められたあの瞬間、この漆黒の少女は間違いなく院長にのめりこんでしまった。

「着いた……」

フラフラと危なっかしく、かつゆつくりとした速度で歩いていたの

で、お求めの場所に到達すると思わず声を漏らしてしまう。

彼女が立っているのは、一つの扉の前。

そこはこの孤児院の中で、院長だけが使うことを許されたお風呂であった。

そんなある意味神聖な場所に、この少女は何の気負いもなく脚を踏み入れる。

勿論、一般の孤児院のメンバーが入ろうとすれば、キツイ処罰を受ける。

院長は別にいいと言っているが、彼を妄信的なまでに慕う彼女の相棒的存在が、それを絶対に許さない。

彼女自身も、他の誰かがここを使うことは良いことだとは思わない。

ここを使えるのは院長と自分、そして相棒である彼女だけでよいのだ。

他はいらないし、必要ない。

扉を開けると、着替えを行う場所に入る。

浴室内には明かりがついていた。

相棒である少女は孤児院の子供たちに授業を行っていたので、ここを使っているのは必然的に院長だと判断できた。

院長は男で、彼女は女である。

この時点で普通なら彼女はここから立ち去るべきなのだが、彼女はそんなそぶりを一切見せず、おもむろに服を脱ぎだした。

簡素なワンピース型の服だったので、それを脱ぎ捨てると簡単に裸になる。

普段なら面倒ではあるが一応下着を身に着けているが、風呂に入るためにここに来たので、その前に脱ぎ捨てていた。

そうなる今彼女を覆い隠す布は一枚たりともないことになる。

小柄ながら不釣り合いとしか言いようのないほど、たわわに実った双丘。

よく眠るが、それ以上に運動することがあるがゆえに引き締まったお腹。

綺麗な括れまでできている。

むっちりとした肉の詰まった安産型の臀部。

肉付きの良い太もも。

それらすべてを程よく焼いている褐色の肌。

魅力的で男の目を引いて止まないグラマラスな肢体が、露わになる。

間もなく全裸となった彼女は、何ら躊躇する様子を見せず浴室の扉を開けた。

「……来た」

彼女——クロが入った先にいたのは、彼女が予想した通り院長であつた。

彼はクロがいきなり侵入してきたことに一切驚いた様子を見せず、優しい笑顔で彼女を迎え入れた。

その笑顔を見て、クロの胸がぼかっと暖かくなる。

クロはシャンプーを出して、小さな手でわしゃわしゃと泡立てる。そしてしっかりと泡立ったそれがのつた両手を院長に差し出す。

「……洗って」

そう言つて泡を差し出したクロに、院長は苦笑しながらそれを受け取る。

クロは彼に背を向けて、長い黒髪を水でぬらす。

今彼女はこれ以上ないほど無防備な姿を、院長にさらしていた。女が男に見せる隙ではない。

後ろからは、髪の毛の合間から見られる色気のあるうなじや、後ろからでも分かるほど隆起した乳房。

椅子に座つて柔らかかそうに形を歪める臀部が見えている。

クロの極上の身体でこのような無防備な姿を見せられたら、男はどうにかなつてしまふそうだ。

だがクロからすると、院長になら何をされたつて構わないのだ。

彼が『おっぱいが好き』だと言えば、クロは何のためらいもなく胸を差し出す。

彼が『あいつ邪魔だな』と言えば、たとえ相棒である少女でも殺す。

彼が『お前死んでくれないか』と言えば、喜んで自害する。

クロは、院長に対して激しく歪んだ愛情を持っていた。

彼こそが至高の存在であり、頂点なのだ。

「……やい、やい」

院長に頭をわしわしと洗われ、蕩けるような声を漏らしている彼女の姿を見れば、そんな歪んだ思想を持っていることは全く想像できない。

しかしクロは、彼が自分の考えを知っているだろうと考えていた。

彼に隠し事は通用しない。

彼は何でも知っている。

だが、そんな歪んだ自分を彼は受け入れてくれている。

それならば、別に自分の恥部を見られようがまったく問題ない。

クロは身体を預けるように院長に寄りかかりながら、彼と触れ合う時間を幸福に思うのであった。



クロが所属しているとある孤児院だが、現在ほとんど犯罪に巻き込まれることは少ない。

それは今までの経歴が、テロリストや武装戦闘員たちに知れ渡っているからだ。

『この孤児院を攻撃した奴らは、誰も生きて戻ってこない』

そんな馬鹿なことがあるかと、何人もの人間が攻撃をしかけ、また彼らも戻ってくることはなかった。

おそらく彼らは銃殺されたのだろう。

実際、孤児院の周りには銃を持って警戒している子供や大人が大勢いる。

彼らに撃ち殺されたとみて間違いない。

しかし、死体の中にはおかしなものもあつた。

それは何も外傷がないのに、息絶えている人間。

何故死んだのか。それが分からないことに、不気味さを感じるテロリストたちはここを狙わない。

だが、過ちは何度でも繰り返されるものである。

「……へ、へへっ、意外と簡単に侵入できるじゃねえか」

一人の男が、孤児院の敷地内に侵入する。

男はこの地域で衝突している二つの勢力の片側に属する者だった。

彼がここに侵入した理由は、院長の拉致であつた。

現在、男の属する勢力ともう一つの勢力は、力の拮抗によって膠着状態に陥っていた。

これを打開するには、優秀な兵力を吸収するしかない。

その優秀な兵力として真っ先に頭に浮かぶのが、この孤児院である。

ここを守護する孤児たちは、非常に優秀な戦士であつた。

孤児院を攻撃したりすると、悉く撃退されることがそれを示している。

彼らを自勢力に引き込まられればいいのだが、彼らは金でも女でも、何を対価にしても勢力に吸収されることを拒んだ。

彼らが守り戦うのは、全て恩人たる院長のためである。

そのことを知った勢力のとある幹部が、この男に命令を下したのである。

『院長を生きのまま捕らえよ』

彼を手中に収めると、あの軍事力は全て自分のものとなる。

そう判断した幹部は、この男に拉致を命じたのである。

男は昔から、潜伏や拉致、暗殺などを得意としていた。

だから今回の仕事もあまり気は進まないものの、達成することはできると思っていた。

この仕事を達成したら、自分は勢力の中で幹部に登り詰めることができる。

男は未来の自画像を思い浮かべ、唇を歪ませる。

「さてと、いつ気づかれるかもわかんねえし、さっさと終わらせるか」

男が出たのは、広い庭だった。

辺りに自分以外の人影はない。

だが自分の上司である幹部が欲しがると、ここの警備隊は優秀だ。

いずれ自分が侵入したこともばれるだろう。

素早く任務を達成し、勢力に帰還しよう。

そう思い男が一步足を踏み出した、その時だった。

「……あ？」

男の視界が変化する。

男はなんと転んでいた。

別に段差があるわけでもない、平坦な地面である。

それなのに男は地面に顔を付着させるほど、豪快に転んでしまっていた。

何が起きたのかと脚を見ると、そこにはあるはずの脚が一本しかなかった。

千切れた脚が近くに寝転がっている。

——脚が引きちぎられていた。

そのことをようやく理解した男は大きな悲鳴を上げようとして――

「ダメ」

声を上げることはできなかった。

男の首には小さな手が食い込んでいた。

喉を塞がれ、声どころか息もできなくなる。

首に食い込んだ手で、男は持ち上げられる。

男は自分を掴みあげている人物を見て、驚きを隠せない。

「(な、何でここに……ISが……っ!?)」

現存する全ての兵器を凌駕する超兵器、IS。

全て国家に管理されてあるはずの戦略兵器が、どうしてこんな孤児院にあるのか？

男が考えても分かることではない。

彼の首を絞めているISは、真っ黒であった。

夜の闇よりも深い黒。

全てを塗りつぶすような鈍い黒だ。

「……大きな声を出しちゃダメ。……いんちよーに聞こえちゃう」

「が……あ……！」

院長……つまり自身の首を締め付けるこの女は、孤児院の子供だった。

首にかかる圧力がどんどん強くなっていく。

男は薄れゆく意識の中で、自分を殺すであろう女を見る。

朦朧とする意識の中では、あまり彼女の様子をうかがい知ることはできなかった。

ただ男が最後に見たのは、血より濃い深紅の双眸であった。



「……これ、片付けておいて。……いんちよーの目が汚れる」

「はい」

息絶えた愚かな侵入者から手を離す。

まるでごみのように地面に捨てる。

もうクロは一度たりともその男を見ることはなかった。

彼を殺したことに、何ら感慨を抱いていない。

院長に手を出そうとしたのだから、殺されて当たり前。

そういつた考えがクロの中にはあった。

彼女の前では、孤児院を警備するメンバーが死体の処理をする。

皆院長を敬愛する者たちだ。

「こいつ、誰の命令で動いたのでしょうか？」

「……知らない」

警備隊の一人が懸念を口にするが、クロはそれを簡単に切り捨てる。

正直、彼が誰の命令で動いたのかなどどうでもいいのだ。

院長に敵対するのであれば、クロの敵である。

全て殺し、彼の前の障害を吹き飛ばす。

クロの考えは非常に明瞭で簡単であった。

それにそういったことを考えるのは、自分ではなく相棒の少女の仕事である。

そもそも一生懸命考えても、クロは分からないだろう。

クロはここで一つ欠伸をする。

つい先ほど一人の人間の生命を終わらせたとは思えないほど、のんびりとした雰囲気醸し出していた。

「……いんちよーと二度寝しよ」

そう言っただけでクロはフラフラと危なっかしい足取りで、院長の部屋に向かつて歩き出した。

その十分後、男が殺された場所からは誰もいなくなったのであった。

シロのお話

孤児院では、ある程度の年齢に達すると多くの者が外の世界に巣立っていく。

ゆえにここでは社会常識などの一般的なことを学ぶために、簡単な授業が行われている。

講師となるのは、外の世界に出た大人たちが主となる。

しかし誰も都合が合わなかった場合は、一人の少女が受け持つことになっていく。

「じゃあ今日の授業始めるわよー」

『はい』

そして今日も、大人たちと連絡が取れなかったので、その少女が教壇に立つ。

彼女が授業を始めることを告げると、子供たちは元気に返事する。

そんな素直な反応に、思わず頬を緩める少女。

彼女のたぐいまれなる美貌と合わせて、まるで名画の一枚を見ているような気持ちになる。

「……で？なんでここにあんたがいるのかしら？」

先ほどまで美しい微笑みを見せていた彼女は、ジトーツとした半目になる。

そんな彼女の視線を受ける男は、それでも何でもないように笑っていた。

小さな子供たちに混じって、一人大きなお友達も授業に参加していた。

どう見てもなじみきれていない様子である。

「そう言ってくれるのは嬉しいんだけどねえ……」

ニコニコとしながら授業を受けたいと言う院長に対し、彼女――

シロはため息をつく。

それはこれから起こる騒ぎのことをすでに理解しているからだ。彼女に予知能力があるわけではない。

ただ何度も同じことが繰り返されているので、覚えてしまっただけである。

「わー、院長だー！」

「一緒に授業受けよー」

「俺院長の隣ー！」

「ずるいぞー！」

わーわーぎゃーぎゃーと元気に騒ぐ子供たち。

最早授業のできる環境ではない。

皆が皆、自身の慕う院長の元へと殺到する。

多くの子供たちに抱き着かれると、それは中々の圧力であるはずだが、院長は汗ひとつかかずに涼しい顔でそれを受け止めている。

彼のことを信頼しているのか、子供たちは遠慮なく身体を投げ出す。

もみくちゃにされている院長を見るのは微笑ましいのだが、しかしこのままではシロの仕事である授業がまったくできない。

「こら、あまり騒いでいると、ご褒美をあげないわよ」

『……………』

とくに声を張り上げたわけではないのだが、シロの聞き心地のいい声は部屋中に行き届いた。

『ご褒美』

それを聞くと、院長の近くで大騒ぎしていた子供たちが、一斉に静かになる。

さらに自分の席に大人しく座り、授業の開始を待っている。

「うん、よろしい」

子供たちの反応の良さに、シロは満足気に頷く。

これまでの教育の甲斐があったというものだ。

彼女は今日本行われるはずであった授業内容を急ぎよ取り替え、院長が来たとき用の授業に変更する。

「じゃあ教科書50ページ開いて。今日はそこからやるわよ」
そしてシロは、子供たちとなにより院長のために教鞭を振るうのであった。

「じゃあこの問題の答えは、院長?……残念、外れよ」



「今日はここまでで終わりよ。復習はきっちりしておきなさい」
『はい』

数十分の授業が終わる。

シロの言葉を聞くと、子供たちはいつせいに外に向かって走り出す。

休み時間が待ち遠しかったのだろう。

そんな子供たちの姿に苦笑するシロ。

「院長……」

シロの元に近づいてきた院長。

彼は優しい笑顔のまま、彼女に話しかける。

「あんたももつと勉強しなさい。また子供たちに笑われるわよ?」

そう言うと彼は困ったように笑う。

もう……とシロは嘆息する。

この反応を見る限り、やはり間違えたのはわざとだったのだろう。

ずっと……ずっと彼を見てきたシロは分かっていたが、今の受け答えで確信する。

子供たちの中には、勿論院長になじめていない子供もいる。

そんな彼らに、接しやすさをアピールするためにわざと間違っただ。自分が笑われてもその子供をなじませようとする優しさに、シロは

うつすらと笑みを浮かべる。

そんな彼女に院長は手を伸ばす。

その先はシロの純白の長髪である。

そこを優しく、丁寧に撫でる院長。

今より子供のときにされたことを思い出すシロ。

「もう……女性の頭を軽々しく触ってはダメよ」

そう言うスツと手を離し、謝罪してくる。

さらに、クロなら喜ぶと言いつくをする。

シロは彼の手を取り、また頭の上に置いて撫でさせながら呟く。

「まああの子ならね……」

シロは自分の相棒的存在の少女を思い浮かべる。

彼女の頭の中で、クロが院長に頭を撫でられて大喜びしている姿が簡単に想像できた。

クロは感情表現が豊かではないが、深く長い間親交を重ねたのであれば表情の機微は察することができる。

とはいえ、クロの感情を完全に理解できているのは、世界の中でも院長とシロだけである。

他の子供たちが院長に撫でられて悦んでいるクロを見ても、無表情でただ頭を差し出しているようにしか見えないだろう。

「……ええ」

これからも子供たちを頼むと言う院長のお願いに、シロはコクリと頷く。

確かに彼女は、『院長がそれを望み続ける限り』子供たちを守り続けるだろう。

その後もしばらく頭を撫でられたままだった。



「ふう……」

院長が緊急参戦した授業を終わらせたシロは、自身にあてがわれた部屋に戻る。

この孤児院の中でも幹部である彼女には、クロと同じく自分の好きにできる部屋が与えられていた。

一般の子供たちは大部屋で複数人での生活となる。

ちなみにクロは、自分にあてがわれた部屋があるのにもかかわらず、ほとんど活用していない。

普段はどこか日当たりのいい外で昼寝をしているか、警備隊に訓練をしているかである。

眠るときは八割方院長の部屋に侵入し、残りがシロの部屋に侵入してくる。

さて、部屋に戻ったシロは扉を閉めると鍵をかける。

こうすることで、この部屋を開けられるのは自分以外だと、マスターキーを持つ院長と武力でこじ開けることのできるクロだけである。

そして外界と交流を遮断したシロは……。

「はあああ……いんちよおお……」

顔をドロドロに蕩けさせていた。

「今日も優しく、美しかったわあ。あの笑顔、あの声、全て完璧じゃない！ああ、どうして院長はあんなにも素晴らしいのかしら？」

シロは一人身悶えている。

長く色素の抜けた白髪をブンブンと振り回している。

クロと同じく真っ赤な瞳は潤み、さらに充血している。

強い意志が感じられる凜々しい顔は、これ以上ないまでに蕩けて崩れている。

頬は真っ赤に紅潮し、よだれが垂れている。

豊かな身体を自身で抱き、くねくねと身体をくねらせている。

つい先ほどまで、子供たちに知識を与えていた厳しくも優しい教師の姿はなく、人気の高い娼婦よりも咽るような色気を放っている。

「んふふふ……」

血管が透き通るような白い肌の手を、自分の頭に置く。そして感触を確かめるように、すりすり撫でる。

勿論自分のことを撫でて悦に浸っているわけではない。

ここはつい先ほど、シロが敬愛してならない院長が触れていた場所なのだ。

そこを撫でていっていると、まるで院長と一緒にになったかのような錯覚がシロを襲う。

「んはあああ……」

院長のことを考えていると、何だかいけない気分になってしまうシロ。

今はだれの目もない自室にいる。

自重する必要はなかった。

頭にのせていた手がすると下に伸びていき――。

「ん――！！んんん――っ！！」

「……………」

自分以外の声に邪魔をされる。

声のした方を見ると、そこには一人の男が転がされていた。

口には布が巻かれて声を出せなくしており、両手両足を縛り付けられて動きがとれなくなっている。

その男を見るシロの顔は、蕩けて赤くなっていた顔ではなく、冷徹なまでの無表情であった。

「…………ああ、そういえばいたわね、あんた」

お楽しみを延長することにし、ツカツカと男の前まで歩くシロ。

男は彼女を怯えた表情で見上げる。

シロはそんな男のことなどまったく気にせず、乱暴に布を取り外す。

しばらく咳き込んでいた男だったが、すぐに言葉を発し出す。

「た、助けてくれ！私もあいつがあそこまで強硬な手段に出るとは想定できなかったのだ！謝罪はする！もちろん、金の援助もする！孤児院と言えば、経済的にもあまり裕福ではないだろう？それを私の金で

……！」

「うるさいわ」

唾が巻き散ることも構わず、命乞いの言葉をがなり立てる男。そのマシンガンの如き言葉は、シロによって止められる。

ただ言葉で止めるような優しい制止ではない。

両手足を縛られて無防備となっている腹に蹴りがめり込む。

凄まじい痛みと衝撃に、男は言葉どころか息さえできなくなる。

とはいえ、シロはこれでも手加減している。

クロほどではないが、彼女の戦闘力も相当に高い。

思い切り蹴つていれば、ろくに鍛えていない男は内臓の一つでも痛めていただろう。

身体をくの字に曲げて苦しむ男を、恐ろしく無感情に見下ろすシロ。

「あんだね、院長に刃向って生かしてもらえると思ってるの？お金であろうが国であろうが、何を差し出そうとしても罪を減輕することなんてないわよ」

「うっ……ぐっ、ひい……っ」

男の頭に足を置き、ぐりぐりと力を込めるシロ。

強い力で地面にこすり付けられ、鼻から血が溢れだす。

今彼が上を見上げれば、肉付きの良い真つ白な肌の太ももとその先にある純白の布が見ることができのだが、頭を地面に押し付けられて痛みに悶えている男にそんなことを考える余裕すらなかった。

「勿論簡単には殺さないわ。院長に手を出そうとしたことを後悔して、あの方に何万と謝罪の言葉を出すまで苛め続けてあげる」

ニコツと美しい笑みで恐ろしいことを宣告するシロ。

最早男の顔に色はない。

彼はどうして安易にこのような行動に出ってしまったのか、激しく後悔する。

できることなら、数日前の自分を殴り飛ばしてやりたい。

しかしタイムマシンが開発されていないこの時代では到底不可能なことで、彼に待つのはシロによるお仕置きであった。

「ちよつと苛めたら、院長に勉強を教えてあげようかしら」

男を死ぬギリギリまで苛めた後、シロは院長の部屋に向かうのであった。

なお、その時に身体を押し付けて甘えまくっていたクロと出会い、恐ろしいほど冷たい空間を作り上げたのは余談である。

スコールのお話

発展著しいとある国。

夜になつても光は消えず、街中を照らし続けている。

そんな街中で、ひととき目立つ建物がある。

空高くそびえたつ超高層ビルで、世界中の有名人が入居している建物だ。

当然ここに入居するには、大量のお金が必要となる。

故にこのビルに入居できるのは、まさに選ばれた人間だけなのである。

そんなビルの最上階に、一人の女性がいた。

「……綺麗ね」

彼女は一面ガラス張りの景色を見ながら、そう呟いた。

眼下には煌めく人口の光が溢れており、勝者のみ見ることが許される景色である。

彼女の言う通り、景色は綺麗なものである。

だが彼女の言葉にはまったく気持ちが込められていなかった。

表情も普段ととくに変わりのないものである。

彼女にとつて、絶景と言つていい景色を見ても心を動かすほどのものではないのだ。

「はあ……」

女性は目を瞑り、ため息をつく。

誰でもするような所作だが、彼女がするとやけに艶めかしい。

薄く紅が塗られた美しい唇が動くのは、見る男を魅了する。

ただこの部屋には彼女以外誰もいないので、彼女に囚われる被害者はいない。

「早く家に帰りたいわ……」

こうして部屋の中で部下の報告を待つのも、時間の無駄に思える。部下から成功か失敗かの報告を受けることが彼女の仕事だが、部下である少女が任務に失敗するとはとても思えない。

実際、これまでの任務でも失敗することはなかった。

つまり達成率は脅威の100%である。

分かりきっている結果を待つのであれば、その間に実家に帰省したい。

珍しく孤児院のある国での任務。

いちいち上を誤魔化してサボり、孤児院に帰ることは面倒だ。

……まあ最低でも月に一度は行っているが。

面倒くさそうに、また興味なさそうに眼下の絶景を眺める美女。

そんな時に、備え付けられている固定電話に着信がある。

『ミューゼル様、お客様がお見えになられています』

「客……？」

怪訝な表情を浮かべる女性。

この場所に自分がいることは、誰にも知られていないはずの秘密である。

一体誰が自分に逢いに来たのか？

組織の幹部だろうか？

いや、任務は続行中だし、逢いに来る必要はないはずだ。

色々な考えが頭に浮かんでは消えていく。

しかし受付の人間から送られてきた客の画像を見て、女性は顔を喜色で染める。

それは先ほどまでの退屈そうな顔をまったく感じさせないものであった。

「その方は私の大切なお客様よ。通しなさい」

『わかりました』

そう告げると女性はすぐに動き出す。

今のバスローブ姿で彼に会うのは絶対にダメだ。

彼にはちゃんとした姿で会いたい。

彼女は少し癖のある長く豊かな金髪を揺らしながら行動する。

バスローブを脱ぎ落とすと、彼女のグラマラスな肢体がさらされる。豊満な乳房。

括れた腰。

大きな曲線を描く臀部。

スラリと長い脚。

男を魅了するありとあらゆる要素を詰め込んだような、美しい身体である。

そんな身体に、真っ赤なドレスを纏っていく。

乳房がはみ出てしまうような過激なドレスで、背中なんてほとんど素肌が見えてしまっている。

これは彼女の勝負ドレスであった。

勿論着用するときは彼の前だけだと決まっている。

ドレスを着用した彼女は、ガラス張りの壁に近づく。

その表情は童女が見せるような喜色が滲んだ笑みであった。

先ほどまで同じガラスに映していた表情とはまったく異なるものであった。

まるで初デートを目前にする少女のように、姿を確認する彼女。

実際彼女は熟れた女性なのであるが、ただ見た目も相当に若いので見苦しくはない。

むしろ、冷然としたいいつもの姿勢を知る者からすれば、そのギャップで一気に行かれないようなものだ。

ただこのような姿は、彼ですら知らないなので他の男が知るはずもない。

知っているのはよく共に行動する気性の荒い美女と、感情が乏しいのに彼と世界最強の女に対してだけ感情を露わにする少女くらいだ。

……いや、彼の大側近である黒白コンビももしかしたら知っているかもしれない。

さて、ガラス張りの壁で一張羅を確認した女性は、再び椅子に座る。

しかし中々落ち着いた様子を見せず、キョロキョロと視線をさまよわせ、脚を何度もくみなおしている。

滅多にお目にかかれない美脚が動き回るのは、男にとって眼福であ

る。

勿論見ている者はいないが。

そわそわとし始めてすぐ、扉がノックされる。

そして聞こえてくるのは、自分が聞きなじんだ安心する男の声であつた。

すぐに扉の前に向かい、彼女手ずからドアを開ける。

「……お久しぶりね」

扉を開けた先に男は、いつも通り優しげな笑みを浮かべていた。

彼女——スコールも笑顔を以て彼を迎え入れる。

普段は笑みと言つても冷たいものばかりなのだが、彼の前では暖かな雰囲気醸し出す笑顔を浮かべている。

彼女の冷徹さを知る組織上層部の人間が見たら、卒倒してしまうかもしれない。

スコールは彼を部屋の中に招き入れ、高価な椅子に座らせる。

その後彼女が取りだしたのは、大事にとっておいた高級ワイン。

めでたいことなどがあつた時に飲もうと思つていた物だが、今夜開けてしまつてもまつたく後悔しないだろう。

グラスにトプトプとワインを注ぐ。

彼女が他人のためにお酒を注ぐなんてこと、本来ならばありえない。

スコールが飲むグラスには、彼が注いでくれた。

「それじゃ、乾杯しましょうか。再会を祝して、ね」

グラスを合わせると、チンと高い音が鳴る。

良いグラスは奏でる音もいいものなのか、スコールの耳に心地よく聞こえてくる。

……いや、乾杯する相手が良かったからかもしれない。

グラスを傾け、ワインを口に含む。

芳醇な味わいで、すんなりと喉を通っていく。

前を見ると、彼も上品にグラスを傾けている。

彼はいつも笑顔であるが、長年連れ添ってきたスコールはその笑顔の違いが分かる。

今の彼の笑顔は悦んでいるほほえみであった。

「喜んでくれてなによりだわ」

自分は何も用意していなくて申し訳ないと申し出る院長。そんな律儀な彼の姿に、クスツと上品に微笑むスコール。

「だったら、次に会いに来てくれる時にお願ひするわ」

さりげなく次に会う約束を取り付けるスコール。

組織の実行部隊を統括する人間らしい、頭脳の明晰さである。ずる賢いともいえるが。

「ええ、何も心配する必要はないわ。でもありがとう————あら？」

仕事はどうかと聞いてくる彼に、安心させるように微笑む彼女。

事実、組織での仕事は楽なので本当のことを言っている。

ISを強奪する際の襲撃だって、高い戦闘力を誇る彼女が危なくなることなどないし、唯一面倒くさいのは彼女自身の容姿に群がってくる組織上層部の男どもだろうか。

まあ一度も受け入れたことはないし、無理やりきたら文字通り首ちよんぱしているので問題ない。

少し心配性な彼を安心させる言葉を言う。

彼の性格にクスクスと笑い、しかしその対象が自分なことから心が暖かくなる。

スコールがお礼を言い終わると同時に、部屋がぐらりと揺れる。それは地震であった。

幸いにも大きなものではなく、数度大きく揺れただけでそれは収まった。

ビルの最上階である部屋は大きく揺れたのだが、スコールはまったく微動だにすることはなかった。

彼女の強靱な体幹は、この程度ではまったく揺らがない。

そしてそれはスコールの前に座る彼も同じであった。

彼はワインの入ったグラスを持ちながら、ニコニコと笑っている。身体はまったく揺れていない。

「……驚いたわ。地震なんて珍しいわね」

目を丸くしている彼女に、院長が物申す。

「どうやら先ほどの揺れでグラスの中のワインがはねて、彼女のドレスにかかったようだった。」

「あら、本当……」

先ほどの揺れでスコール自身は揺れ動くことはなかったが、テーブルに置いてあったワイングラスは別である。

揺れによって波打ったワインが飛び、赤いドレスの胸辺りに付着する。

似た色だからそれほど目立たないが、早く処理は行った方が良かったろう。

彼は懐から綺麗なハンカチを取り出し、彼女に向かってスツと手を伸ばす。

そしてドレスの汚れた場所を、丁寧に拭っていく。

「ありがとう。でもこれってセクハラじゃないかしら？」

丁寧にしてくれるのは嬉しいのだが、彼女は少し恥ずかしかった。人生経験も豊富で常に余裕を持っているスコールにしては珍しい反応。

自分でも驚いているのだから、他人が見ればさらに驚くことだろう。

だからその恥ずかしさを隠すため、ほんの小さな悪戯をする。

彼は顔を真っ赤にして謝罪してくる。

「私は構わないけれど、オータムに同じことをしたら怒られるわよ」

申し訳なさそうに謝る彼を見て、スコールはクスクスと笑う。

いつも大人の態度を崩さない彼が、子供のように萎縮しているのがおかしかったのだ。

そしてまた、猛烈に母性本能をくすぐられた。

表面上は何でもないように取り繕っているが、豊満な胸をドキドキと内部が打ち付けてくる。

彼の手が胸に近づいただけで、まるで生娘のように緊張してしまっただ。

「そのハンカチ、貸してちょうだい。きちんと洗って返すから」

別に気にしなくていいという彼。

何度言っても断ってくる。

いい加減じれつたくなつた彼女は、少し強めに口調を変える。

「——いいから貸しなさい」

とくに声を荒げているわけではないのだが、ニツコリと笑うスコールの笑顔の中に言いようのない迫力を感じた彼は、すぐにハンカチを渡す。

さて、このハンカチは彼に返されるのであろうか？

『——スコール、聞こえるか？』

スコールの前に現れる空間投影ディスプレイ。

部下である少女からの、プライベート・チャンネルであった。

『目標であるISを手に入れた。今より帰還する』

「……待ちなさい。あなたには、このまま次に任務に向かつてもらわ
わ」

『……なに？』

ディスプレイに映る少女は、怪訝そうに首を傾げている。

いつもなら心のこもっていないねぎらいの言葉がかけられて、帰還するように命じられるはずだ。

他の任務があるからといって、そのまま続けて任務を遂行するよう命じられたことはなかった。

『どうした、スコール。任務は構わないが、珍しいな』

「あなたがそれを気にする必要はないわ。さ、早く向かってちょうだい」

まるでさつきと会話を斬りたいと言わんばかりのゴリ押しである。確かに彼女はスコールと仲が良いわけではないが、ここまで明確なものはない。

いくらなんでもおかしいと感じ始める少女。

その時、スコールが会話を打ち切ろうとした理由が分かった。

誰と話しているのか不思議に思った彼が、スコールに話しかけたのだ。

普通ならプライベート・チャンネルで他人の声が入ってくることはな

いのだが、彼だけはすべて聞こえるように調整してある。

そして彼の話す音声も、全て聞き取れるようになっていたのだ。

「あ……」

『院長!?』

彼の声が聞こえたたん、ディスプレイに映る少女は強い反応を示した。

冷たく、どす黒く濁っていた瞳が一変し、別人かと思うほどキラキラと輝いている。

瞳の中に星まで見えてしまいそうだ。

そしてスコールは、あちゃあと頭を抱える。

『おい、スコール！そこに院長がいるのだな!?であれば任務などとしている暇などない！今すぐ帰還する!』

そう一方的に告げた後、プライベート・チャンネルは閉じられた。

スコールは一度ため息をつく。

そんな彼女の様子を見て失敗したと思った彼は、すぐに謝罪する。

「いいのよ。ややこしい相手からの連絡だっただけよ」

申し訳なさそうな彼の言葉をすぐに否定する。

彼の言葉に比べれば、組織の長の言葉すら聞くに値しない。

「でも少し疲れたわ。少し外を歩かない?ここ、小さいけど庭もあるのよ」

スコールの提案にすぐに頷く彼。

彼女を疲れさせた原因が自分にあると思っただけで、にべもなく

頷いた。

そんな彼の心情も察するスコールは、またクスリと笑う。

本当、まじめで実直な人だ。

二人は椅子から立ち上がり、出口に歩き出す。

その間に、スコールは自然に彼の腕を取り、身体を押し付ける。

美しく、誰をも魅了するような肢体が、彼の身体に当たる。

そうすると悦びを感じるのは、何故かスコールの方であった。

そしてそんな彼女の顔は、まるで狡猾な狐のように歪んでいたのであつた。

まさに『計画通り』といった感じに。

そうして二人は涼しげな外に、火照った体を冷ましに行つたのであった。

なお、その数分後にディスプレイに映っていた少女が部屋に飛び込んできて、誰もいないことを知って絶叫するのは余談である。

結局その日、スコールと彼は部屋に戻ることはなかつたのであった。



「……そう、あの男がね」

『ああ、あいつのところは何人か兵隊送ろうとしていた』

前日、訪ねてきた院長と過ごした部屋。

そこは現在真っ黒なカーテンで壁一面のガラスを閉め切り、暗い部屋を作り出していた。

スコールが話しているのは、同じく孤児院出身の相棒である。

「それで、その兵隊はどうしたの？」

『あん？もう殺したぞ。あとはあの不細工だけだ』

何でもないように言ってくる相棒の女性。

人を殺したとか、あつさりと言っている。

そのことにスコールは怯えるどころか、よくやつたと微笑んだ。

「本当、あなたたつてあの人のことになるとすごい力を出すんだから。大切に思っているのね」

『ばっ!?!ち、違えよっ!別にあいつがどうかじゃなくてだな……と
いうか、私の恋人はスコールだろう?!』

「あら、そうだったかしら?あなた、私よりあの人のことのほうが大切
でしょう?」

「……………」

わたわたと慌てる相棒の様子を見て、クスリと微笑むスコール。それにどちらが大切かと聞かれて押し黙るのも、彼女の素直さを表している。

この反応にスコールは別にどうとも思わない。

なぜなら自分だって相棒よりも院長の方が大切だからだ。

二人とも、お互いを世界で二番目に大切に思っている。

ただ一番目の男と、あまりにも思いの強さが違うだけだ。

勿論、二番目より三番目はさらに距離があるのは言うまでもない。

『……で、どうするんだよ？あのクズは』

「ああ、それは別にいいわよ。もう捕まえているから」

どんどんと相棒の女性の中で表現が悪くなっていく。

そんな彼女に向かって、スコールはもういいと言う。

ちらりと振り返ると、そこにはすでに虫の息となっている太った男がいた。

身体中のありとあらゆる穴から血を零し、顔などは原形が分からなほど大きくはれ上がっている。

人は見るだけで気分を害し、また一生モノのトラウマになるだろう。

『流石スコール。仕事が早いぜ』

「まあ、そういうことね。このことは私に任せてちょうだい。兵隊の処理、ありがとうね」

そのねぎらいの言葉に、おーっと男勝りの返事をして通信を打ち切る相棒。

それを確認したスコールは、小刻みに痙攣している男の前に立つ。

そして豊満な胸の谷間から超小型の拳銃を取り出し、銃口を彼に向ける。

「あなたはあの人の作る世界にいらないわ。奴隷としてもダメ。世界に存在するのも許さないわ。あの人に手を出そうとしたことを、地獄で何万年も悔やみ続けることね。まあ手を出さなかったとしても、あなたたち『亡国機業』ファンタム・タスクの幹部は皆殺しだけだ」

そう言うスコールは、何の感慨も持たずに引き金を引いた。

エムのお話

孤児院の中には、広々とした庭がある。

この国では珍しい緑が溢れており、陽光も暖かなものである。

本来の気候はもっと暑く、厳しいものであるはずなのだが、不思議とこの孤児院は快適な環境に置かれている。

理由は分かっているが、エムはすべて院長のおかげだと思っていた。

「ふわあ……」

そして今彼女はそんな敬愛する院長と久しぶりに二人きりの時間を過ごせていた。

数日前、上司であるスコールと院長が密会していたことを知り、凄まじい勢いで帰還したエム。

しかしその場に院長はすでにいなく、彼女は慟哭した。

いつもより肌が艶々していて意気揚々と戻ってきたスコールに対し、エムはすぐにISを起動させて襲撃した。

普段ならスコールとは拮抗した勝負になるのだが、何が原因なのか、スコールはむちゃくちゃ強くなっていた。

我を忘れるほどの怒りでブーストされたのだが、それでも彼女に敗北した。

院長と会えないことにあまりにも悲しんでいるエムの様子を見て、流星のスコールも気の毒に思ったのか、彼女に数日の休暇を与えたのであった。

それを得たエムはすぐさま実家である孤児院に戻ってきたのであった。

今は崇敬する院長と日向ぼっこ中である。

「ああ、すまない。あまりに気持ち良くてな、つい欠伸をしてしまった」

顔をポツと赤らめてそう言うエムに、ニコニコとする院長。

そんな彼を、エムは穴が開くほど見つめ続けていた。

じーつと彼のありとあらゆる場所を、細部までじっくりと観察する。

またすぐ会えなくなってしまうのだ。

思い出の中だけでも会うために、今のうちに精巧なコピーを頭の中につくらせる。

「……（まだ見ているのか）」

ちりちりと小さな殺気が届く。

戦場であるならば、すぐさまその殺意を放つ者の前に行き、剣を振り下ろしているだろう。

だがその殺気を放つ相手が相手だった。

その相手は、遠くの柱の陰から顔だけをひよっこりと出す褐色のグラマラス美少女。

じーつとエムが彼を見るときのように見てきていた。

「クロのやつめ、さっさとどこかに行けばいいものを……」

だがこの場を離れることはめつたなことがない限り、ないだろう。

何故ならクロの役目は院長の護衛。

何が何でも離れたりはしない。

……ただ護衛にかこつけて風呂や就寝まで共にしようとするのはどうだろうか？

時たまエムが本気で殺すつもりで攻撃を仕掛けていたりする。

しかしクロの戦闘力はエムを越えていた。

故に今も元気に院長とそれに近づく牝^{エム}を監視しているのだ。

「んっふふ、腹が減ったか？」

ぽけーつと全身に暖かな陽光を浴びていると、くっつと気の抜けるような音が耳に入る。

それは同じく日向ぼっこ中の院長の腹の音だった。

恥ずかしそうに頬をかく姿を見て、微笑ましい気分になるエム。

それに、自分にそのような人間味のある感情があることに驚く。だが彼の前では普通の少女に成り果ててしまうことは、エムは知っている。

「その……なんだ、今日はいい天気だからな。外で食べようと思って、これを持ってきたんだ」

そう言つてエムが差し出すのは、小さなバスケット。

蓋を開けると、中にはサンドウィッチが詰められていた。

どれもこれも市販のものに比べれば、パンの大きさや形が合っていないなど不恰好である。

これは朝早くに起きて、エムが一生懸命に作った手料理だった。

おや……とエムがあることに気が付く。

自分をじつと監視していた鬱陶しいクロが、いつの間にかいなくなっていたのだ。

まあどうでもいいことかと思ひ、すぐに院長を見る。

院長はそれを手に取り、しばらくその出来を確かめるように見た後、パクリと一口いただく。

「ど、どうだ……？」

エムは早口になりそうなのを抑えて問いかける。

サンドウィッチなんて失敗する要素がない料理だが、彼女にとっては大変な料理である。

不慣れた繊細な作業が必要なのが料理である。

いつもみたいにISで相手をぶちのめすだけではいけないのだ。

彼はしっかりと味を確かめるようにして噛みしめ、ニッコリと笑う。

その笑顔がサンドウィッチの出来を証明していた。

「そ、そうか。それならもつといっぱいあるからな」

心の中がぽかぽかと暖かくなるエム。

嬉しさのあまり、すぐに次のサンドウィッチを彼に突き出す。

一応自分も食べようと思つていたのだが、結局全て院長が食べてしまった。

その後すぐ、院長はエムにもたれかかるようにして眠りについた。

腹も膨れ、このほかほか陽気に眠気を増長されたのだ。

「い、いいいい院長……!?!」

しかしもたれかかられたエムにとっては、一大事だ。

顔は一瞬で真っ赤になり、心臓は胸を突き破る勢いで早鐘を撃つ。

これが院長以外の人物であれば、頭を吹っ飛ばしているエムであるが、唯一敬愛する彼と身体を近づけるのは中々緊張する。

しばらくあわあわとしていたエムだったが、院長の安らかな寝顔を見てふつと笑う。

「まったく、仕方のない。私がこんなことをするなど、院長だけなのだから……」

エムは院長を起こさないように繊細な動きで彼の頭を持ち、自分の膝に乗せる。

そして柔らかな黒髪を優しく撫でる。

彼を見下ろす彼女の顔は、まるで聖母のように慈愛に満ちたものだった。

「ああ、いい天気だ……」

エムは再び空を見上げる。

今日帰ってきてよかったと思う彼女であった。

なお、柱の陰から送られてくる強烈な殺気に関してはスルーである。

またいつの間にか戻ってきていた褐色の美少女が物凄い目で見ているのも、知らんぷりである。



とある国の砂漠地帯。

人の手による開発がされておらず、最寄りの街から遠く離れたこの

場所には人影がまったくなかった。

辺りを見渡しても周りには砂丘しかない。

しかし、何もなければこの場所から、小さく音が聞こえていた。さらに地震のように小さな揺れもたびたび起こっており、砂がぱらぱらと転がる。

その音と衝撃の原因は、地下にあった。

砂しかないはずの砂漠の地下には、この国の軍隊が所有するIS研究所があった。

今ではISは、国防をいっぺんに引き受ける超兵器である。

IS一機で小国の軍隊を相手取れると言われるほどだ。

そんな国家の要である兵器を、秘匿性の高い場所で開発するのは当然のことであった。

宇宙技術の発達した今では、空の下に研究所を作ってもすぐに何をしているのかばれてしまう。

それ故に空からの目がなく、偶然一般人が立ち寄れるはずのない砂漠の地下に基地を作ったのであった。

だがその絶対安全であるはずの基地が、何者かの襲撃を受けていた。

研究室のある通路。

そこでは襲撃者を射殺しようとする果敢に立ち向かった警備隊の軍人たちが、物言わぬ骸となって地面に倒れ伏していた。

その凄惨さは一般人が見ると、胃の中のものすべてぶちまけてしまいそうなほどだ。

切り裂かれた腹から大量に出血して息絶えている男。

上半身から上を弾丸で吹き飛ばされた男。

壁に縫い付けるようにして剣を胴体に突き刺された男。

皆死に絶えていた。

結果、ここに無人の基地が出来上がったのであった。

……いや、まだこの基地には生きている人間が二人いた。

「くっ……！」

「……………」

二人は正面から向かい合っていた。

しかし片方の人間は片膝をついてもう片方の人間を見上げていた。片膝をつく女性は、この基地に所属するISテストパイロットであった。

この国の中では最高の技量をもつエースパイロットである。

そんな彼女が、今身体中から出血しながら片膝をついていた。

彼女が敗者であることは目に見えて明らかであった。

一方だんまりを決め込む片方の少女。

彼女の表情はISのバイザーによつてうかがえない。

それが女性にとつて無気味であった。

その少女——否、襲撃者は女性と違つて目だった傷を負つていない。

つまり襲撃者は世界トップレベルのIS操縦者にも圧勝してしまふほどの実力を持っているということだった。

「ふむ……貴様がこの国一番のIS操縦者か？大したことないな」

「……っ……この……」

口元だけが窺える襲撃者。

口角をクツと上げ、嘲笑を浮かべる。

バイザーで見ることができないが、おそらく彼女の目は恐ろしく冷たく馬鹿にしたものだろう。

そしてそれが分かつてしまうテストパイロットは、怒りの表情を浮かべる。

今すぐ立ち上がつて横つ面をぶんぐつてやりたい。

しかしそう思つても、もう脚は立ち上がつてはくれなかった。

「……ふふっ」

「……何がおかしい？」

テストパイロットの女性は笑みを浮かべていた。

先ほどまで怒りの表情を浮かべていたのに、急激な変化だ。

それに今の状況は彼女の絶体絶命。

仲間もすでに皆殺しにされているし、街から遠く離れたこの秘密基地に援軍が来るのもまだまだかかるだろう。

だというのに、なぜ彼女は笑っているのか？

「いや、別に何でもない。ただテロ組織に盲目なまでに従っているお前が、哀れに思えたただけだ」

「……………」

女性から見ても、襲撃者の少女は若い。

自分よりも一回りも若いかもしれない。

そんな彼女のこれからの人生が、テロ組織の先兵として闘争に明け暮れることを思うと、あまりにも悲しく、また滑稽であったのだ。

襲撃者の少女は何も言い返さない。

「……………何か勘違いしているようだな」

「うぐっ!!」

襲撃者はヌツと腕を伸ばし、女性の首を掴む。

そして指が食い込むほどに力を入れ、女性の身体を持ち上げる。

呼吸ができなくなり、苦しげに顔を歪める女性。

そんな彼女の様子を見て、心底楽しそうに嘲笑する襲撃者。

「私は今まで一度も『亡国機業』フアントム・タスクに忠誠など誓ったことはない。私が組織に所属しているのも、全てはあの方のため。いずれあの方の望む世界を構築するため、今は雌伏の時なのだ。この基地にあるISをいただくのも、そのためだ」

「……………っ!?!」

女性は驚愕して目を見開く。

この少女はテロ組織のことを何とも思っていない？

「喜ぶがいい。貴様らの努力と成果は全てあの方のしもべである私の糧となる。地獄で見ている。私とあの方が作る、新たな世界を」

そこまで言うと、襲撃者は銃を彼女の頭に当てる。

この基地で何人もの人間の命を奪ってきたものだ。

それが今女性の命も奪おうとしている。

「(世界の構築……………? 『あの方』っていったい……………)」

不穏な言葉に対して、疑問が次々に浮かび上がる。

しかしもうその疑問を解決するすべはない。

最初の銃声から二時間後。

この秘密の基地で、最後の銃声が鳴り響いたのであった。

院長のクズ日記2

Q月U日

俺は一応念のために携帯電話を持っている。

正直、携帯ゲームとかしないし、プライベートで会ったりする奴もいないし、別にいらないうちやいらないうち。

だが、もし俺自身何かしらの事件や事故に巻き込まれる可能性がある場合は、すぐに盾を呼ぶ必要がある。

そのために連絡手段として携帯電話を持っているのだ。

まあそれでも電話帳に登録されている人数は少ないけどな。

これでいい。面倒くさい奴と連絡先を交換していたら、面倒くさいことに巻き込まれるからな。

ただ盾のためとはいえ、時々メールやら電話やらをしてくるのは鬱陶しい。

これが孤児院に残っているクロやシロならまだしも、俺への恩を忘れて出て行った恩知らず共なら尚更だ。

いや、クロやシロの連絡も鬱陶しいんだけどな。

クロは言葉足らずだから何が言いたいのかいまいちわからない。

それが顔を合わせない電話での会話となれば、余計わからない。

いちいち深読みするのもしんどいわ。

シロからの連絡って、大体勉強の連絡なんだよなあ。

もういいです。本方がいいです。

さて、いきなり何で携帯電話の話を書いているかというところ、朝っぱらから携帯に関して面倒なことが起きたからである。

それは俺を裏切って盾という役割をぶん投げやがった一人である、

オータムのメールだ。

……あいつ、早朝に何送ってきてくれてんの？

眠いんだよ。寝てたんだよ。起こしてんじやねえよ。

携帯買ったからって無理やり連絡先をよこしやがって……。

……俺の連絡先、どこから手に入れたんですか？怖いんですけど。っていうかいらないよ。なんかあいつメンヘラっぽかったし。

そして俺の予想は大的中である。

メールは超長いいし、何を伝えたいのかが明確でない。

これってメンヘラだよね？

もう怖い。俺の敵は武装組織の屑もただけだと思っていたけど、まさか孤児院から出るとは……。

とりあえず電話を試してみた。

しかし話をしているときは、案外ふつうである。

普通に、俺に対して生意気な女のままだ。

なに？二重人格だったりする？

メールの内容と話し方が全然違うんですけど……。

電話の内容は、メールを止めろ。それだったら直接会いに来い。せめて電話にしろという三つだ。

最初は当たり前のことだ。こいつのメール、気持ち悪いし怖い。

二つ目は、なんとかうまいことをしてオータムを孤児院に再び引き戻すためでもある。

俺の盾となって一生を費やしてほしい。

最後はまあ……苦肉の策だ。

電話はまともだからなあ……。メールよりはマシだろう。

しかし電話でもあいつ、中々ムカつくな……。

全然俺を敬わねえ。俺、お前のこと育ててやったんだけど？

まあいいか。とりあえずあのメンヘラメールが来なくなっただけで良しとしよう。

Q月I日

前、オータムにメールではなくて逢いに来るか電話するかにしろと伝えたのだが、あいつはちゃんとそれを実行してくれている。

……ただな、毎朝電話してくるのはやめろ。

お前の声を毎日聞きたくねえよ。早く帰ってきて楯になれよ。

しかもオータム以外からも電話が来るようになった。

俺、お前らに教えたつけスコールとエム。

本当に切羽詰ったとき用にシロとは交換していたんだけどなあ。

クロ？あいつは携帯持っていないだろう。

何とか持たせようとしたのだが、必要ないの一点張り。

お前に必要なくても、俺にはお前が持つことは必要なんだよ！盾的な意味で！

今日はまたまた勉強をしていた。

シロ先生が熱心に教えてくれるのだが、もうやめて……。

お前の教え方がムカつくことに上手いせいで少しは理解できるが、八割方は理解できていないんだよ……。

さつさと餓鬼どもに教えに行けよ……。

俺みたいに、勉強に悦びを見いだせないやつだっているんだよ……。

一緒に授業を受けていたクロのやつも、早々に目を回しやがるし。ふはっ、俺よりも馬鹿が一人いて何だかいい気分だ！

俺の膝に座っていることが釈然としないが、いい気分だし許してやった。

ムニムニとしたお尻の感触も気にならないくらい、俺は上機嫌だった。

しかしそれは一瞬で超不機嫌へと変貌する。

今日は久しぶりにシャルロットの奴が帰ってきたのだ。

まあそれだけだったらよかった。

一時的にとはいえ、身近な肉壁が増えるのだから。

だがこいつの持ってきたものがダメだった。

それはとある高校の合格証書だった。

……いや、普通なら祝福するよ？

さっさと卒業して孤児院に戻ってこい。そして俺の人生の糧となつてほしい。

しかしこいつの合格した高校が問題だった。

—— I S 学園。

世界でたった一つしかない I S 操縦者育成機関で、世界中から志願者が集まる学園。

倍率はなんと一万倍！……らしい。シロから聞いたただだから本当かは知らねえ。

だがこれが本当なら凄まじく嫌だ。

何で俺を裏切ったやつがこんなに有能なんだ。ふざけんな。

そんなに賢いんだったら俺の役に立てよバーク。もう知らないんだから！

あとシャルロット、てめえあざといんだよ！

ちらちらとブラが見えたり谷間が見えたり……。

生殺しなんだよ！どうせなら触らせろや！

風呂に突撃してくるクロよりはマシだけど、また悶々とするじゃねえか！

本当、ここらへん娼館とかないの？マジで行きたいんだけど。

あと、お前も勉強を教えようとするんじゃないやねえよ。

いつの間に教師風スーツに着替えたんだ。眼福です！

いや、確かに見ると幸せだけど、勉強は嫌なんだよ……。

シロと一緒に出て行ってくださいえ。

……ところで、なんでシャルロットのことを皆シャルルって呼ぶの？

もしかして俺、名前間違っている？

……機嫌損ねて盾にならないとかやめてね？

Q月〇日

シロとシャルロットのダブル授業が、ようやく終わった……。シャルロットのやつはフランス旅行やらを楽しんでいるらしい。くたばってください。

未だシロの勉強は続くが、ダブル授業はやっと終わった……。年下のガキが自分より賢いって凄いストレスだ。

年下の上司並だろう。嫌すぎる。

だからといって勉強を頑張って二人を超えようという気持ちにはならないんだよね。

正直、努力するのは面倒くさい。

別に勉強しなかったら死ぬわけではないし、どうでもいいか。

……でも年下が俺より賢いって、やっぱり腹立つなあ。

今日は珍しく勉強が休みだった。

俺の最終盾であるクロと一緒にのんびりしていたら、珍しい来客があった。

まあ客というよりは裏切り者なんですけど。

それはクロと同じくスーパーパーおぼーいの持ち主である真耶だった。

確かこいつ、IS学園の教師をしているとか言っていたな。

世界中の超有能な選ばれた子供たちを、IS操縦者に育成する学園の教師。

もう想像できないくらい凄いんだろなあ。

……こいつも嫌いだ、うん。

ただまあ、性格は悪くない。

俺に対して従順だし、いざというときはクロと同じくらい盾にしやすいい人材だ。

だから、こいつは裏切り者の中でもまだマシなほうだ。

スコールとかはダメだな。死刑ものだ。

だが今日のこいつは嫌いだ。

いきなり部屋に来たと思ったら、何が山に登ろうだ。

お前の名字が山田だからってダジャレかよ、面白くねえぞ。

というかいちいち報告しなくていいっつーの。勝手に逝けばいいじゃん。

理由も聞いてなかったぞ。しかもダイエットって……。

お前の体重の原因って、そのデカイ乳のせいだろう。

そこは減らすなよ……俺の目の保養が減るじゃないか。

そんなこと考えていたら、真耶が俺と一緒に登りたいなどと寝ぼけたことを言ってきた。

めちやくちや嫌だし激しく拒絶反応が出そうになったが、俺は頷くしかなかった。

ただでさえ孤児院を出て行ったやつなんだ。

もしこれで不機嫌になって孤児院から完全に独立するとなったら、有能な肉盾を一つ失ってしまうことになる。

それは老衰での臨終を夢見る俺の人生にとって、重大すぎる損失になっってしまう。

……ご機嫌取りのためには、まったく興味のない山にも登る。

まさに人間の鑑である。

クロが止めてくれるかなと期待してみたが、案の定止めてくれず。

この野郎、俺の護衛じゃねえのか!?

腹いせに頭をぐりぐり擦ってやった。

攻撃とはとらえづらい地味な攻撃である。

反撃されたらあっさり殺されそうなので、これくらいで勘弁してやるぜ。

山登りは夕方から始まった。

最初に真耶を見たとき、俺は大丈夫かと不安になった。

俺たちが登る予定の山は大した標高はなかったはずなのに、こいつは何故か登山のフル装備である。

熱そうな登山服は着ているし、何が這っているのか気になるような

巨大なかばんは背負っているし。

指摘してやっても良かったのだが、こいつがひーひー言っているのは面白そうだからそのままにしておいた。

事実、ろくに体力のない俺よりも先に息切れを始めた。

いやー、あれは楽しかったなあ。登山をした甲斐があったといえるだろう。

フラフラしていたし、そろそろこけるかなあと思っていたら予想通りにこけかけた。

正直、真耶がここで転んで怪我しようかどうかでもいいんだけど、もしそうなって動けなくなったりしたら俺に迷惑がかかる。

真耶を担いで下山なんて無理だし、置いて行くには勿体ない肉壁だ。

だから俺はあいつの身体を受け止めてあげたわけだが、そのときに真耶の爆乳に腕が当たった。

……もうね、凄く柔らかいんだよ。

母性というものを強烈に実感したね。

男がおっぱいを求めるのには、この魔性があるからなんだと悟ったぜ。

これに乗じて爆乳を少しばかり揉んでやろうとしたのだが、身体は言うことを聞かずにただ優しく真耶を抱きしめていただけだった。

ふじゃけん！おっぱいくらい揉ませろ！

本当、この身体欠陥だわ。マジで神様死ね。

転びかけたせいで真耶は足を挫くしきー。

俺が山頂まで負ぶって行かないとダメになったじゃん。

置いて帰ってもいいけど、もし山の害獣なんかに出会ったら囮に使えるかいからなあ。

まあ負ぶっていたとき、爆乳の感触を背中で感じられたしOKとするか。

結局頂上まで登り終わると、疲れてすぐに寝ちゃったし。

次に起きたときはちゃんと孤児院に帰っていたので、真耶が運んでくれたんだろう。

当たり前だ。そこで全裸添い寝をつけてくれないくらいだわ。
はあ……もう絶対山登りなんてしない。

オータムのお話

とある高層マンションの一室。

下を見下ろすと人が豆粒のように小さく見えるほどの高さで、まさに勝ち組の見られる景色である。

ここは『亡国機業』ファントム・タスクの実働部隊であるモノクローム・アバターの世界中に点在しているアジトの一つである。

そのアジトに、一人の女性がいた。

「つ、ついに手に入れちゃった……」

長くて豊かな茶色の髪を持つ女性。

顔は端正に整っており、衣服に包まれながらも豊満な肢体を思わせる線を描く身体つきをしている。

見るからに大人の女性といった雰囲気、まさに美女というにふさわしい。

そんな彼女はタラリと汗を流していた。

さらに何故か頬は紅潮していて、綺麗というより可愛らしさが前面に押し出されていた。

「あら、オータム。今日はここにいたのね」

「おおっ！スコール！」

扉を開けて、アジトの中に入ってきた女性。

豊かな金髪を持ち、豊満なスタイルをしているスコールであった。

そんな彼女は少し驚いたかのように、目を見開いて茶髪の美女――

――オータムを見やった。

この実働部隊でも一番働かされているのが、このオータムである。

エムもまた優秀なテロリストで使い勝手もいいのだが、たまに院長を求めて暴走してしまうことがあるため、ツンデレ全開のオータムに

任せられているのである。

彼女も暴走しそうになるときはあるが、素直になることができないので任務を優先させてしまうのである。

まあその際彼女の怒りの吐け口となったものは、人や構造物に限らずめちやくちやに壊されているのだが。

ちなみにスコールと一緒にエムも入室しているのだが、オータムは彼女のことを見ようもしない。

エムもまた同じである。

二人とも気が強く、一部の人間以外は全て敵だと認識しているが故である。

「あら、あなた、携帯電話を持っていたの？」

「いや、最近買ったんだ。あ、ちゃんと脚を取られないように改造してつから、大丈夫だぞ」

スコールはオータムが持っている携帯通信機器を見て驚く。

彼女がこれまで持っていなかったはずの物だからだ。

そもそも彼女たちに携帯電話はあまり必要ではない。

仲間同士の通信は自身の専用機で回線を飛ばせば事足りることだし、組織上層部からの命令は人を送らせるか始末できる文書で送らせている。

上層部たちも、まだ会話ができるスコールであればいいのだが、バリバリ敵意と殺意をぶつけてくるオータムやエムと会話なんてしたくもないので、ほとんどが文書での命令である。

「なあ、スコール。電話番号とメールアドレス？つてやつを教えてくださいよ。私の恋人なんだからな！」

「ふふふ、ええ、いいわよ」

キラキラと目を輝かせてグツと顔を近づけてくるオータム。

その反応にスコールは、自身の恋人の可愛らしい姿に思わず笑顔がもれる。

ちなみにエムはもはや二人のことを完全に意識の外に出していた。

今はこの前の院長の寝顔を収めた写真を見て、息を荒くしている。

「あなたの携帯の電話帳、最初の名前は私かしら？」

「えっ!?も、ももも勿論だぜっ!?!」

スコールが自身の携帯を慣れた様子で操作しながら聞くと、機械のことがいまいちわからなくてボーっとしていたオータムが盛大にキョドる。

男よりも男らしい豪快な性格の彼女が慌てているのを見て、またスコールは美しく微笑む。

彼女の電話帳に最初に刻まれているのは、当然ながら自分ではないことを分かっている。

「彼とのメールは楽しい?」

「ああっ!……た、たた楽しくねえっ!!」

ニツコリと微笑んで尋ねるスコールに、オータムは元気に返事してしまう。

もういくら取り繕ったとしても無駄であった。

そう、彼女の電話帳の最初の名前欄には、しっかりと院長と記されていた。

この機会に名前を聞こうとしたのだが、うやむやとなってしまうていた。

ただオータム的には満足しているのでそれでいいだろう。

「もう、そんなツンツンしていたら、彼だって嫌がるわよ?」

「や、やっぱりか?私の態度、やっぱりマズイか?」

ちよつと意地悪を言ってやれば、縋り付いてくるオータム。

うるうる涙目になっている彼女の姿を見て、嗜虐心が刺激されるスコール。

自身の恋人の可愛らしさに熱いため息をつく。

「うふふ、冗談よ。彼があなたのことを嫌うわけないじゃない」

「そ、そうか?スコールが言うんだったら、そうなんだよな」

スコールに弄ばれるオータム。

これが恋人である彼女と院長以外なら、地面に落ちたザクロのようになっただろう。

うんうんと何度も頷いて元気を取り戻すオータム。

そんな彼女にスコールは助言を送る。

「直接会って話すのはまだ難しいのだったら、メールならどうなの？」
「メールか？もう送ったぞ。い、一応私の中では頑張ったつもりだ……」

「あら、そうなの」

照れた様子で告げてくるオータム。

まあそれもそうかとスコールは一人で納得する。

最初に電話帳に登録したのだったら、もうすでに連絡をとっていてもおかしくない。

いや、院長にデレデレな彼女なら、すぐにでもするだろう。

「じゃあ見せてくれないかしら？」

「え、ええ……いくらスコールでも流石に……」

突っ込んでくるスコールに恥ずかしさを隠せないオータム。

頬を赤らめて照れている姿は、今時の女の子のようだ。

しかしいつまでたっても携帯を見せようとしないので、スコールは強硬策にうってでる。

「エム」

「ああ、私も院長と会話できるそれには興味がある。よこせ」

「————お呼びじゃねえんだよ、クソガキが!!」

スコールが名前を呼ぶと、オータムの背後から襲い掛かるエム。

いつの間にやら写真は大切にしまっていて、彼女の好奇心は携帯電話に向けられていた。

オータムは奇襲を受けたとはいえ、流石は『亡国機業』ファントム・タスクトップクラスの戦闘員。

背後からの攻撃を転がって避け、猛然と牙をむく。

とてつもない殺気が部屋中を駆け巡る。

敵意ではなくて殺意なところが、彼女たちの関係性を表している。

もし院長という橋がなくなった時点で、彼女たちの間の繋がりは何一つ残りはしない。

一般人どころか訓練を受けた軍人でも気絶しそうなほど濃密な殺気の立つ空間の中、スコールはどこ吹く風とばかりに携帯を取り上げる。

「あぁっ!?!いつのまに……!?!」

「ええっと、どれかしら……」

ガンツと衝撃を受けるオータムをしり目に、スコールは慣れた手つきで携帯を操作する。

この中で一番お年を召されている妙齡の美女が、一番恋愛ごことに興味を持っていらつしやった。

そんなことをふと思うエムだが、ばれたらガチの戦闘に発展しかねないので自重する。

彼女も院長とクソ女がどのような会話をしているのか気になったので、スコールの横から携帯を覗き込む。

もし気に食わないことが書かれてあれば、ISを装着して襲い掛かる腹積もりである。

「これかしら?」

スコールが一つの送信されたメールを見る。

『おっはよゝあなたはもう起きてるかな?起きてないならこのメールで起きてね!目覚ましコールだよー!やっぱ健康的な生活を送るためには、早寝早起きは必須だよね!私はあなたに長生きしてほしいから、こんなことするんだよ?きやつ、恥ずかしい☆それでね、今日は私お仕事なんだ。これもあなたのために頑張るねっ☆じゃあいつてきまーす!あなたの一日に、幸運が満ちていますようにっ☆』

「……………」

「……………」

空気が凍る。

先ほどまでほのぼのとしたものだったり、殺気が凄まじいものであったりとした空気が、一切音を立てなくなった。

スコールは自身の恋人のあまりの変容にたらりと一筋の汗を垂らしている。

対して恥ずかしいメール内容を覗かれたオータムは、顔を真っ赤にしてお目目グルグル状態である。

「…………メールでは随分、その…………正直なのね」

「……………」

何とか感想を言い述べるスコール。

冷静に即断する決断力を持つ彼女が、ここまで言葉に躓いたのは初めてではないだろうか。

そしてその優しさがオータムの心を切り刻む。

スコールの横で携帯を覗き込んでいたエムが、今まで閉じていた口を開いた。

「ふっ、酷いな」

ビシリ……と音を立てて固まる空気。

ここまで気の利かない発言をするとは思っていなかったスコールは、目を見開いて彼女を見る。

こんな表情を見たのはオータムも初めてである。

普段であれば新しい表情を見られたと喜んだかもしれないが、今はスコールのことはまったく頭の中にはなかった。

「酷えのはテメエの料理の方だろうがああああっ!!」

「……なんだと?」

とうとう爆発したオータム火山。

周囲への被害は計り知れない。

ついでに誘爆してしまったエム火山。

二人は互いに武装を呼び出して向けあう。

毎度おなじみの光景にため息をつくスコール。

そんな彼女が持つ携帯が、揺れ動きながらメロディを奏でる。

「誰かしら?・オータ——」

エムと激しい近接格闘戦を繰り返しているオータムに、親切心から声をかける。

ただ彼女はエムといるとすぐに我を忘れて冷静さをかなぐり捨ててしまうので、返事は期待していなかった。

しかしここでもオータムはスコールの予想を飛び越える。

彼女の名前を呼び終えるよりも前に、オータムはスコールの手から携帯を奪い取った。

まるで野生の獣のように俊敏な動きに、実力者であるスコールの目も追いつかなかった。

ふと戦地を見ると、エムが顎を抑えながら地面を転げまわっていた。

「どうやら一瞬でエムをのしてから来たらしい。」

「實力はほぼ互角であるのに、このメロディを聞いた途端ドーピングでもされたかのような急激な戦闘力上昇である。」

「いきなり何だよ？あ？別に忙しいとかじゃねえって」

「……はあ。メールばっかになんのは仕方ねえだろ。私だって働いているんだ」

「……ああ、わかったって。また帰るから」

「そのような会話をして電話を切るオータム。」

「スツと顔を伏せているため、表情が分からない。」

「恐る恐るといった様子でスコールが彼女の顔を覗き見ようとする。」

「しかしその前にオータムがバツと素早く顔を上げたおかげで、彼女の顔を見ることができた。」

「顔は真っ赤に紅潮し、口角を限界まで釣り上げて笑っていた。つまり満面の笑みである。」

「スコール！あいつがメールばかりじゃなくて電話もしろってさ！それに帰ってくるのを待ってるって！」

「ええ……それは良かったわね」

「かあく！仕方ねえやつだなっ、本当に！仕事片したらちよつと顔だしてやるかっ！」

「頭をガシガシとかいて笑うオータム。」

「口で言っていることと表情に出ている感情がまったくかみ合っていない。」

「スコールは恋人のいじらしさに微笑ましさを感じるのと同時に、そんな幸せなことを自分に言わない院長に軽く拗ねる。」

「今度会った時にはいつも以上に連れまわすことを決意したスコール。」

「んじゃ、さっさと仕事行ってくるわ！」

「ええ、早く彼の元に行きたくて仕方ないのね」

「そんなんじゃねえって！じゃあな！」

アジトから出て行くこうとするオータムをからかうスコールであったが、彼女の求める反応は帰ってこなかった。

普段なら顔を真っ赤にして大きく否定するのであるが、今はニッコニコした満面の笑顔であった。

一応口では否定しているのだが、だらしなく緩めた顔はまったく否定していなかった。

スコールは何となく面白くない。

騒がしいオータムが去ったあとにアジトに残ったのは、慥然とした表情のスコールと顎を抑えながら殺気を撒き散らすエムだけであった。



「ふんふー、ふんふふん」

オータムは非常にご機嫌だった。

久しぶりに院長と会話することができ、しかも帰ってくることをお願いまでされた。

これでツンツンが中々治らないオータムも、孤児院に帰る大義名分を得ることができたのだ。

どうせ鬱陶しいクロシロコンビが妨害してくるだろうが、まあ今の良い気分ならば許容範囲だ。

度を越した妨害をこなければ、見逃してやることにする。

「ふふふんー、ふふんー」

オータムの鼻声が、血だらけの研究室に響き渡る。

彼女の鼻歌は非常に上手で、聞いている者を穏やかな気持ちにさせる。

しかし今ココに彼女の鼻歌を聞くことができる人間はいない。

皆地面に倒れ伏していた。

白衣を着た研究者だった人間もいれば、銃器を身に着けた軍人だった人間もいる。

それらは皆身体から血を溢れさせていた。

「んふー、今日の仕事も終わりつと。結構集まってきたんじゃねえか？」

鼻歌を歌い終えたオータムは、手の中にある待機状態のISを見る。

彼女の任務は、この研究室で開発されていた新型ISの奪取であった。

いつも通り人も物も破壊しつくして任務を完遂させたオータム。

さつさと自身が装着しているISを解除しようとする。

「う……あ……」

「あん？」

しかし、自分以外の声が聞こえたことに解除を踏みとどまる。

確かに皆殺しにしたはずなんだが……。

そう思って首を傾げるオータム。

蜘蛛を連想させる彼女のIS、アラクネを声の元へと動かす。

そこには一人の血だらけの女性が倒れていた。

どうやら意識はないようで、小さなうめき声だけ漏らしていた。

「お、こいつは中々骨があったやつじゃねえか。そうか、まだ生きていたのか」

オータムはポンと手を叩いて思い出す。

今回の襲撃の際、地面に倒れ伏している彼女は果敢にも自身に立ち向かってきた軍人だ。

量産型のISも装備していて、オータムとIS戦闘を繰り広げた。

彼女も中々の力量を持つIS操縦者だったが、相手が悪かった。

『亡国機業』フアントム・タスクの実働部隊の中でも一、二を争うほどの戦闘力を誇るオータムである。

その実力は国家代表生にも匹敵するほどだ。

「あー、悪いな。スコールだったらお前を拉致して私たちの仲間にする

るんだろうが、私はこれ以上仲間ってやつは欲しくなくてな」

オータムは彼女の頸を掴んで持ち上げる。

悲鳴は上がらない。

意識はもうないのだから。

オータムは八本ある装甲脚に突き刺さっていた人間を無造作に放り投げ、その血に濡れた脚を彼女に近づける。

「本当は私とスコール、そんで……まあ、あいつ……だけでいいんだよ、新しい世界の支配者は。クロもシロも、そんでもってあいつらも皆いらねえ。私たち三人が上に立つべきなんだ。まあ今あいつらとやり合ったら私もただじゃすまねえし、一応我慢しているけどな。……意識のないテメエに言っただけでわかんねえか。じゃあな、スコールとかあいつじゃなくて、私と戦った自分を恨みな」

そこまで言うと、オータムは装甲脚を彼女の腹部に突き入れた。

最後に残っていた命も、ここで潰えるのであった。

シャルロットのお話

一人の少女が、孤児院の中を駆けていた。

自分の目的地に向かってわき目もふらず、ひたすらにそこに向かって脚を動かす。

普段から鍛えられているのか、走るスピードは非常に速いものであった。

蜂蜜色の髪の毛が風に揺らされている。

後ろでゆるく一つに束ねられているが、髪の毛が少々暴れてしまうほどの速度である。

端正に整っていて穏やかな印象を与える柔らかい顔は、何かしらの達成感と期待で満ちていた。

これだけの速度で走っていると豊満な乳房が揺れて痛いはずだが、彼女はうまく揺れないように、まるで足音を立てずに走る忍者のように脚を動かしていた。

故に乳房が暴れまわることではなく、足音もほとんど立てていない。

これから向かう先に足音を立てて走ると、何者かが彼の元に行くことを察知した側近——つまりクロカシロ——にばれてしまうから、わざわざこんな芸当をしているのである。

なお、彼の前ではあざとくも胸を揺らしている模様である。

ミニスカートから見える美しい脚は、異性のみならず同性をも魅了するほどである。

程よい肉付きと脚の長さがモデルをも超える。

しかしそのスカートは風に揺らされていても、決して中の様子は覗くことができなかった。

これもまたどういった業なのか、中の布は他の人に対して一切姿を

現さない。

また余談だが、彼はこの少女の布をチラチラと見ることがある。「……んっ、んっ。声は大丈夫。髪の毛と服も大丈夫……よしっ！」目的地である彼の部屋の前に着くと、いきなり開けることはせずに一拍おく。

声の調子を整え、久しぶりに逢うことの喜びで声が裏返らないように気を付ける。

さつとコンパクトサイズの鏡を取り出し、前髪を少し弄る。

一通り全身も見て、衣服が乱れていないか確認する。

先ほどあれほど素早く走っていたのに、ほとんど直す必要はなかった。

久しぶりの再会に高鳴る胸を押さえつけ、コンコンとノックをする。

腕で胸を押さえつけた際、柔らかくそうに乳房が歪むが誰も見ている者はいなかった。

中からどうぞと声がかけられ、シャルロットは28日ぶりに聞く彼の声に腰が砕けそうになる。

しかし何とか踏みとどまり、部屋に入って行った。

「ただいまっ、院長！」

にぱーっと可愛らしい笑顔で挨拶をする彼女。

院長からおかえりと声をかけられ、凄まじいほどの歓喜が彼女の中で渦巻く。

ようやく自分の家に帰ってこれたんだなあと感慨深く頷く。

やはり自分の帰る場所は、彼の元なのだ。

孤児院自体はあまり問題ではない。

「今日はね、院長に僕から報告があるんだ」

そう言っただけの元に近づく少女。

持っていた紙を彼に差し出した。

そこにはIS学園入試合格証明が書き込まれていた。

彼女は倍率一万を超える超名門校であるIS学園に入学することが決まっていたのであった。

「えへへ、そんなに喜んでくれると、僕も嬉しいな……」

彼はそれを見ると、まるで自分のことのように喜び、彼女をほめたえる。

しかし彼女からすれば、それはあながち間違いではない。

自分の成した功績は、すべて彼のものである。

だから今回のIS学園入学という快挙も、彼の功績になるのだ。

そんなことを真面目に考えているのが、この少女であった。

「それでね、お願いがあるんだけど……いいかな……？」

上目づかいで彼に問いかけると、なんでも言ってくれと微笑んでくれる。

その優しい笑顔に鼻血が噴き出しそうになる彼女は、脳みそに喝を入れて踏みとどまる。

「その……頭を撫でてくれないかな？」

そんなことでいいのかと聞いてくる院長に、彼女は頷く。

すつと差し出した頭を、彼は優しく撫でてくれた。

よく頑張ったな、シャルロットという言葉と共に。

「ほへえ……」

彼女——シャルロットは久しぶりに飼い主に構ってもらえる犬のように顔を蕩けさせる。

下腹部がキュンキュンと締め付けられ身体が火照ってくる。

先ほどからさりげなく深い胸の谷間をちらつかせているのだが、彼は優しく微笑んで撫でてくれるだけ。

そのことに少し不満を覚えるものの、自分が出ていく前と変わらぬ彼の姿に嬉しくなる。

「褒美をもらったのなら、もういいんじゃないかしら。今は勉強中だし、院長の邪魔をしちゃダメよ？」

しばらく至福の時を過ごしていたシャルロットであったが、そんな彼女に話しかける少女がいた。

真つ白な長い髪を持ち、真紅の瞳をドロドロと濁らせている少女——シロであった。

「……あ、シロ。久しぶりだねー」

そんな彼女に、シャルロットは今気づいたように話しかける。実際、彼女は今シロに気づいた。

別に院長と会話するのに邪魔だったということではなく、ただただシャルロットの目には院長しか映っていなかったのである。

だから院長の膝の上で頭から煙を出して目を回している、黒髪紅眼のクロのことに気づいていなかった。

自然と彼以外の人間が彼女の意識から外されていたのである。

「勉強って？院長、今勉強をしているの？」

「そうよ。子供たちに負けていられないものね？」

シロに顔を覗き込まれてクスクスと笑いながら言われると、院長は困ったように微笑む。

そんなシロの姿に頬を引くつかせるシャルロットであったが、彼の前であるから自重する。

「へー、じゃあ僕も院長に教えてもいいかな？自分で言うのもなんだけど、結構賢いと思うよ、僕」

シャルロットがそう言うと、院長は嬉しそうに微笑んでお願いしますと言ってきた。

彼に頼まれたのなら、なんだったとする。

さらに彼に頼られたということに、シャルロットはゾクゾクするような感覚に浸っていた。

チラリとシロの方を見ると、なんでも吸いこんでしまいそうな紅眼でこちらを睨んできていた。

ドロドロに濁ったそれからは、強烈な敵意しか感じ取ることはできない。

しかしパツと無表情から笑顔に変わり、院長に話しかける。

「そうね、シャルルもいれば私の負担も減るでしょうし」

そう言つて悪戯っぽくクスクスと笑うシロ。

言っている内容のことを本当に思っていないくせに。

そうシャルロットは内心で毒づくが、顔は笑顔のままだ。

院長が申し訳なさそうに頬をかいている姿を見て、シャルロットは荒れた心を落ち着かせる。

「じゃあ僕はなにを教えたらいいのかな？」

「そうね、今やっているところをお願いしようかしら。私はクロを起こさないよね」

院長の膝上で目を回しているクロを簡単に抱き起し、シロは部屋のソファアールに向かう。

どうやらこれ以上密着しているところを見るのは嫌らしい。

それでもシロが大切に思っているクロだからこそ、ここまで野放しにされていたのだろう。

もしシャルロットが座っていたのなら、何かしら理由をつけてどこかしていたはずだ。

まあシャルロットからすれば、邪魔者が二人も消えたのだから万々歳である。

「んと……数学かな？じゃあ僕が指定した問題を解いてくれる？わからないところがあつたらすぐに言つてね。ちゃんと一から教えるから」

そう言つて院長に微笑むシャルロット。

そんな彼女に院長も微笑みかえす。

先ほどまで少し無防備なゆるい服装をしていたシャルロットであるが、いつの間にか服装が変わっていた。

ピチツとしたスーツを着込み、目には伊達眼鏡をかけている。

身体の線がはつきり出てしまうようなもので、豊満な胸の膨らみが見て取れる。

スカートも非常に短く、肉付きの良い太ももを惜しげもなくさらしている。

しかし生脚というわけではなく、艶めかしい黒タイツをはいていた。

「お得意の高速切替ラビット・スイッチつてわけね」

シロはクロの頭を自身の膝に乗せながら、感心したように頷く。

流星はIS学園に入学するほどの実力者。

早着替えもお手の物である。

「え？ここが分からないの？ふふ、いいよ。僕に任せて。ここはねえ

……」

シャルロットは彼の後ろから問題を覗き見て、教える。なに、そうした方が教えやすいからしているだけである。決してやましい気持ちがあるわけではない。

彼の背中に豊かな双丘が押しつぶされてしまうのも、わざとではないのである。



フランスの一等地に、一際高いビルが建っている。

そこはフランスに本社を置く世界的大企業、デュノア社のものであつた。

ISの製造・販売を行っている企業で、量産型に限れば世界で第一位のシェアを誇る。

IS関連の企業でも世界で一番繁栄している会社だと言えるだろう。

このビルはまさにその象徴なのである。

そんなビルの最上階に、デュノア社の社長室が存在している。ワンフロアまるまる社長の私室となっている。

そこには彼の妻も一緒に住んでいる。今、その最上階にいるのは社長ともう一人の女性だけである。

しかしその女性は妻ではなければ、彼が他にもいる愛人でもない。社長が柔らかかそうな高級椅子に重々しい雰囲気で座っている前で、その女性は札束を数えていた。

トランクの中には一束にまとめられたお金が、大量に敷き詰められていた。

「うんっ、今月の徴収分はちゃんとそろっているね」

その女性——シャルロットは朗らかな笑顔でそう言った。強い重圧を放っている社長と比較して、あまりにも正反対の雰囲気である。

ふんふんとご機嫌に鼻歌まで歌っている始末だ。数えていた札束を、再びトランクの中に入れる。

そんな彼女に、社長は話しかける。

「もう……終わりにしてくれないか……」

「ん？」

「お前たちの要求する金額は、あまりにも高すぎる。このままでは私たちは破滅してしまう……」

キョトンとした表情で社長を見るシャルロット。

デュノア社の社長は苦しそうに言葉を放つ。

顔中に汗が出ており、精神的に相当追い詰められている様子だ。

シャルロットはニツコリと笑う。

傍から見れば天使の如き笑顔だが、社長からすれば悪魔の微笑にか見えなかった。

「ダメだよ。ちゃんと僕は分かっているんだからね。この金額はデュノア社がギリギリ払える額だって」

「それがギリギリすぎるのだ。もう少し徴収金額を減らして——」

「それにさあ、デュノア社が世界シェア一位になれたのって僕たちのおかげだよな？ 恩を仇で返すつもり？」

社長は小さく悲鳴を上げる。

目の前にいるのは自分より一回りも二回りも小さい子供である。

しかしシャルロットは子供のするような表情ではなかった。

恐ろしく無機質な無表情。

目は何かしらの感情をまったく映しておらず、顔は能面のように動かない。

下手なことを言えば殺される。

社長はそう実感した。

だが彼は愚かな男だった。

生まれてから今まで何でも欲しいものは手に入れることができ、挫折というものを知らない彼は、シャルロットに対してもそういう態度を取ってしまった。

「そ、そもそもだ。シャルロット、お前は私の娘——」
「はあ？」

社長の言葉は途中で強制的に止められる。

一瞬で彼の前に移動したシャルロットが、彼の顔面を殴り飛ばしたのだ。

鼻がへし曲り、血が溢れだす。

あまりにも一瞬のことだったので、彼は最初何が起きたのかさえ理解することはできなかった。

しかし顔面全体に広がる猛烈な痛みと熱に、自分が殴られたことを認識する。

地面に倒れて震える彼を、ごみを見るような目で見降ろすシャルロット。

「やめてよ。いきなり名前なんて呼ばれたから、鳥肌が立つちやつたじゃない。もう、ダメだよ。僕の名前を呼んでいいのは、あの人とお母さんだけなんだから」

シミ一つない美しい肌を撫でながら、嫌そうに告げるシャルロット。

その後子供を叱るような話し方をして、あの人といったところで顔をとりけさせる。

彼女にとって名前とは特別なものである。

ゆえに彼女は孤児院の仲間であるクロやシロにも、シャルルという名前で呼ばせている。

最近では唯一の肉親と認識している母親ですら、名前を呼ばれるのが少し不快になり始めている。

そうであるのに、自分と母親を捨てた『父親』になんて、絶対に呼ばれていいはずがない。

「愛人だったお母さんとお腹の中にいた僕を捨てて、今更よく娘だなんて言えるよね。僕たち、あの人に助けてもらおうまでは大変だったん

だよ？でももう気にしないで良いよ。今は僕もお母さんも、あの人のとてもよくしてもらっているから。とつても幸せなんだよ？」

えへへと笑顔でそう告げるシャルロット。

これが嫁にいった娘の報告であるならば、どれほどほのぼのとした良い会話となることだろう。

しかし実態は正反対である。

シャルロットはもだえ苦しむ社長を横目に、トランクを持つ。

「本当は殺したいくらいなんだけどね。まだデュノア社はあの人の役に立てるから見逃してあげる。でももし徴収金額を少なくなしたり期限を遅れさせたりすると、どうなるかわからないからね」

部屋を出る直前、そう言うシャルロット。

扉が閉められたあと、残されたのは鼻から血を流す男一人であった。

真耶のお話

「山に登りましょう！」

いきなりそう発言した女性に、院長は驚きの表情を見せる。

普段優しい笑顔を見せてくれる彼女にとっては、非常に珍しい反応である。

そんな反応も可愛いと思ってしまう女性。

しかし客観的に見ると、驚くのは当たり前だと女性は考える。

久しぶりに帰省したと思ったら、いきなり山登りをしようなどとわけのわからないことを言うのだから。

「いえ、私の苗字にかけているわけではないですよ!？」

キョトンと首を傾げて聞いてくる院長に、女性は素早く突っ込む。

確かに彼女の名前は山田 真耶という名前だが、それが理由で山登りをしようと提案したわけではない。

突っ込みを受けた彼は、おかしそうにクスクスと笑う。

からかわれたことを知った真耶は、子供のようによくーと頬を膨らませる。

少し紅潮もしている。

成人した女性がそんなことをしても似合わないことが多いが、制服を着て高校生と言っても何ら違和感のない彼女がすると不自然ではない。

むしろ可愛らしいほどだ。

ただ、高校生にしては……というよりも一般の女性よりかなり大きく実った乳房が小さく違和感を感じさせるだろう。

「そのー、お恥ずかしいことに、最近太ってきちゃったみたいで……ダイエツトがしたいんです」

ダイエットということでは山登りである。

普通に走ってもいいのだが、彼女が走ると必ずと言っていいほど視線を集めてしまう。

男からは性欲からくる厭らしい視線。

女からは嫉妬と羨望からくる視線である。

それらの視線はすべて揺れ動く胸部に向けられていたりする。

勿論真耶もそれに気づいているし、一時期はそれがとても嫌だったが、本当に……本当にごくまれに院長の視線が胸にいくことを知り、むしろ見せつけるようになっていたりする。

ただ、今でも彼以外に視線を向けられると虫唾が走る。

そもそも、太ったといっても重量が増しているのは胸部のような気もするが、実際に体重は増えているので彼女がダイエットを決意するのも理解できる。

「はい、是非院長にも一緒に来てほしいんです」

そうお願いすると、彼は少しも逡巡することなく頷く。

自分の請願をこうまでもあつさりを受け入れてくれて、真耶は胸を高鳴らせる。

そつと手を置くとどこまでも沈んでいきそうなほど、豊満で柔らかな乳房だ。

キュンキュンと胸が締め付けられ、キュツと目を瞑る。

まるで初恋をした中学生のような反応だが、あながち間違っていない。

真耶は絶賛初恋継続中である。

「……………」

「ク、クロちゃんも行きますか?」

全身からピンク色の瘴気とハートを飛ばしまくっていた真耶に、ジーツとした視線を向けるのは、院長の最側近で護衛役でもあるクロであった。

褐色の美少女に睨まれ、ビクツと身体を震わせる真耶。

「……………真耶に譲る」

「ほ、本当ですかっ!?!」

想定していなかった返答に、真耶は驚きながらも喜ぶ。

まさか院長にべつたりのクロが、自分から離れると宣言するとは。柵から牡丹餅の気分である真耶は、まさに幸せの絶頂にいた。

「……真耶だし、だいじょーぶ」

勿論クロも考えなしに院長の連れ出しに許可したわけではない。

いくつか理由がある。

まず単純に、クロが真耶のことを気に入っているということがあ
る。

これがもしシロと真耶、さらに孤児院を出るまではよく世話をしてくれ今はどこぞの貴族のメイドをしている彼女以外の人物であるならば、クロは必ず院長に引ッ付いていただろう。

しかし真耶にはある女性が出て行った後、色々世話をしてもらっていた。

とくに下着に関して二人はカップ数が同じなため、真耶からアドバイスを受けていた。

院長を悩殺するための過激な下着を要求したのだが、真耶は目を回して役に立たなかった。

また、もう一つの理由として危険が少ないことである。

この孤児院がある国は現在も内戦が続いているが、この周りではほとんど戦闘が起きない。

とくに顕著となったのが、この前の侵入者をクロが殺害し、それを指示した男をシロが虐殺してからである。

その後からはほとんど孤児院の周りで戦闘は起きていない。

さらにもし襲撃があったとしても、真耶はかなりの実力者である。

あの世界最強のブリュンヒルデでも襲ってこなければ、そうそう負けはしないだろう。

そう考えての結論であった。

「えへへー、ダメですよ院長。ここはお外ですし〜」

「……いんちよー、頭気持ちいー」

これからの山登りのことを考えて妄想世界にトリップする真耶に、院長に頭を撫でられて普段の無表情を崩して顔をとりけさせるクロ。

この状態はシロが戻ってくるまで続いたのであった。



「はひい……はひい……」

真耶と院長は夕方から山に登り始めた。

山は孤児院から近いところにある。

孤児院の勢力圏内なので、武装組織もここにはほとんど入っていない。

もし何かあったときは、真耶が時間稼ぎをしてその間に救援を呼び込むのだ。

「ふう……ふう……」

ダイエットと称して院長を連れ出した真耶は、彼よりも早く息を荒げていた。

理由としては、無駄に張り切ってしまった登山服である。

標高もそれほど高くなく、二時間ほどで登頂できてしまう小さな山なのだが、真耶は冬の富士山に登るような服を着込んでいた。

二人きりということで服にも気合を入れてきたのだが、これは明らかにミスであった。

脱いでしまいたいのだが、非常食やらを詰め込んでいるためカバンに入れることもできない。

ここでも間違った気合の入れ方をしてしまっていた。

「ええ、だ、大丈夫ですとも。あ、汗をかくとダイエットにもいいですね……っ」

心配そうに話しかけてくる院長に、ニッコリと笑って返す真耶。

しかしその笑顔には大量の汗が付着していた。

眼鏡は曇ってしまっているほどだ。

院長に迷惑をかけるわけにはいかない。

「きやあっ」

一生懸命に脚を動かして前へと進む真耶だったが、ここで彼女のスキルであるドジっ娘が発動。

躓いて転びそうになる。

キュツと目を閉じる真耶だったが、彼女は地面に倒れる前に受け止められる。

「い、院長……」

見上げる彼の顔は、ニツコリと微笑んで無事かどうか尋ねてくる。いつもニコニコとしていて穏やかな印象を与える彼の腕は、意外にも力強い。

ぽーっと呆けた様子で彼の顔を見上げる真耶。

まるでお姫様抱っこされているような感じがして、妄想の世界に飛び込んでしまいそうになる。

「ん……っ」

深い妄想世界に飛び込む寸前、彼の腕が自分の胸に当たっていることに気が付く。

勿論、驚掴みにしているなんてことではない。

ただ腕に豊満すぎる真耶の乳房が当たっているというだけである。

わざとではないことは明確であり、そもそも故意であっても院長が相手なら悦ぶだけである。

真耶の理性は踏みとどまることを声高く主張するが、獣の如き本能が圧倒的にそれを押しつぶす。

『もう、その感触を堪能しちゃえよ』と主張する本能。

真耶の身体はそれにあっさりと従ってしまった。

「……っ！っ……！え、ええ、大丈夫です。ちよ、ちよっと脚を痛めただけですから……」

腕の中で不規則に豊満な身体を震わせる真耶に、大丈夫かと心配する院長。

真耶は頬を真っ赤に紅潮させながらも、笑って答える。

腰は未だガクガクと震えるが、喝を入れて力を込める。

ちなみに真耶はまったく足を痛めていない。

そもそも【あの孤児院出身】であるのに、たかが山登りで足を挫くはずがないのである。

「ふえっ……っ？い、院長!？」

クロに院長との二人だけでの登山が許可されたという幸運に続いて、ここでも真耶にとって予期せぬ幸運が舞い込む。

彼はなんと中々動けない様子の真耶を背負ったのだ。

足を挫いたのは嘘であるが、違う意味で動けないのは事実である真耶は顔を真っ赤にする。

院長と身体を密着させることに、強烈な羞恥心が襲い掛かる。

今更何を言っているんだと真耶自身の冷静な部分が主張するが、それでも心臓の高鳴りは収まりそうにない。

「も、もう少しで山頂ですから大丈夫ですよ?」

もう少しなら、なおさら負ぶると言う院長。

真耶の意見に耳を貸さず、彼女をおぶったまま歩き始める。

真耶のことを気遣ってゆったりとした歩調だ。

ゆらりゆらりとゆりかごのように揺れる自分の身体に、心地よさを覚える真耶。

「……じゃあお願いしちゃいますね」

とうとうその心地よさに打ち負かされる。

彼の頸に腕を回し、キュッと抱き着く。

その結果、優れたスタイルを持つ女性が多い孤児院の中でも断トツの大きさを誇る乳房が、背中に当たって押し潰れる。

普段の真耶からは想像もできないようなアプローチだ。

これがないと思っただけクロも二人きりの登山を許可したのだが、予想外の事態である。

もしクロがいたら、真耶を引きずりおろして院長の背中に飛び乗るであろう。

「(あふっ……凄く気持ちいいなあ……)」

真耶は院長の背中で、顔をだらしなく緩めているのであった。



「ふふふ……私を負ぶってくれてありがとうございますございました」

二人が登っていた山の頂上。

そこには真耶と院長の二人以外誰もいなかった。

院長は眠っていた。

ごく短距離とはいえ、人を一人負ぶって山を登るのは確かに重労働である。

真耶は彼の頭を太ももの上に乗せ、優しく頭を撫でる。

くすぐったそうにする彼に、慈愛溢れる笑顔を見せる真耶。

「私があなただを本当に誘った理由。ダイエツトなんかじゃなくて、この夜景をあなたと見たかったからなんですよ？」

真耶が見下ろすところには、人工の光が数多く輝いていた。

点々と存在するそれらの光は、まばゆいほど煌めいていた。

そこらの先進国にも劣らないほどの光量である。

しかしここは、十数年ほど前までは火と血と死の三つしか存在しない荒れ果てた土地であった。

「この綺麗な夜景を一緒に見るのも目的でした。ロマンチックですよ？でも私はあなた自身の功績を、見てほしかったんです」

二人で一緒に夜景を見るのも、幸せな瞬間だと思っていた真耶。

院長が寝てしまう前、ほんの少しの間二人で夜景を見たとき、確かに幸せを実感した。

しかし真耶にはそれ以上の目的があった。

それはこの煌びやかな光景を築いたのは、彼自身だということを知り、認識してほしかったのだ。

「少し前まで笑顔のなかった土地。皆泣いていて、皆怒っていて、皆悲しんでいた場所。それが今ではこんなに笑って、生きていることを楽

しんでいる」

真耶は他の孤児院のメンバーほど排他的ではない。

院長と孤児院に迷惑がかからなければ、他人だって助けたいし幸せになってほしい。

「それもすべて院長のおかげなんですよ？」

健やかな寝息を立てる彼の頭を撫でる真耶。

彼を見る彼女の瞳は潤み、熱にうなされていくようだ。

「でも世界にはまだまだ悲しんだり、苦しんだりしている人たちがいます。今の世界がそのことを強いるのであれば、新しい世界を創ればいいと思っちゃうんです」

真耶の瞳は院長のみを映していた。

そしてそこはどんよりと濁っている。

まるでどのような光も吸収してしまうかのようだ。

真耶にとって、光とは院長である。

それ以外の光は彼女になんら影響を与えない。

「そして新しい世界の支配者となるのは、あなたです」

真耶は想像する。

笑顔と幸せが溢れた新世界を。

そしてそこを統治する院長の姿を。

胸がドキドキと高鳴り、下腹部がうずく。

「んはあ……そのためだったら、院長のためだったら、私、頑張っちゃいますっ」

真耶はそのあと彼と一緒に孤児院に戻った。

流石に手を出すとクロに殺されかねなかったので、そこは自重している。

しかし自分の匂いはしっかりと院長に擦り付けていたのであった。

人間離れた嗅覚を持つクロとシロが、その匂いで非常に不機嫌になったのは余談である。

なお、次の日には彼女たち二人の匂いが院長には擦り付けられていた。

院長のクズ日記3

Q月P日

子供の元気な声が聞こえてくる場所は、いいところだと聞いたことがある。

それに従うと、俺がいるこの国はどうやらいい国らしい。

近所で武装勢力とかいう超はた迷惑な馬鹿の集団がぶつかり合っているけど、いい国らしい。

何故なら、俺のいる部屋までガキどもの元気な声が聞こえてくるからだ。

……うるせえええええええつ!!

朝っぱらからピーピー騒いでんじゃねえよ! 起きちまったじゃねえか!

何で朝から鬱陶しい声を聞かないといけないんだよ。

本当、勘弁してくれよ。

お前らの相手をする嫌な一日が始まるんだ。朝くらいゆっくりさせろよ。

ドタバタドタバタと、朝から騒がしいことこの上ない。

お前ら、日本の密集住宅街でそれだけの騒ぎ起こしてみろよ。

近所トラブル勃発間違いなしだぞ。

いくら【俺が】作った孤児院が立派で荘厳で広大だからといって、騒ぎまくるなよ。

しかし、今日は珍しく一人で起きた。

なんだろう……この清々しさ……。

ガキどもが俺のベッドにもぐりこんでくることは、多分あいつらにトラウマやら辛い過去やらがあるんだろうけど、知ったことじゃな

い。

他人の体温って気持ち悪くて仕方がない。

夢の中で酒池肉林の愉快的な生活を送っていたのに、人がくつついてくると悪夢に早変わりするからね。

まあ、クロやシロみたいなのが一緒に寝ているとき、抱き着いてきて胸が当たるのは気持ちがいいんだが。

この欠陥だらけの身体は手が出せないし、押し付けられる楽しみしか享受できない。

マジで最低だ。俺もリア充したい。

自分の身体にイライラしながらも、今日は比較的穏やかな気分だった。

ボーっとしているだけで美味いご飯が出てきて、のんびりと食べる。

あとは、時間が許す限り昼寝でもして、勝ち組ライフを謳歌しようとした。

だが、今日も今日とて邪魔が入る。

俺の部屋に入ってきたのは、クラリツサだった。相変わらず無愛想な顔だ。

クロも無表情がデフォだが、頭を撫でたりしてやるとほにやっとな顔を崩すので、猫みたいでまだいい。

でも、こいつマジで愛想悪いからなー。

何だか見下されている気分で、不愉快になる。

それに、こいつも裏切り者だしな。

伝え聞くとところによると、こいつはどこぞの軍隊に入っているらしい。

国民守るより俺を守れよ。

武装勢力がドンパチしていて、このあたりはかなり危険なんだぞ。

俺の盾となって死ぬくらいなこと、言えんのか。

それにさ、俺の部屋に来てアニメ鑑賞はやめろよ。

別にアニメが嫌いなわけじゃないけどさ、お前が見るアニメって全部キャラクターが幸せそうじゃん。

俺、あがいたりもがいたりしているキャラクターが出ているアニメの方が好きなんだよね。

見ていて嘲笑えるし。

なんていうか……傾向が合わないアニメを見るのって中々しんどい。

それに、こいつもやけにすり寄ってくるし。

俺がソファアに座ってんだから、地べたにケツつけろよ。

一緒に座るなよ。暑いし、生殺しだしで最悪なんだぞ。

軍人のこいつにアニメを見たくないなんて拒否することもできず、仕方なく鑑賞をする。

そこで目についたのは、眼鏡をかけたアニメキャラだ。

こいつ、全体としてほのぼのとしたアニメの中で唯一不憫な目に合っていた。

……愉快だ。

最初こそ嫌々見ていた俺だったが、次第に熱心に見るようになる。すると、何を勘違いしたのか、クラリツサの奴は何故か眼鏡を掛けやがった。

……いや、別に眼鏡フェチじゃないっす（苦笑）。

Q月A日

今日は悪夢を見た。

夢の中で、超大きな黒と白の猫が二匹現れた。

もうめちやくちや大きい。

俺の身長なんて軽く越えていた。

その時点で夢なのだが、冷静じゃなかった俺はまったくそんなことに頭が回らなかった。

とにかく、嫌な予感がビンビンしたので、ぐるりと回って全速力で

走りだした。

そもそも、俺って猫があまり好きじゃないのだ。

あいつら、人間に庇護されてめっちゃくちやイージーモードの人生……いや、猫生を歩んでいる奴らも多い。

それにもかかわらず、あいつらはまるで自分が主人であるかのように、我が物顔で部屋に居座るじゃないか。

動物とか全部嫌いだけど、まだ犬の方が可愛げがある。

あいつらは、人間のことを主人と認めることが多いからな。

そんなわけで逃げ出した俺だったが、化け猫二匹はなにをトチ狂ったのか、俺を追いかけはじめたのだ。

ああ、絶叫したね。

現実世界では決して出したことのない大声を出したね。

俺は今までにないほど全力で走ったのだが、相手は獣畜生、すぐに追いつかれてしまった。

そして、機嫌が良さそうに「にゃくん♪」と鳴いたかと思うと、二匹揃って俺に腹プレスを仕掛けてきやがったのだ。

柔らかいけど、押しつぶされる苦しみに喘ぐ俺。

嫌な汗が噴き出し、涙も出てくる。

「もうダメポ……」と最期の言葉を残したとき、俺は目を覚ました。

……ええ、最悪の目覚めですよ。

現実世界でも命が危ないときばっかりなのに、どうして夢の中でも死にかけなければならぬのか。

あまりの不条理に、俺はホロリと涙する。心の中で。

今日は珍しく、チエルシーがいた。

こいつも裏切り者だが、俺の好感度は底辺までには低くない。

まあ、間違いなく低いのは低いのだが、他の奴らよりはマシだということだ。

何故ならこいつ、俺の世話を率先してやってくれるからだ。

いやー、楽ですわ。

こいつの作る飯はうまいし、朝は優しく起こしてくれるし。

ただ、起こすのが朝六時とかやめてくれませんかねえ。

まだ寝させろよ。五時間くらい。
ギャーギャー喧しいなと思つたら、クロとシロが喧嘩していた。
俺の部屋で何やってんだ。
というかこいつら、また俺のベッドにもぐりこみやがったな。
今朝見た悪夢はこいつらの仕業か。マジでふざけんよ。
お前らの添い寝で、俺は朝からうんうんうなされたんだぞ。
朝っぱらからイライラしていた俺だったが、朝飯ですつかりと機嫌を治す。

うん、やつぱりチエルシーの飯はうまいわ。
家事もできるし、俺に意見しないし……。

本当、裏切り者でさえなければなー。

朝飯の内容も、この国ではほとんど食えない和食だった。
焼き魚の骨を取るのが面倒で嫌いなのだが、チエルシーはそれも取ってくれた。

至れり尽くせりだな……っ！

こうして俺はすつかり上機嫌になったのだった。

まあ、その後シャルロットが部屋に突撃してきて一気にテンションが下がったのだが。

また生脚を見せつけやがって……あざといんだよ……！

Q月S日

ウサギ死ぬね。

基本的に動物嫌いな俺だが、この世界で一番嫌いな動物はと問われれば間違いなくこう答える。

——ウサギ。

しかし、俺がウサギに何かをされたわけではない。
むしろ恩恵をもらっているくらいだ。おいしかった。

では、何故俺がここまで嫌っているのか？

それは、俺が嫌いな人間がウサギに似ているからだ。

篠ノ之 束。

ISとかいう、何か凄い兵器を作ったドラえもんみたいなやつだ。どこでもドアよこせよ。

こいつ、何を考えているのか、しょっちゅう俺の部屋に遊びに来る。

いや、来るなよ。誘ってないじゃん……。

こいつの何が嫌って、うるさいのだ。元気なのだ。

俺、元気だつたりしあわせそうだつたりする人間って嫌いなんだよね。

それに、こいつはなにを考えているのかさっぱりわからないから嫌だ。

今日も屋根から飛び降りてきたからね。

普通、部屋に入ってくる時に通るのは扉だろう？

忍者みたいに、屋根から奇襲かけてくるんじゃないやねえよ。

それと、マシンガントークがうざい。

俺に話させる気がないなら、ぬいぐるみにでも話しかけてろよ。

この糞ウサギ、どうして俺が一人でいるときにだけやってくるのだろうか。

奴隷が近くにいないと、俺が茶を用意しなければいけないんだけど。

この俺に雑用なんてさせんなよ。

でも、俺は大人しくお茶を用意する。

だって、こいつ怖いんだもん。

よくわからないけど、こいつの作ったISって世界最強の兵器なんだろう？

それを作るような奴に敵視されたら、もう俺生きていけない。

有能な盾はしょっちゅう孤児院からいなくなるし、もう嫌！

クロさん、シロさん！少し懲らしめてやりなさい！

というか、今日の束の様子がおかしい。

やたらとウインクしてくる……キモイ。

お前、可愛いと思ってんの？

いや、確かに容姿だけ見ればお前って高得点よ？

痛々しいウサ耳とかつけていなかったら、百点満点に近いんじゃないか？

だが、お前の性格が致命的なまでに俺と合わない。

俺は、ただ俺に従順に従って、俺の代わりに十分以上に稼いできてくれて、家事も全部やってくれる、そこそこ可愛い女が好きなんだ。

俺の決めつけだけど、お前、愉快犯だろう？

だから、ウインクするんだったら他の奴にしろ。うざい。

Q月D日

嘘だろう……？

Q月F日

嘘だと言ってよ……。

Q月G日

もうダメだ……おしまいだあ……。

Q月H日
皆死ね。

Q月J日
マジ無理……。

Q月K日
隕石落ちてこないかなー。

Q月L日
働けってどういうことだしゆか？
勤務先がニッポンってどこだしゆか？
IS学園って何するところだしゆか？

クラリツサのお話

「でやあああつ!!」

とある国の孤児院の中で、元気のいい子供の声が響き渡る。

今までのこの国では、張りのある声など聞くことはほとんどなかった。

それが、身体能力的かつ経済的弱者である子供だとすれば、なおさらであった。

今では少しは改善されたが、それでもそのような声を聞くことができる機会は少ない。

しかし、この孤児院は違った。

子供たちが和気藹々と、切磋琢磨しながら共同生活を送っていた。広大な土地面積を誇る孤児院の内部には、多くの施設が作られていた。

今、一番活気のある場所は室内訓練場であった。

近接格闘戦に関する知識や、身体の動かし方を学ぶ場所である。

ここでは、多くの子供たちが組手を取っていた。

普段は仲が良く、いつも一緒にいるような間柄であっても、戦闘はお互い真剣である。

弱点である顔やのどなどをちゅうちよなく攻撃し、相手を殺す勢いで拳を交わし合う。

それは何のため？

彼ら、彼女らの恩人である院長のためである。

たとえば、昨日まで同じ釜の飯を食った仲間であっても、院長に刃向うのであれば一切の容赦なく駆逐する。

子供たちはそのように「教えられていた」。

「甘い」

「うきやあつー!」

子供たちにそのようなことを教えるのは、孤児院メンバーの中の幹部連中である。

この室内訓練場の中にも、二人の幹部がいた。

たった今、自分に向かってきた子供を容赦なく投げ飛ばした女性。

子供たちはみな汗だらけになっているのだが、彼女は涼しい顔を崩さなかった。

「立て。院長の駒であるならば、これほど簡単に膝をつくな」

おかつぱ頭のように、短く切りそろえられた鈍い青の髪。

ぴったりと整った髪形は、彼女の性格を表すかのようだ。

鋭い瞳はツツと吊り上り、見る者が恐れを抱いてしまうほど鋭い。

しかし、顔は美しく整っており、瞳の冷たさを緩和させる。

とはいえ、冷たい印象を与えるのは事実で、そっちの気がない男でもM側に引きずり込むような苛烈さを感じさせる。

彼女は黒色を基調とした軍服を、ピチツと着こなしていた。

身体の線が出るほどフィットした軍服は、彼女のスタイルの良さを前面に押し出していた。

覆うと手のひらから少しこぼれてしまうDカップの乳房。

軍人らしく鍛えられたお腹はスツと引っ込んでいて、臀部にかける線を美しくしている。

短いスカートは彼女の長い脚をさらしっていて、ニーハイソックスとガーターベルトとの調和は男心をくすぐって止まない。

「さあ、久しぶりに帰ってきたのだ。少しは齒ごたえを感じさせてみる」

キリツとした表情で辺りの子供たちを見渡す彼女。

名前はクラリツサ・ハルフォーフ。ドイツ軍に所属している女軍人である。

周りを冷たい目で見渡すクラリツサに、孤児院の子供たちはタジタジである。

自分たちが複数でかかっても、あつけなく投げ飛ばされる。

絶対に勝てそうにもない相手に、誰が喜んで戦いを挑むだろうか。
なお、それは院長が関係していない時に限る。

「クラリツサ、やり過ぎ……………」
「む、クロか……………」

クラリツサと子供たちとの間で非常に大きな緊張感が漂う中、彼女に待ったをかける人物がいた。

幹部メンバーに意見ができるのは、同じく幹部メンバーのみ。

多くの幹部メンバーが孤児院の外に出て行っている今、クラリツサを制止できるのは限られていた。

そんな一人が、黒髪紅眼の褐色巨乳美少女、クロである。

孤児院を統べる院長の側近である彼女は、まさに大幹部と言っても過言ではない。

そんな彼女に制止されたクラリツサは、流石に止まらざるを得ない。

「しかしだな、院長の御身体を警護するには、この程度では……………」

「だいじょーぶ…………」。クラリツサが強いだけで、こいつらも弱いわけではない」

クラリツサは苦言を呈すが、クロに反論されてしまう。

クロの言う通り、孤児院の子供たちが弱いわけではない。

もし、それほどの弱者であるならば、近くの武装勢力が侵入を試みてまで子供たちを誘拐しようとはしない。

ただ、軍人でもあるクラリツサが強すぎるだけである。

子供たちは年齢にそぐわないほどの実力は持っている。

少なくとも、同年代の少年兵くらいならば問題ない。

「それに…………いんちよーを守るのは僕」

「…………ふふっ、そうか。それなら安心だな」

何でもないように言うクロに、毒気を抜かれたクラリツサはクスクスと微笑む。

冷たい彼女が笑うところを見て、子供たちはポカンと口を開ける。

クロもまた、彼女を見てきよとんと首を傾げる。

どこに面白いところがあったのか、わからなかったからだ。

しかし、クラリツサは安心する。

そうだ、クロとシロの二人がいれば、万が一にも院長に危害が及ぶことはないだろう。

側近が彼女たちというのは少し……いや、かなり【納得がいかない】が、今のうちは我慢しよう。

それに……。

「(シロはともかく、クロは萌え萌えだからなっ!)」

脳内で盛大に蕩けるクラリツサ。

この女、実を言うと可愛いものが大好きであった。

また、彼女は日本のオタク文化にも精通しており、日本の少女漫画を愛読していただけだったのだが、それからどんどんとのめりこんでいつてしまっていた。

ちなみに、彼女が今一番好きジャンルは、悪のボスとそれに仕える女主人公ものである。

「さて、もう訓練は必要ないみたいだから、私はお暇させてもらうとしよう」

「……ん」

クラリツサはカツカツと綺麗な姿勢で、軍靴を鳴らしながら歩いて行った。

クロは彼女がどこに行くかは悟っていたが、彼女のことはそれほど嫌いでもないので見逃すことにしたのであった。



「院長、これは中々いいアニメですね」

クラリツサは訓練場から出た後、直接その足で院長の私室に向かった。

幹部しか入れない格式高い場所。

都合のいいことに、他の幹部連中の姿はなく、快くクラリツサを迎え入れた院長とは二人きりとなっていた。

二人は今、日本のアニメを見ている。

まるで恋人同士のように、一つのソファアームに座って寄り添うようにしている。

自立した強い女軍人であるクラリツサが、男に甘えるようにしている姿は、普段の彼女を知る者なら腰を抜かすほどのことである。

「(あいつが見ていたら小言を言うだろうが……今は私の番だからな。許せ)」

クラリツサはある人物のことを、脳内に思い描く。

幹部連中の中で一番仲が良いと言えるメイドである。

まあ、仲が良いといっても、前に【比較的】とつくのだが。

主従関係をはっきりとさせ、上下関係を重視する彼女に見られたら、目がまったく笑っていない笑顔と共に強烈な殺気が飛ばされてくるだろう。

だが、今はこの場にはないのでセーフである。

この時、イギリスにいるとあるメイドが強い不快感を抱いたのだが、余談である。

そんな考えをしていると、甘えるように身体を傾けていた院長から話しかけられる。

「楽しそう……ですか？ええ、これは勉強になりますから」

院長は優しく自分を見降ろしながら、嬉しそうに笑っている。

その笑顔は嘲笑ではなく、クラリツサのことを心の底から考えているとすぐに分かる、柔らかい笑みだった。

クラリツサは自分がどのような表情を浮かべているかはわからないうが、もし院長の言う通り楽しそうにしているのであれば、それは院長のおかげだと思う。

確かにアニメや少女マンガはよく見るが、正直勉強のつもりで見ているのでとくに面白みは感じない。

ただ、側に敬愛してやまず、自分より上位に位置する絶対守護存在

の彼がいるから、楽しいのだ。

完全に自立し、どのような状況の中でもスツと仁王立ちすることができるクラリツサは、院長の近くでのみ安心感とぬくもりを得ることができた。

「……こんな感じでしょうか」

アニメの中では、主要人物である眼鏡をつけた美少女が縦横無尽に駆け回っていた。

それを見た院長は、クラリツサに眼鏡が似合いそうだと独り言をつぶやく。

耳ざとくそれを聞いたクラリツサは、どこからかスツと眼鏡を取り出し装着する。

院長の要望や命令には絶対遵守の彼女は、彼が求めることを何でもするつもりでいた。

求められたものをすぐに出せるように、こういった技術は比較的関係がマシな部類にあるメイドに教えてもらっていた。

眼鏡をつけたクラリツサは、彼女の賢明さと冷たさをさらに明確に表していた。

しかし、彼に甘える今の彼女は、氷のような肌を薄く染め、下から院長を見上げる。

これでは冷たさなど一切感じさせない。

ちなみに、この時一瞬で軍服のボタンを数個外して、胸元を強調するの忘れない。

幹部連中の中では小さめに部類されるが、クラリツサも平均より豊かな胸を持っているため、立派な谷間が見えていた。

今、こうして院長のために働くことだけでも幸せなのだが、もし彼に求められたらどれほどの幸福を味わうことができるだろうか。

それは幹部メンバー全員の疑問であり、だからこそ皆彼を誘惑しようとするのだ。

ただ、時と場所を考えないと、他のメンバーから凄まじい殺気と、下手すれば実弾や拳が飛んでくるので気を付けなければならぬ。

とくに、独占欲が非常に強いメンバーが相手とならば、余計にだ。

「あ、ありがとうございます」

自分の意見をしっかりと持ち、またそれをちゆうちよなく発信することができるクラリツサにして、珍しくどもった返事を返す。

しかし、それも仕方がない。

至高の存在たる院長に、優しく鈍い青髪を撫でられ、自分の眼鏡姿を褒められたのだから。

今にも昇天してしまいそうなほどの幸福感を味わうクラリツサ。

これで、院長のために戦って死ねたらまさに言うことなしである。

結局、今回も誘惑の甲斐なく終わってしまったが、こうして優しく受け止めてもらうだけで、彼女はとても大きな幸せを感じるのであった。



「……遅いわね」

クラリツサを出迎えたシロが最初に言い放ったのは、そんな言葉だった。

場所はシロの私室。彼女に呼び出されたクラリツサは、そこに足を運んでいた。

クロと対を成すように真っ白なシロ。

共通するのは、爛々と輝く血よりも紅い瞳である。

見つめられたら命まで吸い取られてしまいそうなその目を細くし、不機嫌であることを隠さないシロ。

そんな瞳に睨みつけられながらも、とくに反応を示さないクラリツサ。

「すまない。だが、院長に対するぐい挨拶を省略することは許されないだろう？」

「当たり前でしょう。でも、あんたはじゃれついていただけじゃない」
クラリツサの疑問に、シロはすぐに返答する。

もし、外に出ているメンバーが帰ってきたとき院長に挨拶をしなければ、それは不敬である。

シロやクロは当然のことながら、他の幹部メンバーも黙ってはいないだろう。

むしろ、鬱陶しい奴らを減らせると喜んで攻撃を仕掛けるに違いない。

まあ、院長至上主義を臆面もなく掲げる彼女たちが、そんなへまをすることはありえないのだが。

「それで？今の状況はどうなの？」

「ああ、多くの軍人を引き込むことはできそうだ。それにいざというときの仕掛けも、簡単にできそうだ」

シロとクラリツサが話しているのは、彼女たちの野望のためのこと。

皆それぞれ動機や求めることは違えど、最終的な結果は同じである。

そのために、彼女たちは人知れず暗躍していた。

「そう。あんたが何をしようが勝手だけど、仕事はちゃんとしてよね」

「勿論だ。ドイツ軍のことは任せておけ」

シロは話し合いをすぐに切り上げた。

クラリツサのことをどう思っているかが、彼女が優秀なことは認めているのである。

つまり、院長の役に立つ駒であることは、シロも、そしてクラリツサ自身も認識している。

だからこそ、シロは彼女を排除していない。

役に立たない人間など、この孤児院にいる資格はない。

クラリツサもまた、早々に立ち去ろうとする。

扉に手をかけ、思い出したように振り返り、シロに言う。

「そうだ。そこにいるゴミだが、そろそろ処分したらどうだ？」

クラリツサの言うゴミという言葉に、シロは視線を後ろにやる。

そこには二人の人間がいた。

しかし、身体は正常な人間のものではなく、腫れや壊死、部位の欠損などが数か所にわたってある。

この人間たちは、シロに院長の敵だとして拉致され拷問されていたのだ。

クラリツサの頭は、もう二人の寿命は長くないと告げていた。

まあ、これだけいじめられてまだ生きているだけでもすごいのだが。

「ふふふ、流石は武装勢力の幹部よね。中々死なないから、私もやりがいがあるつてもものよ。片方はあげるけど、どうかしら？」

「じゃあ、もらおうか」

シロの問いかけに、クラリツサは頷く。

そのまま流れるように腰から拳銃を抜き、発砲した。

銃弾は的確に男の頭を貫き、生命を終わらせた。

「あのお方に刃向う者は皆死罪だ。院長の鉾である私が、貴様らを皆殺しにしてやる」

人の命を奪った直後の者の顔とは思えないほど、恐ろしく冷たい表情。

クラリツサはそのままシロの私室を出て行ったのであった。

「……これ、だれが掃除すると思っているのよ」

残されたシロは、はあっと憂鬱気味にため息をついたのであった。

チエルシーのお話

孤児院の長である院長の私室の前に、一人の女性が立っていた。いつも騒がしい声が止まない孤児院も、かなりの静けさで満ちている。

その女性は、チラリと手の中にある懐中時計を見る。

時刻は午前5時50分。

それを確認すると、女性は愛おしそうに、かつ何よりも大切なもののように、ゆっくりと懐にしまった。

女性の衣装は、かなり特殊なものだった。

もし、日本の街中を歩いていると、注目は避けられない衣装。

そう、メイド服である。

肩にかからない程度に切られた鈍い赤色の髪。

そこにアクセントをつけるように、白いカチューシャを頭につけていた。

顔の造形は、まるで精巧に造られた人形のように整っていた。

懐中時計を見ていた時、うつすらと笑っていたその顔は、どんな男でも虜にしてしまえるほどである。

張りがあつて瑞々しい肢体を覆うのは、奉仕をする人間を示すメイド服。

スカート丈は、清楚さを感じさせる長いものである。

院長に仕える唯一のメイドである彼女。名前はチエルシー・ブランケット。

孤児院メンバーからは、万能メイドと畏怖されている人物である。

チエルシーは音を一切立てることなく、扉を開ける。

カーテンで閉じられ、朝日が入ることのない部屋は真つ暗だ。

家具がどこにあるか、地面に何が落ちているかが分からないような

部屋だが、チエルシーは一瞬たりとも立ち止まることなく、迷いなく歩いて行く。

何度もこの部屋を訪れているチエルシーには、この程度の暗闇はまったく問題にならない。

しょっちゅうこの部屋を訪れる幹部メンバーだが、このような芸当ができるのはクロシロコンビにエム、そしてどこぞのウサギくらいな者である。

チエルシーは、その驚異的な視力を活かして、ベッドの上で眠る人物を見る。

ベッドの上には、当然ながらこの部屋の主である院長。

そして、そんな彼に寄り添うように眠るクロとシロの姿があった。

前後から挟むように、まるでサンドウィッチのような状態にある。

クロは普段の無表情を、ほんわかと安心感で満たされた表情へと変えている。

さらに、普段から蠱惑的でミステリアスな雰囲気を漂わせているシロも、クロと同じくまったく警戒をしていない安らかな表情で眠っていた。

チエルシーはそんな彼女たちを見て微笑ましく思い、間に挟まれて暑そうにしている院長を見て癒される。

彼女の脳内フォルダに、院長の寝顔が新たに保存された。

ちなみにこれで五ケタになるまであと少しとなった。

チエルシーは寝顔を堪能しながらも、主の健康的な生活のために心を鬼にして彼を起こそうと手を伸ばす。

すると、突然隣で眠っていたシロが、目をパチツと開かせた。

チエルシーはそんな彼女に、一切の動揺なしに挨拶をする。

「おはようございます、シロ様」

「……おはよう、チエルシー」

シロは起き上がり、ベッドの上でちよこんと座る。

彼女はどうかやら朝に弱いようで、ぼーっと空中を眺めている。

身体の線が浮き出てしまうような薄着なので、シロの豊満な身体が分かってしまう。

しかし、ここにいる男は院長だけで、チエルシーもノーマルタイプ
の女性なので何ら問題はない。

普通の女性なら羨むほどの肢体だが、チエルシーも中々にわがまま
ボデイなのだ。

しばらくボーっとしているシロを、チエルシーはただただ待ってい
た。

シロは隣に眠る院長を見やると、にへっとだらしなく笑う。

そして、再びチエルシーを見る彼女の顔は、普段のしつかり者の顔
へともどつていた。

「相変わらず静かに動くわね、あんた。私も全然気が付かなかったわ」
「ご主人様の御眠りを妨げるわけにはいきませんから」

チエルシーが音を立てずに動く業を身に着けたのは、ひとえに院長
のためである。

今では音だけでなく、気配すら完全に絶つこともできてしまう。

院長は勿論、側近のシロでさえここまで近づかれなければ気づくこ
とはできない。

まあ、普通ならどれだけ近寄られても気づけないほど、チエルシー
の業の精度は高いのだが。

流星は院長の護衛役だと言えるだろう。

「それに、クロ様はお気づきでしたしね」

「また寝たふりね」

「……寝てる」

チエルシーが微笑ましげに、シロが呆れた様子で見つめる先には、
院長にしがみつくようにして横たわる褐色の少女、クロがいた。

目は閉じているが、チエルシーには彼女が起きていることが分かっ
ていた。

今までに何度も院長を起こしに来たが、八割方院長のベッドにいた
クロは、一度たりともチエルシーに気づかなかったことはなかった。

寝たふりをしているくせに、律儀に答えてしまっていることからも
分かるだろう。

「もうご主人様を起こす時間ですよ」

「……起きる」

チエルシーの言葉に、眠っていたはずのクロはパチツと目を開け、パツと身体を起こす。

朝に弱く、完全起動するのに時間を要するシロとは違い、クロは起きてすぐにでも行動できるらしい。

クロは未だに眠っている院長を起こすべく、自身の身体を曲げる。長い黒髪がサラリと流れ、彼女の顔を隠す。

シロと同様、ラフなパジャマ故にどこぞの爆乳教師にも匹敵するほどの乳房が重たげに揺れる。

クロはそれを気にせず、自身の顔を院長のそれへと近づけていって……。

「あんだ、何してんの」

クロの行動は、相棒であるシロに止められてしまった。

幹部メンバーの中でも屈指の仲の良さを誇る二人だが、院長が絡む事案については別だ。

他のメンバー同様、いがみ合う。

シロに止められたクロは、相変わらずの無表情で彼女を見やる。

しかし、その表情は心なしか冷たいように見える。

「……起こすときはちゅーがいいって、スコールが」

「ちっ、あの年増。余計なことをクロに吹きこんでんじやないわよ」

シロの頭の中で、こちらを見下ろしながらクスクスと笑う妖しげな美女が現れる。

おそらく、自分がほとんど孤児院にいられないからと、こちらをかき回してくるつもりだろう。

相変わらず、嫌な性格をした女だ。

ちなみに、クロ以外にもエムやシャルロットが実行しようとしたが、全て未然に防がれている。

孤児院メンバーは優秀だ。

「とにかく、それをする必要はないわ」

「……僕がしたい」

「だめ」

「したい」

睨み合う両者。

二人とも頬を膨らませ、がるるると威嚇し合う。何も知らない人からすれば、美少女二人が可愛らしく喧嘩しているようにしか見えないだろう。

しかし、彼女たちの力を知っている者からすれば、笑いごとではない。

「……………」

そんな二人を横目に、チエルシーは優しく院長を揺り動かす。

院長が決して不快に思わないような力加減で揺らす。

敬愛する主人の瞳が、うつすらと開いていく。

チエルシーは満面の笑顔で、しかし、下品に思われぬほどに抑えて彼を迎える。

「おはようございます、ご主人様」

チエルシーの挨拶に、彼も寝ぼけながら返す。

彼女は、こんな何気ない日常が大好きだった。

野望さえなければ、毎朝続けていたい日常である。

一日の初め、院長の視界に最初に入る顔が自分。

そのことに、チエルシーは非常に大きな満足を得ていた。

何でも他者の世話をして自分を抑えがちな彼女だが、他のメンバーと同じく、彼のことに関しては絶対に譲らないところがあるのであった。



院長の私室で、チエルシーは至高の時間を過ごしていた。

彼と一緒に眠っていた二人は、すでに子供たちの訓練のために部屋

を出ている。

普段ならどちらかが残って院長の護衛を務めるのだが、今回はチエルシーがいることから二人ともその任を一時的に降りていた。

ちなみに、クロが戦闘訓練で、シロは座学である。

「本日の朝食は、日本の定番料理を作ってみました」

院長の私室は、料理の良い匂いが立ち込めていた。

彼の座る前のテーブルには、美味しそうな料理が数品置かれていた。

この孤児院には大食堂があり、院長自身もよくそこで食べているのだが、今はチエルシーが帰ってきている。

院長の、何から何までお世話をしたいと主張する彼女は、当然ながら食事の世話も受け持ったのだ。

今、ほかほかと湯気のたっている料理も、すべて彼女お手製である。

他の者には決してふるまわれない手料理を、院長は全て胃の中に収めることができた。

「……いかがでしょうか？」

院長が最初に手を伸ばしたのは、やはり味噌汁であった。

日本では、プロポーズの一つに『味噌汁を作ってくれ』という文句があるほど重要な位置を占める料理。

チエルシーは日本人ではないが、その重要性はしっかりと理解していた。

だからこそ、料理の感想を催促するという、メイドにはあるまじき行為もしてしまった。

発言してから気づいたチエルシーは、真っ白な肌をそれ以上に白くし、顔面蒼白となる。

他の人間に仕えているのであれば、この程度何ら問題ない。

しかし、自分が仕えているのは、この世界においてなによりも尊いお方。

そんな彼に対して不敬なことをしてしまっただけは、何をされても文句は言えない。

命で償えるのであれば喜んで差し出すが、捨てられることだけは絶

対に嫌だ。

チエルシーの頭が高速回転して何か言い訳をしようとするが、良い考えが浮かばない。

しかし、寛大な院長は口を開く。

「ありがとうございます……」

彼が口にしたのは、ただ一言。

——美味しい。

それを聞いて、チエルシーは先ほど死にそうになっていた心が一気に回復した。

顔は真つ青から真つ赤にあっけなく変化し、量感のある乳房の内では心臓が早鐘のように打ちなっている。

なによりも、下腹部にキュンキュンとした疼きが非常に強まり、立っていらなくなる。

だが、万能メイドたるチエルシーは、張りのある脚にグツと力を込めて耐える。

院長の前で不様をするなど、決して許されないからだ。

彼の斜め後ろから、熱っぽい視線を送るチエルシーだったが、院長が焼き魚で何やら手間取っているのを見て、クスリと笑ってしまう。

「いえ、申し訳ありません。院長にも、苦手なことがあったのだと思うと、何だかおかしくて……」

笑ったことに対して、振り返りながら抗議する院長。

いつもの優しい顔が、少し不満げにゆがめられている。

孤児院にいる者たちを救い、優しく見守っている院長が、魚一つにあれこれと苦心している姿を見ると、不敬ながら可愛いと思ってしまうのだ。

「お詫びに、私がほぐしたいと思いますが、よろしいでしょうか？」

チエルシーの申し出に、最初は思案する院長だったが、彼女が強く願ったこともあって最終的には許可を下す。

院長の世話をすることが生きがいだと考えるチエルシーは、心の中で大喜びしながら院長から受け取った箸で魚の身をほぐしていく。

誰も見ていないからと、ほぐした身を「はい、あーん」と食べさせ

たのは余談である。



空になった食器を持って、孤児院の中の廊下を歩くチエルシー。自分の作った料理を全て平らげ、「美味しい」と褒めてくれたことに強い充実感を覚える。

先ほどまでの幸せな時間を思い出しうつつすらと笑いながら歩いていると、前から歩いてくる人物がいた。

「あ、チエルシーさん。お久しぶりです」

「これは、シャルル様。今からご主人様のところですか？」

前から歩いてきたのは、シャルロットだった。

一房にまとめられた蜂蜜色の髪を左右にプラプラと揺らしながら歩いている。

彼女はこの春に入学するIS学園の制服を着用していた。

メイド服で脚を一切見せないチエルシーは、ミニスカートで生脚をさらけ出しているシャルロットの衣装に何か言いたげだ。

少し身体を上下に動かせば、むっちりとした臀部に食い込むショーツまで見えてしまいそうなほどだ。

まあ、孤児院の中——つまり院長の前でしか隙を見せないシャルロットなので、あまり心配はいらないが。

「えへへ、制服が届いたから、院長に見てもらいたくなって」

「大変お似合いですよ」

恥ずかしそうに頬を染めながら言うシャルロットに、チエルシーも微笑ましい気持ちになる。

色々と暗躍している少女だが、彼の前では一人の乙女になるのだなっと改めて思うチエルシー。

シャルロットに会って、ふと思い出すことがあった。

「そういえば、お母様も以前ご主人様に衣装を見せに行きましたね。メイド服で」

「お母さん!?!」

ガンツと強い衝撃を受けた様子のシャルロット。

以前、「娘には負けていられない」とチエルシーにメイド服の貸し出しを求めてきたことがあったのだ。

とくに抵抗する理由もないため、彼女は快く貸し出していたのであった。

しかし、スカート丈を勝手にかなり短くしていたことには、ほんのりと怒りを抱いていた。

だから、こうして娘に告げ口をしているのであった。

「僕もメイド服を着るべきか……」などと、ぶつぶつと呟くシャルロットに会釈し、食器を片しに行こうとするチエルシー。

「あ、チエルシーさん」

「はい?」

シャルロットはチエルシーを呼び止める。

その顔は、先ほどまで見せていた乙女のものではなく、一切の感情をそぎ落とした能面のようなものだった。

「資金の横流し、ばれていませんか? 僕のところだけだったら心もとないですし、チエルシーさんにもしてもらっていますけど」

「……ええ、大丈夫ですよ」

チエルシーはふと勤め先のことを思う。

身分をほとんど明らかにしていないのに、暖かく迎え入れてくれた場所。

自分が世話をしている少女は、困難に正面から立ち向かえる気丈な娘だ。

そんな場所を、人を裏切って、自分は孤児院にお金を流していた。そのことにチエルシーは——何ら罪悪感を抱いていなかった。

勿論、勤め先の家は悪い場所ではない。

だが、比べる相手が悪いとしか言えない。
院長と勤め先。比べるまでもないことだ。

例え、院長と世界が天秤にかけられたとしても、ちゅうちよなく前者を選ぶだろう。

チエルシーはニツコリと笑う。

しかし、その笑みは院長に見せていた暖かなものでは決してなかった。

何か得体のしれないものを体内に飼っているような、恐ろしい笑顔。

「お嬢様も、いずれは院長の偉大さをお分かりになるでしょう。その時は、私と一緒に「メイド」として、仕えたいと思います」

「……へー、チエルシーさんのお眼鏡にかなう人なんですね、今の主は」

「シャルロット様、勘違いしないでください。私の主は、今までもこれから、あのお方ただ一人ですよ」

二人は一切振り返ることなく、それぞれ歩き出した。

はたしてチエルシーの顔は、今どのように歪んでいるのだろうか？

束のお話

孤児院は、侵入不可能の要塞である。

正確に言うと、侵入はできても生きて帰ることができない。

そんな評判が孤児院の周りには広まっているため、ここに訪ねてくる人というのはほとんどいない。

いるとしても、対立している二つの武装勢力や、どこぞの国家からの誘拐目的である。

勿論、これらは全員消息不明となっており、悪評に拍車がかかっている。

しかし、誘拐や害を与えることを目的にしておらず、この孤児院にやってくる客も一人存在した。

ちなみに、その客が歓迎されているかどうかは問題にはしない。

「ハアアアアロオオオオッ!!」

その唯一の人物である彼女は、大きな叫び声と共に天井から現れた。

以前、帰ってきたチエルシーが美しく掃除した天井が、無理やりこじ開けられ破壊された。

その穴からシユタツと降り立つ女性。

この部屋の主である院長は、珍しく目を大きくして驚いている。

子供のような反応に面白く、また愛おしく思う女性。

「やつほー、いんちよー! ひっさしぶりー! 元気してた? 私ほちよー 元気だったよ!」

ペラペラと早口で話しかける女性。

返事はもとより期待していないのか、院長の返事を待たないマシンガントークである。

彼女はかなり奇抜なファッションをしていた。

チエルシーもメイド服という、中々に奇怪な衣服を身に着けているが、女性も負けていないほどおかしい。

まず、目を引くのが頭につけられた機械式のウサ耳である。

時折ピクピクと動いており、どうなっているのかが気になるのである。

目は垂れて優しげな印象を与えるが、彼女の性格は真逆のためまったく参考にならない。

昔は深い隈を目の下に作っていた彼女だが、院長と出会ってからはきれいさっぱりなくなった。

それゆえ、彼女本来の癒しを与えるような美貌を前面に押し出していた。

紫がかった髪は長く、腰ほどまで伸ばされている。

少しぼさつきが見られるが、これでも普段よりは全然マシになっている。

院長に会うからと、慣れない手つきで一生懸命髪の毛をとかしたのであった。

また、前の方に垂らしてある二房の髪を、三つ編みにしているのも彼女なりのおしゃれであった。

衣装は彼女曰く、『不思議の国のアリス』をイメージしたものであり、エプロン付きのワンピースのようなものである。

しかし、その豊満な胸を無理やり押し込むことは苦しいのか、胸元を開けて魅惑的な谷間を見せている。

日本人からすれば、コスプレを嗜む女性の一人だと思われるかもしれない。

だが、彼女の顔を見てそう言う人間はいないだろう。

何故なら、現代において最も世界に影響を与えた人物であり、世界中の国々から指名手配されている大天災なのだから。

「うんうん、いんちよーが元気だなによりだよ。東さんも嬉しいゾッ！」

院長が苦笑しながら元気だと返すと、彼女——篠ノ之 東はバチ

コーン☆とウインクする。

そもそも東は彼が異常なく日常を送れていることを知っていた。もし、彼に不利益なことが起きるとすれば、孤児院メンバーが黙っていないだろう。

それに、こつそりと仕込んでいる隠しカメラで無事なことは知っていた。

ちなみに、百機以上仕込んでいたそれは、異常な気配察知能力を持つクロやエム、シャルロットやチエルシーによってほとんど除去されていた。

それでも東が本気になって仕掛けた数機だけは、まだ見つかっていなかった。

しかし、お風呂場に仕込んだカメラが真つ先に撤去されたのは痛かった。

まあ、風呂に乱入するクロやシャルロットを見ては歯ぎしりを立てていたので、早めに取り除かれたことは良かったかもしれない。

下手したら戦争ものである。

「お、ありがとー。気が利くね！お礼にぎゅーっしてあげようかっ！」

院長が部屋に置いてある湯呑に、熱いお茶を入れてくれた。

お礼というか、自分がしてほしいことを言つて、またまたバチコーン☆とウインクする東。

院長はまたまた苦笑しながら、お茶を啜る。

「(本当にしてくれても、全然おっけーなんだけどねー)」

東はそう考えながら、同じくお茶を啜る。

ウェルカムな姿勢の東だが、実際にされたら破天荒な性格と真逆な乙女の反応をしてしまうだろうから、ほんの少しほっとしていた。

口に含むお茶は、あの万能メイドに比べるまでもない味である。

しかし、東は断然こちらの方が好きだった。

自分のために、あの院長が動いてくれたということが、何よりも嬉しかった。

「これ？ジンクスだよ！」

院長はやたらとウインクを連発する束に、どうかしたのかと質問する。

束はバチコーン☆とウインクをしながら、彼に答える。

彼女が実践しているのは、いじらしいことに恋のジンクスであった。

適当にネットサーフィンをしているときに見つけたもので、信ぴょう性なんてあったものじゃない。

彼女も実際に願いが実現するかどうかより、面白さを求めてしているのだ。

「むむむー、確かに……」

院長は、束がウインクに慣れていないことを指摘する。

確かに、彼女のそれは男をドキリとさせるといっても、何かを撃ちぬかんとしているようにすら思えるほど、強いウインクである。

ウインクするたびに星が飛び出し、院長に次々と命中している光景が幻視できた。

束は自分なりにそれを分析する。

彼女は非常に明るい性格をしており、可愛らしさが前面に出てしまっている。

なら、妖艶な大人の女性をイメージして、それをしてみたらどうだろうか。

ちなみに、こんなに明るく接するのは院長やブリュンヒルデなど、彼女が識別できる人物に限られている。

「じゃあ、こんな感じでどうかなあ」

愉しげに下げられていた瞳を、スツと細くする。

羞恥心からか、今自分がしていることへの興奮からか、ほんのりと頬を赤く染める。

小さく舌をペロリと出して、真っ赤なそれを見せつける。

服に指を引っかけて下にずらし、母性と魔性に溢れた深い谷間を見せつける。

長いロングスカートを持ち上げ、肉付きの良い脚をさらす。

先ほどまでの元気なウサギから一転し、発情した淫乱ウサギに早変

わり。

そんな彼女を見て、院長は近づいてくる。

「(えっ、えっ……?もしかして、いんちよーに束さんの魅力が伝わっちゃった?そ、それはそれで困るけど、嬉しいような……いごめんね、孤児院の有象無象さん!私、いんちよーをいただいちゃいますっ)」

予想していた以上の反応に、束自身が大変驚く。
しかし、もとよりそれは望むところ。

汗を垂らしてお目目グルグルさせながらも、逃げることはしない。
そして、院長の手が伸ばされたことを確認して、キユツと目を瞑って期待して……。

「ああ………」

頭を優しく撫でられ、蕩けた声を出す束。

機械式のウサ耳に当たらないよう、器用に手を動かす院長。

妖艶なものから緊張したものへ、そして終着点はナデナデされて蕩けた表情へと移り変わって行った。

かゆいところにちようど手が届いたときのような、そんな快感を味わう束。

もう、今は全てがどうでもよくなっていた。

世界を手玉に取る史上最狂の天災科学者も、今は構ってもらえて大喜びする飼い犬のようになっていた。

「もつと束さんの頭を撫でていいんだよ?」

結局、何かに勘づいたクロが襲撃してくるまで、束は彼からのナデナデを享受したのであった。



広大な土地面積を持つ孤児院の、最奥の部分。

そこには勿論、絶対に守るべき対象である院長の私室がある。しかし、それと同じか、それ以上に深い場所に、小さな部屋があった。

中にあるのは丸い形状をしたテーブルと、十の椅子。

ここは孤児院幹部メンバーが、重要な案件について話し合う場所であった。

とはいっても、十人全員が集まることはほとんどないと言っている。

それぞれ目的のために外の世界に潜伏しているので、時間が空いていて興味のある者だけが集まって話をし合う。

そもそも、幹部同士でも仲はそれほど良くないので、集まったら集まったで衝突が起こってしまうのだが。

だが、今はその【ほとんどない時】であった。

十個ある椅子に、全て人が腰をかけていた。

孤児院幹部メンバーが、勢揃いだ。

彼女たちの本性を知る、武装勢力の人間や関係者らが見たら、卒倒ものの光景である。

「で、どういうことかしら、篠ノ之博士？」

「んー？」

豊かな金髪をカールさせた妙齡の美女、スコールが話を切り出す。

議題は、束が院長に告げた提案についてだった。

当然、ここにいる皆が理解していることだが、束はなんのことかわからないといった風を装う。

別に高度な心理戦があるわけでもなく、ただ単にスコールの質問に素直に返答することが嫌だっただけである。

「院長を外に連れ出すと言ったことだ。返答次第では、貴様を殺すぞ」「うっわー、こわーい！ちーちゃんと同じ性格だー！」

「貴様……ッ!!」

スコールの後に続くのは、小柄で目つきが非常に鋭いエムだ。

束を見やるその瞳は、強烈な殺意と怒りが渦巻いていた。

見られただけで死んでしまいそうなほど苛烈な視線を、正面から受

けても束は何とも思わない。

むしろ逆にあおつてしまうほどだ。

「おちよくつてねえで、答えろよ。ISに関しては、てめえの仕業だろうが」

「うんうん、君もいんちよーくんが大切なんだねー」

「ちつげえええつ!!」

茶髪でスーツを着たOL風の美女、オータムも口をはさむ。

しかし、束にからかわれてあっさり敗北。

顔を真っ赤にして怒る姿は、小動物のようで可愛らしい。

隣に座っていたエムが「うるさい」と怒鳴り、オータムと激しい口論になっているところをしり目に、会議は続いていく。

「僕も院長と一緒に過ごせるのは嬉しいけど、外に出しちゃうのはどうかと思うなあ」

「とか言つてえ。お母さんからいんちよーを引き離せて嬉しいんですよ?」

「そ、そんなことないですよ!」

一房にまとめられた蜂蜜色の髪を揺らしながら、少し垂れ眼気味の瞳を細めるシャルロット。

束に痛いところを突かれて、あわあわと慌てる。

この場に母親はいないが、今頃何をしているのやら。

自分ならどうするかと考え、院長に会いに行くという結論を出したシャルロット。

やはり母娘の思考はにかよるものである。

「うう……またお仕事が増えちゃいました……。もつと防備を固めないと……」

「頑張れ、おっぱいおばけちゃん!」

「おぱっ……!カップならクロちゃんも同じですう!」

緑色の髪で、眼鏡をつけた真耶は憂鬱そうにため息を吐く。

ただでさえ、上司である教師から色々と任されがちなのに、これまでにないほどの重要な仕事が発見されたのだ。

気が優しい彼女は、色々と頼られやすい。

まあ、院長と天秤すればなんであろうとも彼が優先されるのだが。真耶は東のからかい言葉に、顔を真っ赤にして抗議する。

大きめの眼鏡が、少しずれてしまうほどの衝撃だった。

しかし、ここは孤児院とは思えないほど、皆栄養状態がいい。

集まっている幹部メンバーも、多くが魅力的で豊満なスタイルを持っている。

エムは小さく舌打ちした。

「院長は了承したらしいが、やはり納得はできんな」

「あれあれ〜？君はいんちよーの決定に逆らうつもりかな〜」

「……貴様、ふざけているのか？」

ドイツ軍の軍服を身に着け、鋭い視線を東に向けるのはクラリツサ・ハルフオーフ。

東の言葉に、絶対零度の目を向ける。

まるで見られているだけで凍ってしまいそうな、恐ろしい瞳である。

もし、これ以上からかうと本当に殺しにかかってくることは分かっていたので、東も自重する。

まあ、戦闘の結果どうなるかはわからないが。

「メイドちゃんはどう思っているのー？」

「ご主人様がお決めになられたことなのですから、異論はあるはずがありません。どこまでもお供します」

東に聞かれたメイド服を着たチエルシーは、顔色一つ変えることなく決意を語る。

この場にいる誰もが、チエルシーならそうすると思っっているし、自分たちも付いていくつもりだ。

東は院長ではないのだが、何故か満足そうに頷く。

「うんうん、いいねー、かつこいいねー。ま、皆色々言いたことはあるだろうけど、もう時すでにおすしなんだから受け入れようぜっ☆それにあざといさんとおっぱいお化けもいるんだから、何か起こる心配もないしね」

「あざといって僕のことじゃないですよねっ!？」

「だからお化けって言うのはやめてくださいよ〜！」

舌をペロリと出して、パチリとウインクする東。

院長に散々したおかげで、とても様になっている。

ヘンテコなあだ名をつけられた二人は、激しく抗議する。

だが、この場にいる多くがそのあだ名に納得しているため、覆ることとはなかった。

「……………」

東は、自分の思い通りに事が運び過ぎていることに疑問を覚えていた。

ここにいる全員が自分よりも院長を優先するような壊れた女たちだが、その中でもぶつちぎっている二人が、未だ静観している。

そのことに、うつすらと寒気を覚える東であった。

「君たちは何とも思わないのかな〜？」

「……………？ いんちよーが行くところは、付いていく」

「……………あれ？もしかして東さんにどうにかしろと？」

キョトンと首を傾げて、『当たり前だろうが糞ウサギ』と言葉にせず
に伝える黒髪紅眼の褐色美少女、クロ。

世界でも最高峰の防備を誇るIS学園に、入学試験を受けていない
人間を無理やり突っ込むことになった東。

彼女にできないことではないが、面倒なことになったなと頭を抱える。

「当然、私のこともお願いね、糞ウサギ」

白髪紅眼のシロに至っては、最早隠すことなく罵倒する。

東の額に青筋が浮かぶが、なんとか我慢する。

ここで暴れて院長に心配をかけるわけにはいかないからだ。

普段、仲の悪い彼女たちが口げんかだけですんでいるのは、院長が
近くにいたためである。

「……………言い方は気に食わないけど、まあ院長を動かすんだからしてや
るよ。ありがたく思っしてほしいものだね」

「ふん、院長を動かさなかったら罵倒なんてしなかったわよ」

苛立たしげに睨み合う二人。

この二人、オータムとエムの間柄なみに仲が悪い。

もし、院長という存在がなければ、間違いなく殺し合う間柄である。

「ふう、でも私の目的は達成されたし、一安心つてところだね」
院長を外に連れ出す。

それが束の目的である。

自分たちは、彼が存在してくれているだけでいいのだが、彼はそうではない。

ずっと引きこもっているのは、やはり院長のためにならないだろう。

……それに何より。

「院長を連れ出すと、面白いことが起きるに決まっているからね♪
それに、あの計画も実行されるかもしれないし……楽しみだなあ」

束は歪に嗤う。

瞳は空虚で、口は裂けたように大きく弧を描く。

心が壊れた天才科学者は、未来起こるであろうことを思い、頬を紅潮させるのであった。

孤児院に所属する子供たちに、院長がIS学園に行くことが報告されたのは明日のことだった。

1章 理事長 院長のクズ日記4

W月Q日

働くというのも、中々悪くない。

ふっ、流石は俺だ。労働も文句なしに行うとは……。

まさにサラリーマン、社畜の鑑である。

……とは言っても、孤児院にいたときとあまり生活は変わっていないんですけどね。

俺はあの恩知らずのクソガキ共に働けと孤児院を蹴りだされた後、日本のIS学園に来ていた。

大体あそこの孤児院を建てたのは誰だと思ってる。俺だぞ。

家主に家から出て行けとかわけわからなさ過ぎてムカつくんじゃないボケ。

スタイリッシュな逃亡方法を考えながら学園に来た俺だったが、用意されていたポストは「理事長」という素晴らしいものであった。

うん、この奴らは俺という人間をしつかりと評価できているようだ。安心した。

もし、作業員とか事務員とかだつたりしたら、マジで逃げ出していたわ。

アイツらにもばれないようにこっそりとへそくりは貯めてあったし、あいつらに絶対にばれない場所に行こうと思っていた。

まあ、その案はまた次の機会にということ……。

俺が理事長として今日行った仕事を書いてみよう。

昼過ぎに起きる↓ネット↓うまい飯食う↓お昼寝↓ネット↓間食

(贅沢な) ↓ネット↓うまい飯食う↓ネット↓寝る

……完璧すぎる。

どこにも付け入るすきがない。

まさに俺が求めていた理想の生活だ。

あまり孤児院にいたときと変わらぬが、面倒くさいガキの相手はしなくてもいいし、「頭イカれてんじやねえの」な武装組織もないし、こっちの方が住みやすく感じる。

いいねえ……最高だねえ……。

孤児院出るときはお先真っ暗だったが、今は光り輝いている。

今世界で最も夢と希望を持ち合わせているのは、俺だろう。

IS学園万歳！理事長万歳！

WW日

今日はIS学園の入学式……だったらしい。

俺は何もしていないので全然知らない。

入学式で挨拶をしなければならぬのかと思っていたが、理事長はどうやらなくてもいいらしい。やったぜ。

想像するだけでも面倒だもんな、挨拶って。

むしろ生徒の方も聞きたくないだろうし、win—winの関係だね。

では、何故俺がそんなことを知っているのかと言うと、クロのやつが教えてくれたからである。

……ガキ共と離れられたと思っただとたんにこれですよ。

神ってホントクソですわ。

そういえばシャルロットの奴が、IS学園に合格したとか言っていたな。

あいつのあざとさに目を引かれまくっていたから、すっかり聞き流

していた。

しかし、シャルロットだけでなくクロやシロまで入学しているとは……。

こいつら、俺の強権を発動して退学処分にしてやろうか。

……下手したら俺も理事長クビだな、止めとくか。

だからさ、クロは休み時間まで俺の城に来る必要はないぞ。

ノックもなしにバンバン入ってくるからびっくりするわ。

毎時間毎時間顔を合わせるのも嫌だし、適当にしてくれていいよ。

まあ、口には出せないんですけどね。

機嫌損ねられて攻撃されたら、俺一撃で昇天しちゃいますから。

そうして黙っている、クロのやつも調子に乗る。

今度は俺が寝ようかなと考える夜になって忍び込んできやがった。

しかも、一緒にお風呂に入ってほしい？

……素晴らしい申し出だね。良い子だ。

俺は可愛い可愛い子供のために、一緒にお風呂に入ってやった。

いやー、本当クロの身体は凄まじいものだ。

ボンツ、キュツ、ボンツだし、褐色だし、顔も良いし。

頭を撫でてやると結構可愛い反応もするし……。

ただなあ、無駄に強すぎるのがいかん。喧嘩したら絶対負ける。

残念すぎる……。

そして、俺の身体も残念すぎる。

どうして手が出せないのか。相変わらずの欠陥品である。死ねや、

神。

ただ、身体を洗うことに専念すればクロの身体にも触れるようだ。

感想は……とてもよかったとだけ書いておこう。

W月E日

この学園にあるベッドは、とてもいいものだ。
国立だからかどうか知らないが、フカフカでよく眠れる。
ただ、どちらかというと孤児院にあったベッドの方がいいものだったような気がする。

あれは誰が持ってきたんだっけ？

……ああ、シロだったけか。

クロと同じく孤児院に残った有力な人間だ。

俺の好感度はマシマシですよ。

勉強を強要してきて、かつクソガキ共より劣っていることを目の前に突き付けてくることさえなければ、俺は惚れていたかもしれない。
美人だし、おっぱいもデカいし。

本当、俺の身の回りの奴らって残念なやつばっかだわー。

今日の朝食も美味しかった。

好みで言えば、チエルシーの方なんだがなあ。

あいつ、俺の好きな料理ばかり出しってくるから、箸が進むのなんのって。

まあ、孤児院から出ている時点でダメ女なんですけどね。

飯を食べている最中に、クロが飛び込んできて一緒に食事をとるところになった。

……ここ、理事長室なんですけど。

お前、ここの生徒になったんだったら食堂で食べなくちゃダメなんじゃないの？

まあ、俺の膝の上で食べるから、柔らかい肢体の感触を味わえるから何も言いませんけど。

……手が出せないんだから、身体を密着してもらうしかないじゃない！

今日もクロのお尻の感触は素晴らしかった。

これからも鬱陶しくない程度に俺に引っついてくれてよし。

食事を終えた後、クロはシャルロットに引きずられて出て行った。

いいぞ、よくやった。

あくまで部屋から離れようとしないうしろを引っ張っていくのは、

シャルロットでも苦勞をしていたようだ。

俺は今日も理事長としての職務に励むべく、窓から差し込んでくる暖かな日差しに身体を差し出していたのだが、真耶が飛び込んできてそれが終わりを告げた。

……許さんぞ、おっぱい魔人め！

彼女の報告によると、生徒同士が決闘をするからアリーナの使用許可が欲しいとのことだった。

……決闘？

え、なに。この学園ってそんな物騒なところだったの？

何が決闘だよ、前時代的すぎるだろう。

日本の法律には決闘を禁止するものだってあるんだぞ！

……そう言えばIS学園って治外法権だったっけ？まあ、どうでもいいけど。

はー、楽な職場だと思っていたら、決闘を行えるような職場だったのかよ。凄く騙された気分。

俺が何も言わないから、真耶がおどおどとこちらを見上げてきていた。

くつ、可愛いじゃないか。

でも、俺を見捨てて孤児院を捨て去ったのは許さないだからね！
とはいえ、真耶ほどの美女にそんな顔されて嫌な気分になるはずもなく、俺は使用許可を出したのであった。

そもそも、俺は全く関係ないから、決闘をしようがしまいがどうでもいいことであつた。

いいよいいよ、どんどん決闘しちゃいなよ。

……しかし、死者とか出たら流石に責任問題になりそうだ。

その時は、真耶が悪いということにしよう。

今日は決闘の日らしい。

俺としては心底どうでもいい。大体、対戦相手自体知らないし。だから、俺はいつも通り日向ぼっこでもしてぼけーツとしとこうと思っていたのだが、俺の部屋にシロがやって来た。

どうやら、俺のために特別な観戦室があるらしいから、そこで一緒に決闘を見ないかというお誘いであった。

……俺のため、特別な。

素晴らしい言葉だ。俺の偉大さをよく理解している。

俺は決闘には糞ほど興味がわかかったが、シロの言葉にホイホイとつられて観戦室に向かった。

そこは、一般人……いや、凡人共が観戦している観客席よりも、随分と高い場所にあった。

……俺、ちよつと高所恐怖症気味なんだけだな。

だが、他の奴らを見下ろす快感に負けて、俺は観戦室に滞在するこ
とにした。

そこで初めて決闘をする生徒のことを知った。

何かハーレムでも作っていそうな爽やかイケメンと、いかにも気の強そうなクルクルお嬢様だった。

とりあえず、イケメン君は死んでいいよ。というか死ぬ。

ハーレム作るとか舐めてんの？俺に少し分けてくださいおねがい
します。

お嬢様の方は……あまり仲良くしたくないな。馬鹿そうだし。

とはいえ、スタイルは中々良さそうだった。

ISスーツがかなりピッチリと肌に吸い付くため、身体の線がハッキリと出るのだ。

……これを作った束は天才だな。

しかも、さらに素晴らしいことに、一緒に観戦していたシロがどう
いう訳か俺の頭を胸に抱いたのだ。

豊満なおっぱいの感触が俺の後頭部を襲う……！！

この感触は……おそらくF！

俺はたまにわざと後頭部を動かして、シロの胸の感触を精一杯愉しむ。

さらに、目は激しい動きで揺れ動くクルクルお嬢様の胸を追う。
……ここに桃源郷があったんだ（確信）。

途中でシロが色々と話しかけてきていた気もするが、正直おっぱいのことで頭がいっぱいで何も覚えていない。

まあ、どうでもいいことだろう。

俺はIS学園に来て、最も楽しい一日を過ごしたのであった。

W月T日

IS学園での楽しい過ごし方を、俺はついに理解した。

それは、女子生徒たちがISの訓練に励む授業を見ることがだ！
普通の授業は到底見るつもりはない。

つまらないし、若い奴らが青春を謳歌しているのを見ても何も楽しくない。呪われる。

だが、ISスーツというぴったりとした痴女御用達の衣服を着用している女子高生たちを見守るのは、中々に有意義だ。エロい。

本当なら双眼鏡でガツツリ覗きたいが、流石にそれを見られたら変質者になってしまうので自重する。

俺は生徒思いの理事長様である。変質者ではない。

まあ、俺がいる場所は特別観戦室とかいう、理事長専用の場所だ。
俺の許可なく誰かが入ってくることもないし、大丈夫だとは思わが。

そんなことを思いつつ、アリーナを使っている生徒たちを見る。
うーん……この学園の女子生徒はレベルが高いなあ。

あそこに混じっている男が羨ましいよ。爆発しろ。

誰だっけ、あいつ……織斑だっけ？

……ああ、あのクソ怖い教師の弟か。まあ、どうでもいいか。

というか、あの女威圧感ありすぎなんだよクビにするぞ。

しかし、改めてみると、孤児院勢の体つきは素晴らしいものがある。今日見られたのはクロとシャルロットだった。

……素晴らしい。二人とも男を悩殺するくらい魅力的な身体である。

だが、興奮しない。

クロはもう十分見たし、シャルロットは裏切り者だし。

あと、俺の身体は欠陥しているし。神様ふあつきゅー。

手は出せない俺だが、目の保養にはなることは間違いない。

まあ、俺ほど仕事熱心になると、わざわざ生徒の授業進行度も確かめなきゃな。

いやー、本当自分の熱心さが憎いわー。

そんなことを思っただけで授業を見ていたのだが、途中でシャルロットに見つかってしまう。

……いきなり手を振ってくるんじゃねえよ、マジでビビったぞ。

結構、距離も離れていたよね？何で見つけられたの？

……ああ、ISか。超兵器なんだし、倍率を上げる機能とかも付いているだろう。知らないけど。

ホント、便利だよな、IS。俺にもいくつかくれよ。使えないけど。……ところで、ISを展開していなかったクロはどうして俺を見て

手を振っていたんだろう？

E月Q日

今日はクラスの対抗戦？とやらがあるようだ。

最近、ひたすらにゴロゴロとしていたから完全に忘れていた。

まあ、俺が覚えていようといまいと大して違いはないのだからいいだろう。

それに、見に行くつもりもないし。

いくら安全だからとはいえ、絶対ということは世の中存在しない。もし、対抗戦の流れ弾がこっちに飛んできて俺にぶち当たったりと考えると、恐ろしくてとてもじゃないが見られない。

そんなわけで、俺は適当に散歩することにしたのだ。

今なら、学園内にはほとんど人がいない。

皆、対抗戦が行われているアリーナに行っているからな。

珍しく、クロやシロもあつちに行っているようで、俺は久しぶりに完全なるフリーとなったのだった。

いちいち誰かに気を遣う必要もなく、朗らかな陽光を浴びながらのほのぼのとした散歩。

……俺、幸せでした。

だが、世界は一体俺の何に嫉妬をしているのか、そんな幸せもぶつ壊されたのである。

最初は、音だった。

ズドンと身体の芯まで響くような音と衝撃が、俺を襲ったのである。

うえ、気持ち悪い……ふぎけんなよ、クソが！

ブーツと心の中で悪態をつきながら音がした方角を見ると、どうやらアリーナから音がしたようだった。

……ISの戦闘ダイナミックすぎるだろう。

それなりの距離が離れているここまで、戦闘の余波が届くのかよ。やっぱり行かないで正解だったわ。

というか、こんなはた迷惑なものを作りやがったクソウサギ爆発しろ。

しかし、俺には関係がなさそうなので放置することにした。

生徒の安全の確保？

俺の安全の確保が何よりも優先される第一事項だろう。

とにかく、この学園で最も安全だと思われる理事長室——つまりは俺の城に戻ることにした。

そうして、俺が方向転換した目の前に、ヘンテコなISが現れたの

だ。

……は？

なにこれ？俺に死ねっていうんですか？お前が死ね。

そのISは全身が装甲になっていて、操縦者の顔が見られなかった。

……つまり、めちやくちや怖かった。

誰かああああああつ!!助けてええええええつ!!

何でこんな敵愾心バリバリのISが学園内にいるんだよ!!

俺を誰だと思ってるんだ、理事長様だぞ!!

これだったら孤児院から出ない方がマシだったじゃねえか!

それに、何で周りに誰もいないんだよ!

クラス対抗戦のせいか?もう二度とやらないし、やらせない。

いつも俺の周りにうざいくらい引つ付けてくるクロたちはどうした?

必要な時にいないとか、舐めてんの?皆死ね。

俺がこの世の不条理を嘆いている間も、事態は好転しない。

俺を見ってくるISも何も動かないし……。

結局、こいつは何がしたいんだ。馬鹿なのか?

しかし、下手なことはできず、俺も硬直する。

じつとISと睨み合う。

時間的には一分も経っていないだろうが、感覚的には一時間以上過ぎていく気さえしていた。

そこに現れたのが、真耶だった。

よくやった、おっぱいお化け!

だが、この牛乳、何を思ったか銃を乱射し始めたのである。

俺が近くにいるだろうがあああつ!!死ぬわ!

俺が必死に銃弾を避けている間に、ISはいつの間にか壊されていた。

そのすぐ後、真耶に抱き着かれて気絶させられた。

こいつのおっぱい、マジで凶器だわ……。

……でも、気持ちいいから気絶しない程度に抱きしめてほしい。

クロとシャルロット

「(いつてえ……千冬姉、容赦ないんだもんなあ)」

織斑 一夏は、姉に叩かれた頭を撫でながらそう思った。

姉である織斑 千冬が繰り出す出席簿アタックを、頭に受けた一夏。

あれから少し時間は経ったが、未だに痛みが残っている。

「(おっと……でも、ちゃんと他の奴らの自己紹介も聞かないとな。ただでさえ、肩身が狭いんだから)」

一夏は痛みを我慢して、クラスメイトたちの話を聞く。

今は、高校に入学して初めての会合である。

早めにクラスメイトの名前と顔を一致させなければならぬ。

それに、一夏が入学した学校はかなり特殊な場所であった。

—— I S 学園。

世界でただ一つしかない I S の操縦者を育成する特殊学校。

女しか扱えない I S の訓練をするため、I S 学園は当然ながら完全女子高である。

しかし、ここにいる一夏は男でありながら I S を扱える世界で初めての男性操縦者である。

故に、倍率一万倍を超える超難関校であるここに、彼は入学することができていた。

ここを卒業すればどんな大企業でも容易に入ることができるとであろう超優良高であるが、一夏はそんなことよりも高校生活を楽しみたいと思っていた。

男友達はできないだろうが、女友達は作っておきたい。

そう思って自己紹介を聞いていくのだが……。

「(やべえ……全然覚えらんねえ……)」

元々一夏はそれほど記憶力が優れていない。

わざわざ一夏の方を向いて自己紹介をしてくれるクラスメイトたちには悪いが、名前を覚えるのは少し時間がかかりそうだ。

それでも、一夏には何人か印象に残った生徒たちがいた。

一人は、幼馴染である篠ノ之 箒である。

昔と変わらずポニーテールなため、あっさりと分かった。

「では、次の人どうぞ」

さらに、クラスメイトではないが、今このクラスを進行している女教師。

緑髪を短く切りそろえ、少し大きめの眼鏡をかけたクラスの副担任、山田 真耶だ。

「名前が回文だ」と、自分でもどうでもいいことだと思ってしまうことを考える一夏。

自分より年上なはずだが、その愛らしい容姿と相まって同級生と言われても納得する。

ただ、明らかにクラスメイトの女子たちと違うのは、その豊満な胸部だった。

緩いワンピースを着用している真耶だが、その胸元からは深い谷間が覗ける。

一夏も思春期真っ盛りの男子高校生だ。まるで牛のような母性の塊に目が向いても仕方がない。

そして、一夏は真耶に指名された生徒を見る。

「……クロ」

その指名された生徒は、ただ簡潔にそれだけを述べた。

先ほどの一夏の自己紹介時のように固まるクラスだが、彼女は知ったことではないとさっさと着席してしまった。

真耶はあわあわとうろたえているし、怒りそうな千冬ははあつとため息をつき「問題児ばかりだな……」と額に指を添えている。

一夏は、そんな空気の中、クロの容姿に目を引かれていた。

真っ黒な、それこそ姉である千冬よりも黒い長い髪。

肌は褐色で、日本人ではないのだろう。

驚くべきことに、彼女は真っ黒の制服を着こんでいた。

改造制服が認められているIS学園であるが、こんなに自己主張の激しい改造をしているのは彼女くらいだろう。

一夏は「こんなに派手な改造も許されるのか？」と疑問に思った。

しかし、何より彼の記憶に焼き付けられたのは、彼女の血よりも紅い瞳である。

あまりにも深いその色は、全てを吸いこんでしまいそうな感覚を与えた。

——彼に、真っ黒な少女が記憶された。



クロにとって、この無意味な時間は非常につまらなかつた。

初めて会う人間が、己を紹介する自己紹介タイム。

クロはどうでもいいこの時間を、さっさと終わらせてほしかった。

そもそも、院長以外と仲良くする意味が分からない。

院長がいればそれでいいではないか？

何故ここにいる人と仲良くしなければならぬのだ。

そんなことを考えているから、自分に紹介の番が回ってきたときも非常にあっさりと終わってしまった。

周りの空気が凍りつくが、そんなことは知ったことではない。

というより、クロはすでに他のことを考えていてまったく気づいていない。

脳内を占めるのは、今もどこかにいるであろう院長のこと。

今すぐ席を立てて遊びに行きたいのだが、相棒から強くルールを叩き込まれているため大人しくしている。

それが院長の不利益になると聞かされれば、なおさらである。院長がどこにいるかは分からないが、まあ後で匂いを嗅いで突き止めるでしょう。

クロはそう思っ、ポーっと時間が過ぎ去るのを待った。



その後、一夏はシャルルという女子生徒の名前も覚えた。

蜂蜜色の髪を後ろで一つに束ねた、優しそうな少女だ。

ニツコリと笑って自己紹介したときは、異論なしに美少女であったのだが、どこか中性的な印象を与える彼女の容姿のせいで、何人かの女子生徒の頬が赤くなっていたのを見た。

一夏は、シャルルのミニスカートと短い靴下が作りだした見事なまでの生脚に目を引かれていた。

適度に肉の着いた柔らかさそうなのは、男の目を引き付けてやまない。いい。

そんなこともあって、一夏はシャルルのことも記憶に残せたのであった。

今は初めての休み時間。

これまで女子高だったIS学園に男子が入ってきたので、皆からの視線を感じる一夏。

しかし、誰も話しかけては来ないので、自分から話しかけようと考えた。

まず、最初に選んだのは、クロと名乗ったあの真っ黒な少女である。彼女の席を見ているが、しかし、そこには誰もいなかった。

どうやらすでに退席したようである。

「……ちよつといいか？」

残念に思う一夏に、声がかけられる。

そこには幼馴染である箒が立っていた。

これで休み時間は気まずい時間を過ごさずに済みそうだ。

「おう、いいぜ」

一夏はそう考えて、頷いた。



「うわあゝ、凄いなえゝ」

「そうだね」

布仏 本音は、クラス内で繰り広げられている口論に驚く。

独り言のつもりだったが、隣の席にいる生徒が相槌を打ってくれた。

横を見ると、一夏とイギリス人の口論に苦笑をしている外国の女の子がいた。

「あはは……」と苦笑している様子は、何故かとても似合っていた。

「(可愛いからかな?)」と考える本音。

「喧嘩は良くないよねゝ、シャルルん」

「そうだね……ってシャルルん?」

シャルルは驚いた様子を見せる。

そんなにおかしかったらどうか?

自分としては中々良いあだ名をつけられたと思っていた本音だったため、この反応に少なからず驚く。

そもそもあだ名をつけるということに驚かれていることに気づいていない。

「私の名前は布仏 本音だよゝ。よろしくねゝ、シャルルん」

「よ、よろしく。そのあだ名は決定なんだね……」

お互い、改めて自己紹介し合う。

シャルルは本音のつけたあだ名に、また苦笑する。

苦笑いが似合っているなと、割とひどいことを考える本音であった。

シャルルの以前のことは知らないが、おそらくこうして周りの騒ぎに苦笑いをしていたのだろう。

そんな予想が簡単になってしまう。

「決闘ですわー！」

「望むところだ！」

本音とシャルルが親睦を深めていた間に、口論は終わりを告げたらしい。

決闘という物騒なことをして、どちらが勝者が決めるみたいだ。

「シャルルんはどっちが勝つと思う〜？」

「うーん、織斑くんには悪いけど、やっぱりオルコットさんじゃないかな？イギリスの代表候補生だし」

「それならシャルルんも負けてないよね〜」

シャルルの予想には、本音も同意であった。

一夏の相手は、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコット。相手を見下す悪癖があるものの、その実力は折り紙つきである。

しかし、それなら今はなしているシャルルも負けてはいない。

彼女はフランスの代表候補生。つまり、セシリアに匹敵する実力を持ち合わせているのだ。

「あれ？僕、そのこと言ったっけ？」

「ふふ〜、私は何でも知っているのだ〜」

キョトンと首を傾げるシャルルに、本音は胸を張って答える。

無論、嘘である。

彼女の家は少し特殊なもので、こういった情報は耳に入りやすい。まあ、そのことは秘密のため、本音も内緒にしているが。

シャルルは少し不思議そうな顔をしていたが、本音は話題を変えて話しかける。

新しくできた友達と、穏やかな会話を楽しむ本音であった。



「ふーん、この子が『布仏』かー」

シャルロットは、目の前で楽しげに話している少女を見て思う。

この学園は、世界中から優秀な少女たちが集められている。

つまり、院長の敵に回れば鬱陶しい奴らもいるということだ。

それを理解しているシャルロットは、布仏という一族に一目を置いていた。

「まあ、言っていたのはシロだけだね」

シャルロットも人のことを言えないが、院長に対して超過保護と言えるシロが、注意すべき人物をリストアップした。

その中にいたのが、この布仏 本音である。

彼女はのほほんとした雰囲気を持っていて、あまり注意する必要はないように思える。

だが、この学園に来てから誰にも話していないフランスの代表候補生ということを、彼女は知っていた。

勿論、隠しているというわけではないので、調べればすぐにわかることである。

しかし、日本人である本音が、外国の、しかも一代表候補生のことを知っているとはあまり考えにくい。

「(これも暗部に仕える一族の情報力かな?)」

シャルロットは、本音の一族の特殊さを認識していた。

院長が訪れる場所なのだから、危険性などを調査するのは当然である。

シャルロットが一組に在籍することになったのも、この少女を観察するためだ。

他にも、四組に特殊な少女がいるのだが、彼女は家族と確執があるため優先順位は下の方だ。

本来なら、それでも一人は監視につけたいのだが、いかんせんもぐりこめる人数が限られているため、少々手薄になるのは仕方がない。「(できるなら、この組をクロに任せて僕が四組にいきたいところなんだけど……)」

シャルロットはそう思いながら「一応の」仲間を見るが、クロは喧嘩で騒がしいクラスに微塵も関心を抱いた様子がなく、ボーつと空を眺めている。

まあ、シャルロットも喧嘩自体には全く興味がないのだが、その当事者が世界で唯一の男性操縦者とイギリス代表候補生である。

観察すべき事柄だ。

学園に潜入する前、シロからしつかりと観察をするように言われていたクロだったが、もう忘れているらしい。

「(今頃院長のことも考えているんだろうなあ)」

シャルロットは苦笑しながら考える。

院長を盲目的なまでに崇敬する孤児院のメンバーであるが、とくに側近のクロシロコンビは酷い。

ちなみに、そう考えているシャルロット自身も酷い。

「(ま、院長に危害を加えられそうな奴もないし、今はそれでいいかな)」

自分も院長のことを妄想して幸せになりたいが、観察するのも院長のためだ。

それくらい我慢しなければいけない。

「(いざというときのために、情報はしつかりと集めておかないとね)」
楽しみに自分に話しかけてくる本音に、シャルロットは笑いかける。

本音もその笑顔を見て、ますます笑顔になる。

もし、本音がシャルロットの瞳の中に、笑み以外の冷たいなにかが混在しているのを見ていれば……。

結末は少し変わっていたかもしれない。

クロと院長

「ひいひいっ!!」

一夏は何とも情けない悲鳴を上げていた。

彼がいるのは、IS学園の一年生寮。

女子生徒たちからの好奇の目を何とか一日乗り切り、ようやく自分に割り当てられた個室へと向かった。

しかし、その部屋は一夏だけのものではなかった。

そのことに気づかず、またタイミングの悪いことに、同室の箒が風呂から上がったときに入室してしまった。

ばったりと出会って固まった二人だが、先に立ち直ったのは箒だった。

どこからか木刀を取り出すと、一夏に向かって襲い掛かった。

慌てて扉の外に逃げたのだが、ズドンズドンと、なんと木刀で扉を貫通させて攻撃をしてきたのだ。

この騒動に、同じく一年の女子たちが外に出て集まってくる。

「ま、待ってくれ！謝るからやめてくれ！」

一夏は人目もはばからずに謝罪する。

その必死さが伝わったのか、ひとまず木刀での攻撃はなりを潜めた。

ドキドキと嫌な不安を抱えながら待っていると、ガチャリと扉が開いた。

そこから出てきたのは、箒ではなく、クラスで自分の目を引いた漆黒の少女だった。

一夏はその真っ赤な瞳と目があった。

血のように紅いその目は、一夏が目を離せなくなるほど美しかった。

た。

「……もう大丈夫」

「お、おお……ありがとな」

少女がポツリと呟いた言葉に、一夏は一瞬何の事だかさっぱり理解できなかった。

しかし、この木刀攻勢のことだと分かると、お礼を言った。

少女はコクリと頷くと、一夏の身体をスルリと避けて、フラフラと歩いて行ってしまった。

彼女の後姿をずっと見ていた一夏だったが、周りの視線もいい加減痛くなってきたので、開けられた部屋に戻る。

「……………」

「よ、よう……」

一夏をベッドで座って待っていたのは、同室である箒だった。

今は浴衣を着ていて、裸ではない。

それが少し残念に思える一夏であった。

部屋に嫌な沈黙が続く。

箒はその鋭い目で一夏を睨みつけているし、一夏はそれを感じてダラダラと冷や汗を垂らす。

「そ、そういえば、他の女子がこの部屋から出てきたんだけど、何か知っているか？」

一夏は気まずい雰囲気何とか打開しようと、話題を上げる。

それは自分と入れ替わりに部屋を出て行った黒い少女のことだった。

箒もこれ以上睨み続けるのは疲れるらしく、はあとため息を一つつけて話に乗ってやることにした。

「ああ、クロのことか。彼女も同室だぞ」

「えっ、そうなのか!?俺、一人部屋だとばかり思ってたんだけど……」
「本来ならば、私とクロが同室だったんだ。そこにお前が割り込んできたんだ。文句は言わせんぞ」

一夏はなるほどと思った。

彼がISを使えることが分かってから、まだ日はそう経っていない

い。

学園側も急ごしらえだったのだろう。

それに、少しして落ち着いたら新しい部屋も確保されるだろうし、それまでの間ということだろう。

「……私たちに手を出すなよ」

「出さねえよー」

ギロリと睨みつけてくる箒に、強く言い返す一夏。

まあ、一度全裸の箒を見てしまっている以上、説得力はない。

ここで一夏はあることに気が付く。

それは箒がクロのことを、わりと親しげに話していることだ。

記憶では、この少女は人づきあいがそれほどまくなかった。

「クロと結構仲良くなれたんだな」

「仲良くなつたかは分からんが……あいつは静かな奴で、こちらも気楽に接することができるのは確かだ」

確かに、教室でもクロは静かな少女だった。

IS操縦者を目指す少女たちにとってカリスマ的存在である千冬が教室に入ってきたときも、他の女子生徒たちと違って大人しく座っていた。

自分でも話題性があると思う男の操縦者の自己紹介の時も、目は合わなかった気がする。

腫物のように扱ってこないで、一夏としても気楽に接することができそうだ。

それに、箒が木刀攻撃を止めたのはクロの説得があったようだ。

それは、彼女が部屋を出て行くときに言い残した言葉から推測できる。

帰ってきたらお礼でも言おう。

そう思つて、箒にクロのことを聞いてみる。

「箒はクロがどこに行ったか知っているか？」

「さあな。私もそこまで聞いていない。ただ『院長』に遊んでもらいに行ってくる』と言っていたから、友人のところではないか？」

「【院長】……？」

誰のことだろうかと首を傾げる一夏。

この学園に、【院長】という肩書を持つ人物はいたのだろうか？

うーんと唸る彼に、箒の冷たい声がかかる。

「もう女にご執心か？周りが女だらけで、さぞいい気分だろうか」

「ちげえよー」

「ふんー」

箒はそっぽを向いて、ベッドにもぐりこんでしまった。

一夏は「これからこいつと一緒に暮らすのかよ」と憂鬱な気分になり、クロが早く戻ってくることを祈るのであった。



クロはギャーギャーと喚いている同室の女を見た。

身体にはバスタオルしかまかれておらず、豊満な肢体を揺らしながら木刀を振るっている。

半分寝ていたためあまり状況は理解していないが、どうやらシャワーを浴びていた時に誰かが侵入したらしい。

そんな怒ることか、とクロは思う。

この学校とやらに来る前は、孤児院ではよく誰かと一緒にお風呂に入っていた。

一番多いのは院長で、その次が相棒であるシロだった。

子供たちに不思議と懐かれていたクロは、彼らとも一緒に入ったりしていた。

ただ、男の子たちと入るのは少なかった。

皆顔を真っ赤にして恥ずかしがるのである。

クロはそのことに首を傾げて疑問に思っていた。

「ふー、ふー……！一夏め、まさかこれほどまで腑抜けていたとは……

！」

「……服着たら？」

「そ、それもそうだな」

クロの言葉を聞いて、自分がどのような恰好をしていたのかを思い出した箒は、木刀を一度手放して着替える。

風呂のことを考えたため、院長に会わざるを得なくなったクロは、早く彼の元に行きたい。

しかし、ここで乱闘されては邪魔である。

もちろん、障害となれば簡単に排除することはできるが、シロからきつくあまり目立たないようにと言いつけられている。

なるべく実力行使はしたくないところであった。

箒が着替えた後、扉に向かって歩き出す。

そして、扉を開けるとそこにいたのはきよとんとした顔でこちらを見上げる男子生徒の姿があった。

そんな彼に向かって、クロは「大丈夫」と言ってやる。

「もう大丈夫だから、さっさとそこをどけ」の短縮版である。

どうやらそれが通じたらしく、一夏は身体を退ける。

それを見てうむと心で頷くと、あの方の元へと歩き出す。

クロは、入学して間もない学園内の構造を理解していない。

しかし、院長を探すのであれば構造の理解は必要ない。

こうして鼻をスンスンと鳴らして匂いを嗅ぐと、すぐに院長のいる場所が判明する。

心の底から安心して身を預けたくなる最上の匂いを嗅ぎ取り、歩き出す。

ここにいる生徒たちが多いせいで、香水などの甘い匂いが邪魔をする。

とくに、嗅覚が優れているクロにとっては、中々の衝撃である。

孤児院では、そう味わうことのない匂いだ。

【外】から帰ってくるスクールやオータムなどが、たまにこの匂いをつけて戻ってくる。

クロは正直、そんな匂いが好きではなかった。

「クンクン……んん」

クロはついに院長の居場所を突き止める。

扉の上には、「理事長室」と書かれてある。

意味がよくわからなかったが、とにかく一番偉い人がいる場所だと思おうクロ。

そして、そこに院長がいるのは当然だと思った。

ノックをすることもなく、部屋の中に入るクロ。

シロからは強く怒られるが、そんなことは知ったことではない。

早く院長に逢いたいのだ。

「……久しぶり、いんちよー」

やっと手を上げて挨拶をすると、高そうな椅子に座った彼はニッコリと笑って出迎えてくれた。

その優しい笑顔を見ると、クロは豊満な胸の奥に心地よい痛みが走るのを感じた。

一体何が起きたのかわからず、キョトンと首を傾げる。

そうしていると、院長が心配そうに尋ねてくる。

「……ううん、なんでもない」

クロは首を左右に振って否定する。

胸に手を当ててギュツと握ると、その痛みもひいて行った。

病気ではないだろう。大丈夫だ。

そう思ったクロは、ここに来た目的を果たそうとする。

「……いんちよー、お風呂入ろう？」



理事長室には、立派な浴室も備え付けられていた。そこにクロと院長は入っていた。

モワモワと大量の湯気で、周りがほとんど見えない。

とくに、クロは今院長に頭を洗ってもらっていて目を瞑っているため、何も見えなかった。

ただ、後ろにいる院長を気配で察知し続けていた。

「あふー……」

あまりの心地よさに、だらしない声を上げてしまうクロ。

顔も普段の鉄仮面ではなく、ゆるゆるの笑顔になっている。

それを見て院長は優しげな笑みを浮かべる。

クロは院長の笑顔を見ることが好きだった。

もちろん、向けてくれる相手が自分なら尚更いいが、彼が笑ってくれるだけで自分も幸せになれる。

だから、孤児院から院長が出ることには少し不安を覚えていた。

もし、院長が嫌なことにあつたらどうしよう。

その場合は、すぐに院長を連れて孤児院に戻り、その嫌なことを押し付けた者と学園行きを決めた束を殺すつもりであった。

ただ、長い付き合いであるクロでも院長が嫌がっていないことを感じて、その案は「先送り」にされた。

「……………」

院長は一言クロに告げてから、お湯を頭にかけた。

あわあわと泡立っていたシャンプーが流され、より艶やかさが増した黒髪が露わになる。

クロは犬のように頭をプルプルと振り、水けを除いた。

「……………」

あとは自分でできるかと院長に問われ、少し考えるクロ。

孤児院にいたころもよく院長と一緒に風呂に入っていたが、ほとんどは頭を洗うだけでどまっていた。

クロとしては全身くまなく洗ってもらってまったく構わないのだが、シロやシャルロットからの激しい妨害にあったのだ。

彼女たち曰く、自分たちがいない間に院長がコロッツといってはたまらないらしい。

クロはその意味がいまいちわからなかったのだが、彼女たちはやけ

に自分の身体を見て言っていたことを思い出す。

視線を落とすと、自分の身体が目に入る。

健康的に焼けた褐色の肌。

そこには雫が浮かび上がって、艶やかな雰囲気醸し出している。

胸部は豊かに盛り上がり、母性を強く主張している。

鍛えられた腹回りはキュツと引っ込み、魅惑的な括れを作りだしている。

そこから大きな曲線が描かれ、安産型の臀部がある。

引き締まりつつも肉ののった太ももを通り、雫が下に落ちていく。

「……？」

クロは自分の身体を院長の手で洗ってもらうことを想像すると、背筋にゾクゾクとした感覚が走った。

戦いの中で得られる感覚に近いものであったが、決して不快になるものではない。

分からない感覚に、クロは首を傾げる。

孤児院にいたころ、院長と一緒にいたりすると時々このような感覚に襲われるのであった。

「身体も洗って？」

クロはそうお願いした。

そうした方が、気持ちよさそうだからだ。

院長は彼女のお願いを、嫌な顔一つせず了承した。

【自分に】優しい院長に、またほっこりとするクロ。

自分の身体に伸びてくる手に、何故か豊満な乳房の奥がドキドキとするのを感じながら、待つのであった。

シロと楯無と一夏

「ふわぁ……」

一夏が大きく欠伸をすると、目の前にいる箒がジロリと睨みつけてくる。

その鋭い瞳は、「行儀が悪いぞ」と非難している。

一夏は確かにそうだと思い、身体を小さくする。

あの鮮烈な顔合わせの翌日、二人は食堂で朝食をとっていた。

未だ険悪の間柄（箒からの一方的なものであるが）であるが、ルームメイトという縁もあって一緒の席についていた。

一夏としては、周りに知り合いが全くいない状況であるので、このことはありがたかった。

「それにしてもクロさん、どこに行ったんだ？ご飯を一緒したかったんだが……」

一夏がそう呟くと、またもや箒がジロリと睨みつけてくる。

おそらく、「女あさりとはいい御身分だな」と言いたいのだろう。

もちろん、一夏は同室の好だからという理由でクロとご飯を食べようとした。

まあ、彼女の幼少からの想いを考えれば、一夏に文句を言いたくなる気持ちも分かる。

しかし、鈍感オブ鈍感の一夏には、何故睨まれたのかさっぱりわからない。

そんな彼の様子を見て、箒はため息を一つはいてから話に付き合っ
てやることにした。

「さあな。また『院長』とやらの所ではないのか？」

『院長』なあ……」

一夏はまだクロと直接話したことは少ない。

だから、彼女自身の口から『院長』とは聞いたことはないが、箒からはよく聞く言葉だ。

この学校に、『院長』という人物がいるのか。

「箒はその人について、何も聞いていないのか？」

「私だって、クロとそれほど仲が良いという訳ではない。そもそも、私たちが出会ったのは昨日が初めてだ」

箒の言葉に、一夏はそうだよなあと頷く。

一夏と箒は幼馴染という特殊な間柄があるが、クロとは昨日に初めて出会った。

まだ、友人とは言えない程度の仲だ。

一夏自身は、同室だからすでに友人のように思ってはいるが。

「それに、クロのことに私たちが必要以上に詮索するのは良くないぞ」

「あ、ああ、分かってるって」

箒に睨まれ、一夏は慌てて頷く。

しかし、彼は不思議とクロのことが気になっていた。

それは、人間なら誰しもが持ち合わせる謎に対する好奇心のようなものかもしれない。

あるいは、あの自己紹介の時間に初めて会った時の、強烈な印象が焼き付いていたせいかもしれない。

『黒』という強烈な印象を与える容姿に、血に飢えた獣のような真っ赤な瞳。

さらに、整った顔とスタイルが、男として引き付けられたのかもしれない。

「うーん……でも気になるなあ、その『院長』って人……」

まだ15歳の一夏は、恋愛脳的な考えに恥ずかしくなり、再び話題を謎の人物に戻す。

箒ともう一度その話をしようとした時、不意に第三者から声をかけられた。

「ねえ、その人のこと、教えてあげようか」

「えっ……っ？」

箒以外から初めて話しかけられ、驚いた様子で一夏は声の主を見上げる。

一夏と箒が座っているテーブル席の隣に、二人の少女が立っていた。

一人は水色の髪の毛を短く切りそろえた、綺麗な少女。

制服越しからもスタイルの良さが見られ、口元を扇で隠しているのが印象的だ。

しかし、一夏はもう一人の少女に視線を奪われた。

何故なら、その少女はクロとそっくりでありながら、与える印象が正反対であったからである。

色素がまったくない純白の髪の毛は、長く伸ばされている。

顔の造形はクロと同じく端正に整っているが、可愛らしさを与えるクロと少し違って、綺麗という印象を与える造形だ。

彼女もまた改造制服を着用しており、クロとは真逆の、真っ白な制服であった。

シミ一つない真っ白な肌と合わさって、幻想的な印象を与えてくる。

スラリと伸びた脚は、まるでモデルのように長かった。

そして、一夏が何よりも目を引き付けられたのは、彼女の瞳であった。

クロと同じく、真紅の瞳。

血のようにドロリと濁っていて、夕日のように輝いている。

「……何かしら？」

「あ、い、いや、なんでもない……です」

真っ白な少女にスツと細められた目で見られ、一夏は心臓を掴まれたような幻覚を見る。

慌てて否定するが、タメ口から敬語に戻す。

彼女の制服につけられたリボンが、二年生を表す黄色であったからである。

あたふたとする一夏を見て、水色の髪の毛の少女がクスクスと笑う。

「あらあら、今話題の男の子くんは、シロちゃんに一目ぼれしちゃった

のかしら?」

「一夏っ!!」

「ち、違いますって! 箒も落ち着けよ!」

彼女の言葉に気が気ではないのが箒である。

テーブルをバンと叩いて一夏を睨みつける。

一夏は水色の髪の少女を睨んで抗議するが、「あら、ごめんなさい」と目を背けられる。

からかってやがると、一夏は腹を立てる。

「そ、それで、『院長』っていう人のことを教えてくれるんですか?」

一夏は話をそらすため、彼女が話しかけてきた話題を繰り出す。

水色の少女はもう少しからかいたかったのになあと思いながら、話に乗ってあげることにする。

これ以上からかうと、一夏ではなく箒が噴火すると思ったからである。

「ええ、多分そのクロちゃんって子は、理事長のことを言っているんじゃないかしら?」

「理事長?」

「そうよ。IS学園の理事長。今年から変わったのよ」

おうむ返しに聞き返す一夏に、水色の少女がコクリと頷く。

しかし、何でまた理事長を院長と呼ぶのか?

それだったら理事長でいいのではないか?

そう思った一夏に、今度はシロと呼ばれた少女が話す。

「その理事長は、以前紛争地帯で孤児院の院長をしていたのよ。クロは——まあ私もだけど、その孤児だったからそう呼んでいるの」

「そ、そうだったんですか……」

一夏は、シロの口から飛び出した重い事実にうろたえる。

いや、事実にくろたえたというより、それを平然とした顔で言っているシロに驚いたのだ。

孤児であることは、一夏は人に言いづらいことだと思っている。

彼も両親がおらず、姉と二人三脚で生きてきたのだが、会ってすぐの人間のそのことを話すことはできない。

しかし、シロはそれを簡単にやってのけた。孤児であることを恥ずかしがるどころか、むしろ誇らしげに見える。

「(それだけこの人は、自分をしっかりと持っている人なんだろうな)」
孤児であることを引け目に感じない。

それだけ強い意志と力を持っているのだろう。

一夏は少なくとも、そう感じた。



「(ふーん、あつさり認めるのね)」

一夏がシロに尊敬の念を持っていたころ、水色の少女——更識楯無はシロを観察していた。

わざわざ一夏のところに来て話しかけたのも、隣に立つ純白の少女の情報を引き出すためである。

名前がシロ。それだけしわからなかった。

楯無は、日本の安全を守る対暗部用暗部の更識家をまとめる当主。さらに、世界中から若いエリートたちが集まってくるI S学園のトップである生徒会長を務めている。

彼女の重要任務の一つに、学園内の平穏があった。

しかし、それを脅かす分子が学園内に紛れ込んでいることを、楯無は認識していた。

まずは目の前で座っている少年、一夏である。

「まさか男の子でI Sを動かせる子がいるなんてね……。大変だなあ)」

楯無は今世界中に満ちている女尊男卑の思想には浸かっていない。むしろ、ばかばかしいと思っているほどである。

しかし、ついつい目の前の少年を面倒くさいと思ってしまうのも仕方がない。

彼が現れたことで、この学園にいつ何かしらの攻撃が襲ってくるかわからなくなってしまうた。

世界で唯一の男性操縦者を狙うものたちは、不可侵である I S 学園にも容赦なく襲い掛かってくるだろう。

だからと言って、一夏を追い出したりすることもできるはずがなかった。

そもそも一夏に適性があつたのは偶然だと楯無は考えている。そんな少年を隔離したりするのは、いくらなんでも酷過ぎる。

だから彼女は、学園と同時に一夏も守ることを決めたのだ。

「(そのためこの子のことを知りたいんだけどねえ)」

チラリと見るシロの横顔。

同性であり、自分の容姿も優れていることを自覚している楯無であるが、シロは自分と同等かそれ以上の美人で、時折ドキツとすることがある。

この少女は、四月になって二年生に編入してきた転校生である。

I S 学園は特殊な学校であるがゆえに、転校生などほとんど受け入れられることはない。

だからこそ、楯無はシロのことを怪しく見ているわけだが……。

「(ゼロというわけでもないから、断定することもできないのよね)」

I S 学園への転校生は確かに少ないが、いないという訳ではない。

つまり、シロのことを『I S 学園および一夏に敵意を抱く敵』と判断するには、まだ早すぎる。

「(はー、生徒会長も大変だなあ。この一年が終わったら、簪ちゃんか織斑くんに押し付けちゃおっと)」

楯無は扇に隠された口元を、柔らかく曲げさせた。

◆
そして、当然シロは楯無の考えを把握していた。

「まあ、私がこの子の立場だったらそうするだろうしね」
シロにとって院長が大切なように、楯無にとってこの学園は大切なものなのだろう。

ただ、シロの場合は世界中のなによりも院長が優先されるため、気持ちの重さ的には酷い差があるが。

その大切なものを守るために、何らかの工作を行うのは当たり前だ。

「別に私のことを嗅ぎまわるのはいいわ。恥ずかしいことなんてないし」

一般説として、孤児院出身という経歴は隠したがるものかもしれない。

しかし、シロに関しては——というより【あの孤児院】出身者であるならば、誰も恥ずかしがったりなんてしない。

何故なら、あの孤児院こそがどんな家庭よりも幸せな場所なのだから。

あの場所以上に幸せな場所なんてない。

院長以上に、優れた人間なんていない。

シロはそれを強く信じていた。

たとえば誰かにそれがおかしなことだと指摘されたとしても、まったく揺るぎはしないだろう。

「私のことを嗅ぎまわるのはいいけど、もし院長に何かしようとするのなら……」

シロの目がスツと細まり、紅い瞳がドロリと濁る。

その視線の先には、唯一の男性操縦者と楽しげに会話をするクラスメイトの楯無がいる。

シロは彼女が何者か、知っていた。

対暗部用暗部・更識家の現当主。ロシアの国家代表に選ばれるほど

の実力者。

もし、敵に回るとすれば、厄介極まりない女である。

しかし、それがどうした？

「院長に害をなすなら、神でさえ殺してやる」

シロにとつて、神とは院長。神聖不可侵の存在である。

それを侵そうならば、全力を以て潰すのみ。

「はあ、孤児院の中にならざらなければよかったのに」

そうすれば、こんなに面倒なことにはならなかったのに。

あの場所で院長に害をなそうとするのは武装勢力があつたが、あんな連中はシロにとつて片手間で片づけられる。

実際、二つの勢力を跡形もなく消し飛ばす策だつて用意していた。

それなのに、院長をこんな場所に連れ出して……。

「あの糞ウサギ、やっぱり殺すしかないわね」

シロはその元凶となつた大天災が『ふはははははっ！』と笑っている様子を思い浮かべ、額に青筋を浮かべるのであつた。

シロと院長

「大したことはないわね」

シロは眼下の戦闘を見て、そう呟いた。

現在、IS学園のアリーナでは織斑 一夏とセシリア・オルコット
の決闘が行われていた。

始業式が始まって早々の戦闘。

しかも、その役者が『世界で唯一の男性操縦者』と『イギリス代表
候補生』だというのだから、聴衆もかなりの数が集まっていた。

そこで繰り上げられる激闘。

多くの者はセシリアの圧勝という形での戦闘だと思っていたのだ
が、一夏も案外くらいいつている。

そんな様子を、シロは高い場所から見下ろしていた。

そこは、アリーナ全体を見下ろすように設計された特別な観戦室で
あった。

そこに入れるのは、この学園の中では一人しかいない。

「あなたはどう思う？ 院長」

それは、学園の長である理事長。シロにとっての院長であった。

彼は柔らかかそうな椅子に腰かけ、シロと一緒に戦闘を観戦してい
た。

シロの質問に、院長は彼女を見て答える。

「……そりゃ二人とも頑張っているでしょ」

的外れな返事が返ってきて、シロは思わずクスクスと笑う。

その笑顔の美しさは男の心を根こそぎ奪ってしまうほどのもので
あった。

だが、院長はシロの反応を見て、何か間違ったことを言ってしまった

たかとおろおろとしていた。

そんな情けない姿も、シロにとっては可愛らしく見えた。

また、自分がいないとダメだなと母性的な感情まで伴っている。

「私が聞いたのは、あの二人の戦いぶりについてだったのよ」

まあ、いいか。

院長の答えの裏を返すと、今戦っている二人は関心に値しない能力しか持ち合わせていないということだ。

つまり、院長はあの二人を障害だと認めなかった。

院長がそう判断したのであれば、それは絶対にあっている。

シロは強く思っていた。

だが、油断はできない。

「院長には、絶対に何かあつてはいけないのよ」

シロは椅子に座る院長に、後ろから腕を回す。

腕を交差させて、院長をギュッと優しく抱き寄せる。

真っ白な改造制服に包まれた豊満な胸が、院長の後頭部に押し付けられる。

むにゆうつと柔らかかそうに歪み、張りのあるそれはすぐに押し返す。

「は……っ」

なによりも愛おしい存在をその胸に抱いていると、色々なことが心を満たす。

大切な存在が身近に感じられる安心感。

至上の存在と密着できていられる幸福感。

そして、量感のある乳房に固い後頭部が押し付けられて得られる快感。

「(……ちよつとムラムラしてきちやったわ)」

シロは雪よりも白い頬の肌をうっすらと赤く染める。

院長にかからないように工夫しているが、息も荒くなっている。

豊満な乳房の奥では心臓がバクバクと高鳴っているし、むっちりとした肉付きの脚は不自然にもじもじさせている。

幸い、院長はまだ気づいていないようだが……。

「もうここで覆いかぶさっちゃおうかしら」

シロの真つ赤な目がドロリと濁る。

危険な思考にINしてしまった。

院長がいくら聖人じみた優しさと鋼の如き理性を持ち合わせていようと、性欲はあるだろう。

女に迫られて嫌なはずがない。

それに、シロは超という前置詞が付くほどの美少女である。

長い白髪は絹のようにサラサラとしていて上品であるし、顔の造形も彫刻師が丹念に彫ったように整っている。

肌は汚れ一つない新雪の如き白さである。

さらに、性欲という枠内で外せないのがスタイルであるが、シロのスタイルはかなり優れている。

相棒のクロよりは少し小さいものの、十分に豊満で張りのある双丘。

キュツと引っ込んだお腹のせいで、胸とお尻がさらに大きく認識される。

お尻は安産型で、肉付きがいい。

脚はむっちりと肉がのりつつも下品ではなく、スラリと伸びたそれはモデルをも上回る。

シロはしたことはないが、軽くチラ見せをするだけで火に寄せ付けられる虫のように男が集まってくる。

それどころか、そっち趣味の同性も引き付け、ノーマルな同性もアツチの趣味に引きずり込んでしまう危うさを持っている。

シロは自分の容姿の優れを誰よりも理解していたし、院長に対してならそれをいかなく発揮するつもりである。

「……まあ、するつもりはないけど」

ドロドロに濁った真紅の瞳に、理性の光を取り戻すシロ。

身体の火照りは収まらないものの、院長の頭を胸に抱くことでなんとか抑えることにする。

院長に身も心も完全に捧げた身であるから、身体を重ねたいと思うことも事実である。

シロが強引に迫っても、優しい院長なら受け入れてくれるだろう。しかし、院長の意に沿わないことは決してするわけにはいかない。基本的に院長が望むことを全力で遂行するのが、シロたち孤児院メンバーの務めである。

本来なら許されないが、院長のためを思うことで彼の許可を得ずに行動することもある。

だが、そのときは万が一にも院長を失望させたりしないように、世界でもトップクラスの各種能力を持ち合わせている幹部会で決定することになっている。

今回のことは、シロの肉体的および精神的快楽を目的とした行為である。

院長が喜んで受け入れてくれるまで、それを行動するわけにはいかない。

「(それに、致したあとが色々と面倒だし)」

それは、シロが院長と一つになれた後の話。

孤児院の一般メンバーの多くは、シロが育ててきたこともあるし、シロは自分たちより格上の存在である。

だから、彼らは「心の中で何と思っていようと」表面上は祝福してくれるだろう。

だが、同格の幹部メンバーはどうだろうか。

全員が全員少しの差はあれど、院長を盲目的に愛して最早崇拜しているときえ言える狂った女たちである。

今まで院長に対して実力行使をしてこなかったのは、十人の幹部がそれぞれを抑止し合っていたことも大きな要因の一つである。

クロなどはお風呂に乱入すると言う暴挙をたびたび起こしているが、まだ許容範囲内である。

皆大体それに似たようなことは行っているからだ。

しかし、それが一人の抜け駆けで抑止の輪が崩壊してしまったら？

まさに、血で血を洗う戦争の勃発である。

その参加メンバーが、一人で小国を滅ぼしてしまうような高い戦闘力を持っているのだから、笑えない。

一人の男を取り合う女の戦いで、世界が滅亡の危機である。もし、そうなった場合は誰が勝つかわからない。

有力候補でいくと、ずば抜けた戦闘力を持つクロや実戦経験が豊富な『亡国機業』ファンタム・タスク潜入チームである。

しかし、院長のためなら人間の限界や理解を容易く踏み越える孤児院メンバーに、常識や当たり前は存在しない。

誰が勝つかはわからないし、もしかしたら全員相打ちという壮絶な結果が待っているかもしれない。

「(でも、真つ先に狙われるのは私になるものね)」

仲間意識など、院長を介してでしか持ち合わせていない幹部メンバー。

おそらく戦争になっても総当たり戦になるだろう。

だが、院長を襲って肉体関係を持つ者が最初の標的になるのは当然である。

誰だってそうする。シロだってそうする。

いくらシロでも、自分と同等の力を持つ9人に襲い掛かられば、どうなるかはわからない。

院長と末永く寄り添うためにも、そのような下策は実行するわけにはいかない。

「そうね、終わったわね」

院長の言葉にコクリと頷くシロ。

その少し後、ビーツという高いブザー音が鳴り響く。

一夏とセシリアの決闘の終わりを告げる音であった。

結果、エネルギー残量がゼロになってしまった一夏の敗北という形で終わった。

シロは自分の胸に抱き寄せる院長を見る。

院長は分かっていた。一夏が敗北することを。

やはり、先見の明があるなあつと院長の評価をさらに上げ、崇拝の度合いがグレードアップする。

ちなみに、好感度が高すぎて最早あまり変わらないことを書いておく。

「一応、ちゃんと観察していたけど、やっぱり杞憂みたいね」
シロは院長といちやついていたが、色ボケていたわけではない。
一夏とセシリアの情報を、しっかりと入手していた。
ちなみに、9割が院長のことを考えていて、残りの一割で決闘内容を見ていた。

シロの優れた頭脳だからこそ、できることである。
そんな卓越した脳ではじき出した彼らの脅威は、まったくないというものであった。

一夏とセシリアも、未だ純粋な能力は非常に低いと言っている。
勿論、彼らは他の一般人よりも優れた操縦者だが、シロ視点では取るに足らない程度の力しか持ち合わせていなかった。

ただ、シロは一夏の専用機である白式だけは注意することを決めた。

あの機体の『ワン^単オフ・アビ^仕リティ^様ー』である零落白夜は、対象のエネルギーを消滅させるという恐るべき能力を持っている。

ISで戦う以上、下手をすれば一撃で戦闘不能に持って行かれることもある。

「ちっ、あの糞ウサギ。面倒な機体を作りやがったわね」
次会ったら一発殴ることを心に決めるシロであった。

それに、思っていた以上に早く決闘が終わってしまった。
院長が理事長としてIS学園に君臨し、シロは生徒という関係にあるので、孤児院にいたときよりも気軽に逢えないようになってしまった。

「(能天気なあの子はフラフラと逢いに行っているみたいだけど……ずるいわ)」

シロは可愛らしく頬をぶくつと膨らませる。

院長とクロにしか見せない、気の抜けた表情である。

ほとんど会えないからこそ、決闘時間の間になんとか触れ合おうと特別な観戦室にまで侵入したのに……。

「(もつと戦っていなさいよ、馬鹿)」

シロの中で、敗北した一夏に対する気持ちが急降下する。

思い切り八つ当たりであるが、そんなことは知ったことではない。
「はあ……お互い頑張りましょうね」

院長は不思議そうにしながらも、コクリと頷いた。

シロはそんな彼を優しく、愛おしげにギユツと抱きしめるのであった。

シャルロットと本音と一夏

「今日はISの実技授業を行う。専用機持ちは前に出て、実演しろ」

IS学園一年一組の授業は、アリーナで行われていた。

生徒たちの前に立つ千冬の言葉に、専用機持ちたちが三人前に出る。

そのうち二人は、以前の決闘でおなじみの一夏とセシリアである。

最後の一人は……。

一夏がそう思った時、その人物が前に出てくる。

「頑張ってる、シャルルん」

「うん、行ってくるよ」

クラスメイトののほほんとした雰囲気醸し出す女子生徒に応援を受けた、シャルル・デュノアであった。

一夏は、彼女を見て心臓をドクンと跳ねさせる。

能力のみならず、容姿でも優れた生徒が多いIS学園であるが、シャルルの容姿は群を抜いていた。

少しくせつ気のある蜂蜜色の髪の毛を後ろでくくり、長い髪でも動きやすいようにしている。

顔は柔らかかで、中性的に整っている。

身長は一夏よりも結構小さいのだが、スラリとしたスタイルによって少々大きく見える。

さらに、思春期の一夏の目を引くのは、彼女の胸部である。

ISの実技授業であるから、生徒たちは一夏も含めて皆ISスーツに着替えている。

このスーツが一夏の男心をくすぐりまくる。

身体の線がハッキリと浮き出てしまうほどぴったりと肌に吸い付

くこのスーツは、瑞々しい女子高生たちの肢体も浮かび上がらせてしまうのである。

高校一年生、思春期真っ盛りの一夏にとって、これは中々に刺激的な光景である。

しかも、シャルルは服の上からではわからないが、かなり豊満な乳房の持ち主である。

本人と院長しか知らないことであるが、カップはなんとE。

鈍感にもほどがあると評される一夏も、性欲は年相応にある。

このような爆弾を見せられたら、顔が少し赤くなるのも仕方がない。

これだけですんでいるのは、シャルルの身体を見る前にそれを上回るおっぱいを見ているおかげである。

それこそが、同室のクラスメイトであるクロである。

小柄な体躯に不釣り合いなほど実った超ド級のおっぱいに、一夏は少量の鼻血を漏らしたのであった。

「よろしくね?」

「お、おおう!よろしく……」

そんな一夏の心の中を読み取ったのか、シャルルが柔らかく一夏に笑いかける。

慌てて返事を返すが、おかしいとは思われなかっただろうか?

同級生にエロいことを考えていたなんて知られたら、もう生きていけない。

そう思う一夏であったが、シャルルはニコニコとしているのであればなかったのだろう。

ホツと胸をなでおろす。

「よし、ISを展開して、飛んでみる」

千冬の指示に従って、三人はそれぞれ専用機を展開する。

一夏は白を基調とした白式を。

セシリアは青を基調とした『ブルー・テイアーズ^著』を。

シャルルはオレンジを基調としたラファール・リヴァイヴ・カスタムIIだ。

三人はISを身に纏うと、凄まじい加速力で——一夏はやや遅れていたが——上昇する。

そのあと、急降下して地上から十センチの位置で完全停止をしろという指示が入る。

まず最初にシャルルが実行し、見事にそれを成し遂げた。

上からその様子を眺めていた一夏は、感心したように呟く。

「おお、すげえ……」

「まあ、デュノアさんはフランスの代表候補生……つまり、イギリスの代表候補生であるわたくしと同じ位実力は持っていますわ」

「へー、そうだったのか」

一緒に眺めていたセシリアからの注釈に、一夏は納得する。

セシリアと口論をしたときは茶化していたが、彼も専用機を持たされている人物の凄さは理解している。

ISは世界中に467機しか存在しない超兵器である。

一機あるだけで一国の防衛を担うことができ、また、一国を滅ぼすこともできる。

現代の国家において、ISの確保とその操縦者の育成は一大任務であった。

そんな貴重なISを、弱冠15歳の少女に貸与しているのだ。

その少女たちがどれほど優秀であるかは、語らずとも理解できよう。

「それに、デュノアさんは確か、世界で第一位の量産機ISシエアを誇る大企業、デュノア社のご令嬢であるはずですわ。ISに造詣が深いのは、ある意味当然ですわね」

「はー、俺とは全く違う世界に生きているんだなあ」

一夏は思わずぐくりと喉を鳴らす。

お金持ち、ご令嬢といった要素では、隣にいるセシリアだって負けていないだろう。

イギリス名門貴族の当主である。伝統という意味で見れば、セシリアに軍配が上がるだろう。

しかし、資産や経済力といった面で見ると、軍配はシャルルに上が

る。

ISにろくに触れてこなかった一夏でさえ知っている名前であるデユノア社は、それだけの力を持っていた。

『おい、一夏！何をしている！早く下りて来い！』

「うわっ」

突然、大きな声に呼び掛けられ、一夏は耳を塞ぐ。

下を見れば、拡声器を手に目を吊り上げた箒がいた。

思わず、ひっと小さく悲鳴を漏らす。

すぐに、隣であわあわと慌てている真耶を見て、ほっこりとする一夏であった。

「まあ、うるさいですわね。でも、このままいても授業進行の妨げになりますわね。それでは一夏さん、お先に失礼しますわ」

「お、おう。頑張れよ」

その後、シャルルと同じく見事に成功させたセシリアと、地面に墜落した一夏がいたのであった。



「うわ〜……」

本音は目の前でISが動いているのを見て、改めて感心する。

ISが凄い機械なのは当然理解していたが、実際に目で見てみると受ける印象は意外と大きい。

今は、クラスメイトの三人が専用機を使って実演してくれている。

先ほどの降下訓練は見事なものであった。

シャルルとセシリアは、流石代表候補生と言える素晴らしい能力を見せてくれた。

一夏は墜落してしまったものの、ISに触れ初めて一月ほどしか

経っていないことを考えれば、なんだかんだで乗りこなしていることが凄いい。

降下訓練の後に行われているのは、武装の呼び出し訓練だ。

「織斑、お前はもつと素早く呼び出せるようになれ。オルコットは近接武器の呼び出しが課題だ。何度も反復して、次の実技の時までに改善しろ」

「(うわー、織斑先生厳しく)」

一夏だけでなく、イギリス代表候補生のセシリアにまで容赦なく指導を行う千冬。

あまりの厳しさに、本音は苦笑いだ。

だが、一夏はまだしもプライドが非常に高いセシリアも、文句は言いつつも指導を聞き入れないことはなかった。

それは、千冬が世界最強の称号を持っていることに理由がある。

「次はデユノア。やってみろ」

「はい」

「(あ、シャルルんだ。頑張れ)」

本音は声に出さないうで応援する。

シャルルはそれに気づいたのか、本音を見てニッコリと笑う。

そして、シャルルの実技が行われた。

彼女は一秒を待たず、すぐさま武装を呼び出して手の中に具現化させる。

それは、黒光りする実弾銃である。

そのあまりの素早さに、千冬も小さく驚く。

「ほう……他の武装に切り替えてみる」

「はい」

そのあと、シャルルは千冬の指示に従っていくつか武装を呼び出す。

これは『高速切替』ラピッド・スイッチと呼ばれる業で、シャルルの特技であった。

「よし、いいぞ。織斑とオルコットはデユノアを見習え」

「(すごい、シャルルん!)」

本音はパチパチと手を叩いて喜ぶ。

あの厳しくてほとんど人を褒めない千冬が、遠まわしにはいえシャルルを認めたのである。

友人として、とても嬉しい気持ちになった。

シャルルも拍手をする本音に向かって、ひらひらと手を振ってくれていた。

「こんなにいい人のシャルルを監視しろって、楯無おじよーさまはなにを考えているんだろ〜?」

本音は自分の仕える家の当主に指示された内容を思い、小首を傾げる。

本音の実家である布仏家は、代々更識家に仕えてきた由緒ある家である。

布仏家の次女である本音も、更識家次女の更識 簪に仕えていた。

そして、彼女は主の姉である楯無に、シャルルの監視任務を受けていた。

楯無曰く、今の学園の中には何人かの不穏分子が紛れ込んでいる可能性があるらしい。

そのうちの一人がシャルルだと言うことらしいが……。

「紛れ込めるのかな〜?」

本音はそこが疑問であった。

IS学園は、世界中から若きエリートたちが集う場所で、将来は国家を支える柱となる人材を育成する機関である。

だから、敵対勢力から何らかの接触を凶られないように、この学園にはいかなる国家や組織、機関からも影響を受けないとされている。

さらに、セキュリティも万全である。

もし、少しでも背景におかしな部分があれば、書類選考の時点ではじかれるだろう。

本音からすると、もぐりこむことは到底現実味を帯びていなかった。

「それに、ものすごくいい技術を持った人がデータを改ざんしないとダメだし〜」

IS学園はネットセキュリティも非常に高い。

ハッキングして改ざんすることが出来る人物など、果たして世界に存在するだろうか？

それこそ、あの大天災レベルでないと無理だろう。

「(でもでも、楯無おじよーさまの言うことには逆らえないしね)」
「どれだけおかしいと思ったとしても、本音は更識家に逆らうことはできない。」

ただ、与えられた任務を遂行しなければならぬ。

「(シャルルんは大丈夫だと思うけどな)」

本音は、もし学園内に不穏分子がいたとしてもシャルルはありえないと思っていた。

彼女の背景は、暗いところがまったくないからである。

フランスの正式な代表候補生であり、世界第一位のシエアを誇る大企業のご令嬢。

片方だけでも確たる信頼に値するというのは、それが二つもついている。

本音には、どう考えてもシャルルが不穏分子だとは考えられなかった。

背後関係を偽装するにしても、到底偽装できるものではない。

「(報告の内容は安定だね)」

週一回程度、生徒会では監視結果の報告会がある。

本音はその後、報告会でこのように報告した。

『シャルル・デュノアに、不穏な動きなし。問題はないと思われる』。

シャルロットと院長

「(面倒だなあ)」

シャルロットは千冬に指名されて、心の底でそう毒づいた。

ISの実技訓練なんて、シャルロットはもうする必要なんてほとんどない。

それが、初心者に教えるような授業であるならばなおさらだ。

「(織斑くんとかオルコットさんがいるんだから、二人にしてもらえばいいのに)」

しかし、千冬の指名は三人だ。

シャルロットも専用機持ちなので、前に出て見本を見せなければならぬ。

ここにいる生徒たちにとって、専用機持ちは文字通り天の上の存在である。

そんな彼女たちを前に、専用機持ちが「面倒だからやりませーん」なんて言えるわけがない。

「頑張れ、シャルルん」

「あはは……」

手をふりふりと可愛らしく揺らしながら応援してくる本音。

シャルロットはそれに苦笑しながらも手を振りかえす。

本音は良い子だ。

性格が穏やかで人懐こく、誰とでも仲良くなれる。

シャルロットも【表向きは】似たような性格であるから、彼女とは仲良くやれるだろう。

「(本音が普通の子だったらね……)」

残念なことに、シャルロットは本音と心の底から通じ合うことはで

きない。

本音は、何かとこちらを嗅ぎまわっている更識家の従者である。シャルロット自身だけならまだしも、その上の存在をも調べようとしているのは許しがたい。

とはいえ、本音はシャルロットだけのことを監視している。

シャルロットは、更識家当主のことは敵視しつつも、本音のことはそれほど嫌いではなかった。

だから、【事を起こすまでは】仲良くやるつもりでいる。

「(というか、僕だけじゃなくてクロも本当ならするべきなのになあ)ぷくつと頬を膨らませて、不公平だとクロを見る。

とうのクロはシャルロットの視線に気づき、コテンと首を傾げている。

シャルロットはクロが専用機を保有していることを知っている。

だが、IS学園にはそのことを報告していない。

まあ、それもそうだろう。

シャルロットは【一応】フランス人としているし、専用機を持っても何ら不思議はない。

しかし、クロの本当の出身国はほとんど政府が機能していなかったあの国である。

そんな国がISを保有しているとはいいいがたい。

だから、束はクロをねじ込むときに出身国を変えない代わりに、専用機のことを隠したのであろう。

それでも、ズルいなあと思わずにはいられないシャルロットであった。

「(それに、あのスタイルも……)」

どうやらシャルロットが嫉妬しているのは、スタイルのことも含まれているようだ。

シャルロットとほとんど変わらない低身長であるのにもかかわらず、真耶にも匹敵する乳房。

最早巨乳の枠を越えて爆乳と言えるのではないだろうか。

さらに、それでもスタイルは滑稽とならずに美しく整っている。

豊満な乳房に括れた腰、安産型のお尻に肉付きが良い脚。シャルロットは羨ましくて仕方がない。

とはいえ、そう言うシャルロットもかなりのスタイルの良さである。

乳房はクロや真耶には劣るものの、Eカップという申し分のない大ききである。

鍛えられたお腹周りは引き締まっているし、肉付きの良いお尻は柔らかな張りがある。

そんなシャルロットの肢体に、一夏の視線がチラチラといつていることからして、他の女子生徒たちに比べて魅力的なのは明らかであった。

「飛べ」

千冬がISを展開した三人に向かってそう告げる。

シャルロットは指示されることに若干ムカつきながらも、従って上空に飛ぶ。

上空に浮かんでいると、他の2人もやって来た。

この二人は、少し前に決闘をしたとは思えないほど仲が良い。

今も二人で話しているのを、愛想笑いを浮かべながら相槌を打っていたシャルロット。

「っ!!」

しかし、とある視線を感じて顔をバツと上げる。

シャルロットはよく視線を感じる。

彼女の容姿は群を抜いて美しいし、スタイルだって抜群だ。

街を出れば、異性だけでなく同性の視線も独り占めにする。

ほとんどが女子で構成されているIS学園であるが、中性的な容姿をしているシャルロットはそっち系の女子の視線も感じるほどだ。

しかも、今は実技訓練ということでISスーツを着ている。

豊満で男好きのする魅惑的な肢体が浮き出ているシャルロットに、視線が集まるのは当然かもしれない。

実際、一夏もチラチラと身体を見てきていることは知っていた。

しかし、この視線を受けた感じはこれまでのものと大きく違ってい

た。

一夏や他の女子生徒から視線を受けても、鳥肌が立ったり不快に思ったり気持ち悪く思ったりするだけである。

だが、今回の視線を受けたら、何だか心の底から安心できるものに包み込まれたような感じがするのだ。

シャルロットは、こんな暖かな視線を向けてくれる人物を知っていた。

「(院長!)」

シャルロットが目を瞑る。

すると、向けられる視線が細長い布のようなものになる。

綺麗な白い布は本音のものである。

この薄汚れた布は……一夏である。どうやらまたシャルロットの身体をちら見していたようだ。

シャルロットはイライラしながらも、今は先にやることがあるので見逃してやる。

そして、一つ真っ赤な布が見つかる。

それを掴むと、暖かい気持ち伝わってくる。

院長以外には冷え切っていた心さえも、温かくとかしてくるようだ。

「(見つけたっ!)」

シャルロットは目をグワツと開く。

彼女を見ていた本音がビビるほど、目はギラギラとしていた。

視線の先は、アリーナの全貌を臨める特別観戦室であった。

防弾、防刃など様々な特殊加工が施された超硬度のガラスの先には、シャルロットの望む人物がこちらを見ていた。

「(院長だっ♡)」

全身からブワツとピンク色の瘴気が溢れ出す……ような幻覚を本音は見た。

遙か下からシャルロットを見上げる本音は気づかなかったが、彼女の瞳の中にはハートが散りばめられていた。

それも仕方がないかもしれない。

院長至上主義を掲げるシャルロットは、IS学園に入学して以来好きな時に院長に逢いにいくことができないからだ。

確かに、理事長に頻繁に女子生徒が逢いに行けば、何かよからぬことをしているのではないかと勘繰られるだろう。

とくに、院長は今年から理事長に就任しており、男でもある。

男を良く思わない女尊男卑の思想に染まった生徒や教員は少なからずいるだろうし、今隙を見せるわけにはいかない。

「僕としては、そういったスキャンダルになってもいいんだけど……」

シャルロットは自分が理事長室に入り浸って彼の女になることに、何のためらいもない。

うるさいやつは皆殺しにすればいいし、デユノア社からの上納金の一部は彼との逃避行のための資金として確保している。

この世界から逃げ出して、二人だけの楽園を創るのも悪くない。

そこで、退廃的な生活を送ることを想像すると、豊満な胸の奥がドキドキとする。

「(でも、そうすると他の子たちがなあ)」

シャルロットがその案を実行に移さないのは、孤児院の幹部メンバーが気がかりだからだ。

もし、彼女が作戦を実行したとして、彼女たちが黙って見ているだろうか？

絶対に見ていない。何かしらの攻撃は絶対に加えられる。

シャルロットは確信していた。だって、自分もそうするだろうし。

彼女は相手が幹部メンバーであろうと、簡単に負けるつもりはない。

しかも、院長との楽園ラブラブ生活が懸かっているとなれば、通常の何倍もの力を発揮するだろう。

だが、院長が取られるということがかかっている幹部メンバーは、文字通り死ぬ気で襲撃してくるだろう。

流石に、自分以外の9人と正面からぶつかって生きていられるとは思わない。

というか、生きていられるならさつきと実行している。

「(多分、僕以外の皆も一度は考えたことがあるだろうな)」
シャルロットの読みは正解である。

それどころか、シロは数日前にそれを考えていた。

だが、孤児院幹部会はお互いが抑止力となっているのである。

これが、院長という一人の存在の上に成り立っている危険な孤児院の全貌である。

「(院長♡)」

手をふりふりと振ると、院長はニツコリと笑って振りかえしてくる。

それだけでシャルロットは幸福感に包まれる。

さらに、院長に見られているという事実が彼女を興奮させる。

普段から彼の視線を集めるために、スカートをかなり短くして生脚をふんだんに見せつけたりしているシャルロット。

だが、今の彼女はそれよりも露出度の高いISスーツを着用している。

そのことが、彼女を昂らせる。

「(他の人だと気持ち悪いだけなのに……院長のは違う……)」

身体にぴったりと吸い付いたISスーツを見られることは、身体そのものが見られていると言っている。

普通であれば何らかの負の感情を抱くシャルロットであるが、院長に向けられたものだとは別である。

乳房の先端にある突起が硬く尖り始め、ISスーツを押し上げる。

下腹部がキュンと疼き、じんわりと湿りを帯びる。

「(ふー、我慢我慢……)」

今すぐラフアール・リヴァイヴ・カスタムIIをかつ飛ばして彼に抱き着き、匂いをくんくんと堪能しながら火照った身体をこすり付けたい。

そして、それ以上のことも妄想してしまうシャルロット。

だが、院長に害を及ぼさないためにはそんなことをして注意を引き付けてしまっはいけない。

自制心（笑）のあるシャルロットは、それを抑え込む。

そうしていると、千冬から降下指示が伝えられる。

院長以外からの命令にまたもやイラツとしながらも、湿った下半身を乾かすために最初に実施する。

ちなみに、院長に命令された場合はゾクゾクと背筋を強張らせてなんでも遂行するだろう。

その後、シャルロットは内心の発情を周りに一切気取らせることなく、見事に授業をやり遂げる。

授業終了後、院長に猛ダツシユで逢いに行ったのは余談である。

真耶と千冬と一夏

「頑張ってくださいね、織斑くん！」

「はい、頑張ります」

一夏はピットで、副担任である真耶から激励を受けていた。

今日はクラス対抗戦の初戦の日。

一年一組代表の一夏の対戦相手は、二組代表の凰 鈴音である。

一夏のセカンド幼馴染にして、中国の代表候補生である。

「普通なら負けるかもしれないけど、山田先生に教えてもらったからな」

一夏は目の前でふんふんと息巻いている可愛らしい教師を見る。

緑色の髪に、少し大きめの眼鏡。

ぽやーっとしていそうな穏やかな顔は、年上とは思えないほど幼い。

しかし、彼女が同年代と明らかに違うことを強調するのが、服の上からでも分かる乳房の大ききさであった。

緩いワンピースを着用していても、その豊満さが伝わってくる。

胸元が緩いため、深い谷間が見られる。

一夏は視線がそこに集中しそうになるのを、何とかこらえていた。

ISのいろはを叩き込んでもらった恩師を、性的な目で見るのは不義理である。

「(女の人はそう言った視線に敏感だっというけど……)」

一夏は箒から聞かされたことを思い出して、おそろおそろ真耶を見る。

だが、彼女は熱心に応援をしてくれるだけで、どうやら気づいていないらしい。

おそらく、彼女の性格と同様にそう言った視線にも鈍感なのだろう。

一夏はほっと一息をつく。

……が、近くにいた箒は違ったようで、恐ろしく冷たい目を向けてきている。

一夏は冬でもないのに凍りつく心境であった。

「鳳さんは中国の代表候補生ですから、オルコットさんと同じくらいの強さのはずです。油断してはメツ、ですよ？」

「分かっています。先生に教えてもらったことは、忘れていませんから」

教師らしく、指を立てて忠告をしてくれる真耶。

一夏はその仕草に子供っぽさを感じながら、彼女の教育能力の高さを思い出していた。

一夏は、まだISに触れはじめてから一月ほどしか経っていない。しかし、不思議なことにエリートが集まるクラスの代表になってしまった。

なってしまったからには仕方がない。

一夏は、存外前向きな思考を持ち合わせている。

クラスの代表に見合うようになるため、ISの訓練を怠らなかつた。

教師となるのは箒とセシリアが多い。

だが、この二人の教育能力は思っていたより酷かった。

箒は、説明に擬音を使いまくりでほとんど理解できない。

逆にセシリアは、理路整然としているのではあるが、専門用語をバンバン使うため、初心者の一夏にはちんぷんかんぷんであった。

こうして、一夏は初めからISの上達に躓いてしまったのである。

そんな彼を助けたのが、真耶であった。

彼女は初心者の一夏にもわかりやすく説明し、『何故それをしなければならぬのか』ということまで教えてくれた。

さらに、座学でも放課後に残って一緒に勉強をしてくれた。

そのおかげで、セシリアの講義にも少しは付いて行けるようになった。

た。

未だ、箒の講義には全く付いていけないが……。だから、一夏は真耶にとてつもなく恩を感じていたし、頼りになる人だと思っていた。

もし、IS関連で困ったことがあれば、真つ先に相談しに行く相手は真耶であろう。

それほど、一夏は彼女を信頼していた。

「本当、IS学園にこの人がいてよかった」

今も、一夏のために熱心に対戦相手のことを教えてくれている。

応援してくれる真耶のためにも、一夏はこの試合に勝つつもりでいた。



「わー、良い調子ですね、織斑くん！」

「……そうだな」

千冬はモニターを眺めながら、真耶の言葉に答えた。

今は、一組代表の一夏と二組代表の鈴音の熱戦が繰り広げられていた。

男の操縦者と大国の代表候補生の熱い戦いに、アリーナに詰めかけた観客たちが歓声を上げる。

その唸りは、ピットの中にまで届くほどであった。

そんな中、千冬は横目で真耶を見る。

彼女はモニターを眼鏡越しに熱心に見ながら、ふんふんと鼻息を荒くしている。

真耶は、とても有能な教師だと千冬は見ている。

というより、千冬だけでなくIS学園教師陣全員の総意であった。

以前、千冬は真耶の評判を教師陣から聞いたことがあった。勿論、いちいち聞きに回るなんていう下世話なことはしていない。教師陣で集まって会話をしていた時、たまたまいなかった真耶の話になったのである。

その時に話されたことは、全てが彼女に対する好印象であった。授業がうまく、生徒たちが熱心に聞く。

ISの実技も、千冬には劣るが申し分なく上手い。

生徒に好かれるほど、性格が穏やか。

おつちよこちよいで可愛い。

おっぱいが信じられないくらい大きい—— などなど。

真耶に対する褒め言葉がひっきりなしに出てきたほどだ。

IS操縦者の中でカリスマの人気を誇る千冬だが、彼女でもこれほど褒められることはないだろう。

真耶の能力と人当たりの良い性格が、これほどの人望を集めていた。

しかし、千冬はこれだけの評価を聞いても、まったく嫉妬しなかった。

それは、他の教師陣も同じだろう。

真耶は、生徒だけでなく教師陣にも大人気であった。

IS学園の教師陣は、エリート揃いの生徒たちを教える人間であるが故、皆優秀である。

そんな彼女たちが手放しでほめるのだから、真耶の能力の高さがうかがい知れる。

そして、そのことを思い出していた千冬はあることも思い出す。

それは、教師陣の一人がふとつぶやいた言葉。

『そういえば、新しい理事長って真耶ちゃんの知り合いなんだってね』真耶が嬉しそうに話していたことを思い出したのだろう。

皆、一気に真耶と理事長の関係について話が盛り上がった。

今は一夏がいるが、ほぼ男子禁制であるIS学園である。

生徒だけでなく、教師たちもこう言った話題は大好きである。

今まで男つ気がまったくなかった真耶に、古い仲の男が現れた。

彼女たちがキャツキヤウフとあれこれ妄想するのも仕方がない。それに、千冬も新しい理事長と真耶の関係が気になっていた。

千冬が新理事長と会ったのは、就任した時の一度のみである。教師陣が全員集められて、発表された理事長の変更。

そのことに、不思議に思う教師も多かった。

千冬もまた、その中の一人である。

前の理事長と、千冬はそれほど親交があったわけではない。

しかし、無能でなかったのは事実だ。

実際、前理事長の時には外部からの圧力にはほとんど屈することはなく、IS学園を守り抜いた。

では、何故理事長がすえかえられたのか？

その疑問に答える者は誰もいない。

新たな理事長は、学園運営を教師陣に全て任せ、責任は自分が取ると明言した。

そのことで、新たな理事長に不信感を持っていた教師たちは大幅に減ったと言えるだろう。

言葉だけ聞くと、まさに有能な上司だからである。

それに、彼のニコニコとした柔らかな表情が、その言葉に余計説得力を持たせた。

男に飢えていると言っているいい教師たちの中には、理事長を狙っているという者もいるほどである。

「(それに、山田先生もえらく気に入っていたようだしな)」

横目で真耶をチラリと見て千冬は思う。

理事長との会合の後、真耶は珍しく自慢していた。

他人の話の聞き役になることが多い真耶が、理事長と知り合いであることを誇らしげに話していたのである。

真耶はいかに理事長が「良い人」であるかを、熱心に語っていた。

その話っぷりは、他の教師たちも聞き入るほどであった。

まあ、途中他の教師に理事長との関係をからかわれて、顔を真っ赤にして慌てていたが。

そうして、もみくちやにされているいつもの真耶を見て、千冬は考

えていた。

「あの時の山田先生の目は……いつもと違っていた……」

真耶の瞳は、穏やかで温かい光を灯している。

だが、あの時の真耶の目はドロドロと濁っていた。

まるで、カルトに狂信する信者のように……。

顔は真っ赤に紅潮していたし、明らかに異常であった。

千冬は到底知りえないことであるが、あの時の真耶の身体も変化していた。

豊満な乳房は張り、ブラと服を押し上げて乳首が分かっってしまうほどだった。

清楚なワンピースの中では、陰部を熱くさせていた。

まさに、発情した雌のように……。

「いや、あれは私の気のせいだろう」

千冬はそんなことを知るはずもないので、あの目は見間違いだと判断する。

実際、千冬以外におかしいと思った者はいなかったのだから。

だが、もし真耶が発情していたことを千冬が知っていたら、明らかに異常だと判断していただろう。

こうした小さな食い違いが、のちに大きな災いとなるのである。

それに、千冬はあの濁った瞳を持っているのは一人しか知らない。

かつて、親交を深める前の束である。

全てを見下し、嘲笑したような篠ノ之 束の瞳である。

だが、それもしばらく会わないうちにすっかりなくなっていた。

千冬と仲良くなっただけからはあの瞳が出てくるのは数こそ少なくなっていたものの、なくなりはしなかった。

しかし、以前久しぶりに逢った時には目はキラキラと輝いていた。

まるで、最高の【玩具】を見つけた子供のよう……。

千冬はふっと笑う。

「(あいつにも、何か楽しさを覚えるものができたのか)」

千冬にとって、人生の楽しみといえは一夏である。

それに匹敵するような何か、束にできたのだろう。

箒のことではないのかと思うが、何かそれ以上のものを見つけた。親友である千冬は、そう思っていた。

「さて、あの新しい理事長のことだが……」
千冬は、他の教師陣と違って、新理事長に何か変な感情を抱いていた。

この感情がなんなのかは、千冬自身も分からない。

ただ、「あいつは危険な奴だ」と本能が訴えかけていた。

決して、気を許してはならない人物だ。

「(山田先生があれほど褒める人物だから、杞憂だとは思わが……)」
真耶の人を見る目は確かである。

それに、千冬も信頼を置く部下の判断を疑うことはしたくないし、する必要はないと思っている。

だが、どうしてもあの理事長のことが頭から離れなかった。

「(更識の調査に、私もかんでみるか)」

IS学園生徒会長が、理事長について色々と嗅ぎまわっていることは知っていた。

千冬は真耶に悪く思いつつも、その調査に参加することを決意する。

「……………」

隣で千冬をじっと見る真耶に気づくことはなく。

真耶と院長

真耶は二組の代表、凰 鈴音との対戦を目前にしている一夏を見る。

中国の代表候補生という強敵が相手だと言うのに、ずいぶん落ち着いて見える。

以前のクラス代表決定戦のときより、余裕があるからだろう。

「専用機をぶっつけ本番で使いこなせと言われたら、緊張もしますよね」

真耶はあの時のことを思い出して苦笑する。

一夏にそれを強制した千冬が彼の姉だからこそ黙っていたが、もし特別な関係がなかったら真耶は止めていただろう。

専用機は強力なものであるが、特定の領域に特化しているものが多いため、クセが強い。

たとえば、一夏の専用機である白式は攻撃特化型である。

さらに、武器が剣一つしかないという超近接格闘型である。

「(あの時、織斑くん以外だったらすぐに撃墜されていたでしょうね)」

真耶は最初、一夏が完敗するものだとはばかり思っていた。

対戦相手であるセシリアも担当するクラスの子供であったからどちらかを明確に応援することはできなかったが、気持ち的には一夏よりであった。

何故なら、女尊男卑的な思想を持っているセシリアが院長の妨げになるかもしれないからである。

一夏はセシリアに負けはしたものの、あと一步というところまで追いついたのである。

その結果を受けて、真耶は彼に接近することにした。

気持ち的には味方であったが、あそこまで乗りこなすとは思って
なかった。

それに、一夏は世界で一人しかいない男のIS操縦者である。
その不確定要素が、真耶の思い描く『院長の支配する理想郷計画』に
支障をきたしてはいけない。

だから、一夏のことを知ることにしたのである。

「性格は、普通の男の子とあまり変わらないみたいですね」

一夏と話すとき、彼の視線が胸元に集まりやすいことは知ってい
る。

鈴音との対戦の前の今でも、胸元に視線を感じていた。

とはいえ、じつと見続けるほど変態なわけではなく、思春期らしく
チラ見である。

真耶は自分の胸が男の視線を引き付けることを知っているから、そ
れほど目くじらを立てるつもりはない。

「それに、服装も少しあれですしね」

真耶はゆったりとしたワンピースを着用している。

だが、この服は胸元がそれなりに開かれた形状になっている。

それは、全て隠してしまう服だと胸がかなり苦しくなってしまうと
いう理由からである。

真耶の豊満な胸は、衣服を纏うと彼女を苦しめるものへと変わって
しまうのだ。

「それに、院長にも見てもらいたいし……なんてっ！」

キヤツと頬に手を当てて、くねくねと身体を動かす真耶。

箒が怪訝そうに見ているのも、気づいていない。

院長は、本当に男かと思うほど禁欲的な男である。

孤児院のメンバーには勿論男も混ざっているが、女の方が数は多
い。

さらに、孤児院を実質運営する幹部メンバーは全員女である。

そんな女所帯の中で唯一なんでもすることが許されている男なの
だから、少しくらい手を出しても問題ないのだが……。

「ダメですね、私。院長のことばかり考えてしまつて……今は、織斑

くんのことを応援しないと！」

ふと気を抜くと、いつも院長のことを考えてしまう。

IS学園に「もぐりこんでいる」のだから、怪しまれないように教職を全うしなければならぬ。

それに、一夏の戦闘データは貴重だ。

今このデータを手に入れられるのは、IS学園しかない。

国際IS委員会などは一夏のデータを要求してくるだろうが、素直に渡すことは千冬が許さないだろう。

下手をすれば、真耶が知りえないところで改ざんを勝手に終えてしまいかもしれない。

今のうちに、一夏のデータを集めておく必要がある。

「それに……織斑先生は院長のことも怪しんでいたようですし……」

一夏と鈴音の戦いが写しだされるモニターをじっと見ている千冬。

そんな彼女に気づかれないように、そっと千冬を見る真耶。

その目は、普段生徒たちに慕われる優しい教師の色は消えていた。

ハイライトが全て失われ、ドロリとしたおぞましい瞳であった。

それを、千冬に勘づかせない真耶もまた相当のものだ。

真耶は院長がIS学園の理事長に就任した時のことを思い出す。

「あんなに嬉しかった時はありませんね」

真耶はまたもや院長のことを考えてトリップしてしまう。

幸い、ここにいる者が一夏の戦いに夢中になっているから気づかれない。

真耶は、学期が始まると院長と離れ離れになることを確信していた。

何故なら、院長の居場所はあの孤児院だからである。

外で駆けずり回るのは、院長による支配を求める自分たちだけではない。

それが、幹部たちが珍しく共通する考えだったからだ。

院長を孤児院から引き離すなど、誰も考えたことすらなかった。

その考えを破壊した人物が、篠ノ之 東である。

孤児院の外に院長を出すという、画期的な考えを発表したのだ。無論、他の幹部メンバー全員がそれに反対したが、院長の向かう先がIS学園となれば話は別である。

真耶やシャルロットが賛成して幹部メンバーの中でも意見が拮抗し合った。

決定的だったのは、院長がそれを了承したことである。院長の決定は絶対である。

強い反対の意向を伝えていたエムやオータムたちも、院長の意見に逆らうことはできない。

するつもりも毛頭ないし、したとしても他の幹部の攻撃を受けるだけだ。

「(ずっと院長と一緒にいられる……つまり、もつと仲良くなるチャンスです！ここは、恥ずかしくても積極的にいかないと……！)」

とはいえ、院長にべつたりのクロシロコンビがいるため、あまりに積極的すぎると排斥されてしまう。

いつも通り、その爆弾胸をチラ見せするくらいのアピールになるだろう。

「(く、クロちゃんみたいにお風呂に乱入とか……そ、それは流石に……！)」

真耶は一夏の試合をそつちのけで、どのようなアピールをするかで頭がいっぱいになっている。

そんな時、真耶が想像もしていなかった緊急事態が起こる。未確認のISがアリーナの遮断シールドを突破して降り立ったのだ。

「なっ………、これは……!?」

真耶は目を見開いて驚きを露わにする。

遮断シールドはISに使われているものと同じ性能である。

それを貫通するということは、ISを簡単に貫くことができるということだ。

それは、かつてない脅威だ。

「織斑、凰。すぐにアリーナから脱出しろ」

千冬がチャネルを使って一夏と鈴音に指示を送る。
他に同じ場所にいた箒もセシリアも、心配そうに一夏たちを見てい
る。

だが、真耶だけは違った。

あのISが貫通してきた瞬間から、すでに一夏たちのことなど忘却
の彼方へと飛んでいた。

彼女の脳を占めていることはただ一つ、院長のことであった。
アリーナに突入してきたISが一機とは限らない。

こちらに現れたISは陽動で、目的は他にあるかもしれない。
その目的が、院長のことだったら……。

「織斑先生！私は生徒の避難誘導をしてきます！」

「おい、山田くん！」

真耶はそれだけ告げると、猛然と走り出した。

その速さは、普段のおっとりした彼女を思い浮かばせない。

千冬の呼び止める声も振り払い、院長の元へと向かう。

専用機を部分展開させてマップを表示すると、やはり未確認のIS
が他にも【何機か】現れていた。

その中には生徒たちが集まっていると予想される場所もあったが、
真耶はそれを一切目にしなかった。

その視線の先には、院長がいるであろう場所に現れたISがあっ
た。

「……っ！」

それを確認すると、真耶はもうなりふり構っていられなくなった。

専用機『ラファール・リヴァイヴ・スペシャルショウ・マスト・ゴー・オン幕は上げられた』を
完全展開、周りにあるものをなぎ倒しながら院長の元へと向かった。

そして、ISの機能の一つであるズームを使うと、院長の背中が目
に入った。

院長が無事であることにホッと一息つく。

「」

だが、彼の前にあの無機質なISがいたことで頭が真っ白になる。
とはいえ、何も考えられない馬鹿になったわけではない。

身体は怒りで燃え上がりそうなほど熱くなっているのに、頭は酷く冷え切っていた。

元日本代表候補生・現孤児院幹部メンバーの技術をいかんなく発揮する。

ブースターをふかして速度を急上昇、一気に敵ISの元へと向かうのであった。



IS学園を襲撃したISの名前はゴーレムIという。

複数機で襲撃をしたのだが、そのうちの一機が院長の前にいた。

ゴーレムIは無人机である。

ただ、自らを創った大天災の指示する行動をとるだけである。

その命令に従い、院長に無機質な手を伸ばした。

一切の感情を感じさせない無機質なISに手を伸ばされることは、

普通の人間なら恐怖のどん底に突き落とされるものである。

だが、院長はただいつも通りニツコリと笑っていただけであった。

その理由が、次の瞬間に明らかとなる。

「——ッ!?!」

ズドンと胸部に強い衝撃を受けるゴーレムI。

見ろしてみると、強靱な胸部装甲がほんの少し凹んでいた。

何らかの攻撃を受けたのだ。

攻撃を受けた場所から方角を計算し、愚かな攻撃者を見つけ出す。

そこには、緑髪で眼鏡をかけた小柄な女がいた。

ISを身に纏い、自分を見ている。

そんな彼女が手に持っているのは、対IS用のショットガンであった。

「……………」

女は何も言うことはなかった。

ただ、その冷徹な目は口に出さずとも感情を伝えていた。

それは、重々しい苛烈なまでの憤怒であった。

感情を持たないゴーレムIであるが、それを通して操作していたどこかの兎の背中に、ゾクツと冷たいものが走る。

——ガン！ガン！ガン！ガン！

動けないゴーレムIに、女の容赦ない射撃が降り注ぐ。

全身に強烈な衝撃を受けて、院長からどんと離れていく。

そうして、しばらく続いていた射撃がピタリとやむ。

おそらくショットガンの残弾が尽きたのだろう。

ゴーレムIはその隙に掌を女に向けて、ビーム攻撃のチャージを行う。

背後で暗躍している兎の干渉によって通常よりも早くチャージが完了する。

「……………」

そして、いざ女に撃とうとすると、先ほどまでいた女がいなくなっていた。

どこに行つたのかと、センサーをフル稼働させて探索する。

とある兎のバックアップのおかげで、女の居場所はすぐに判明した。

探索の結果、女が移動した場所は己の懐であった。

女が構えていた武器は『灰色の鱗殻』。

通称『盾殺し』^{シールド・ピアース}と呼ばれる第二世代機最高の威力を誇る兵器であった。

「……………」

壊れる」

その一撃で、兎とゴーレムIとの交信は断絶することになった。

ゴーレムIはコアに至るまで、無残に破壊されたのである。

普段の穏健な教師の姿はそこにはなく、冷徹な狂信者がそこにいた。

女——山田 真耶は、現役の代表候補生ですら苦戦するゴーレム

Iをあつさりと撃破せしめたのであった。



「あああああつ、院長！無事ですか痛くありませんか怖くなかったですか!?私がつと早く来られていればあああつ!!」

ゴーレムIが粉碎された後、院長の頭を豊満な胸に押し付けて抱きしめる真耶の姿があった。

その熱い抱擁は、院長が真耶の乳房の中でぐったりとするまで続けられたのであった。